英國 エーチ、ダブリユー、ダルケン原著
日本 元木貞雄 訳述

評論 世界人傑詳傳

27-142

No.691/NV.

評論

世界人傑詳傳序

近來少年子弟の教育漸く進み古今賢豪の事蹟を讀で脩身立志の一助と爲すを大に行はる、是に於て傳記の書坊間に溢れ、紙價爲めに高く、其間時に記事の雜駁をも顧みざるに至る、夫れ傳記の世を益するや恰かも現に偉大豪傑の世に出で、其志を達すれは世人翕然として之を稱讃し朝野世に用ひられざるを見ては慷慨悲憤措かず、常に思慕讃歎の中に知らず知らず天下の人心を感化し能く頑夫を廉に懦夫を起たしむるの効あるが如し況んや古今東西の偉蹟を集錄し、永く後世に傳へて人心教化の具と爲す、其世道に益ある固より疑ふべからざるなり

然れども世に明暗文野の別あり、隨て單に偉業の記事を要する時代あり、又史論批評を要する時代あり、人智未開の世に在りては、國人を奬勵するの具、止た記事体の史傳を以てして足れりと雖も、人智大に進み人

々推理力に富むに及んでは、凡ての事皆理論に依らざるなく、殊に偉人豪傑の天下を經理し百年の大計を定むるに就ては、其天性、人と爲りより百般の行爲に至る迄、如何に其時世と關繫を爲しゝや、如何に其時世に能力を用ふることを得たるか、且其辛苦經理の後世に及ぼせる功德如何と詳かに論評を下せるものに非ざれば、已に讀むに適せざるなり、是を以て考ふれは我邦の今日は業已に史論の時代にして枯淡なる傳記は國人中、書を讀む者の腦臆に適せず、故に史論批評の書多く世に出で歷史的推理の思想を盛ならしむるは固より余の冀望する所なり

頃ろ貞雄元木君、英國出版の批評的傳記を飜譯せりとて、余に之が序を請ふ、其書を見るに曾て世界の古今に於て雷名最高き偉人豪傑の性行、事業、及び當代の形勢に就き、詳らかに批評を下せる論纂にして、即ち我邦未た曾て見ざる一種の史論なり、故に其擧る所の偉人豪傑は咸な宇

内の大局に關繫を有し、功德の及ぶところ啻に一國一小天地に止まらず、磊々として萬國の間に浹洽し連綿として千歲の久しきに亘り朽ざるものなり、是れ即ち我邦正に必要を感ぜる所の書にして、洵に文明の世に行はるべき史傳の体を得たるものと謂ふべし、想ふに此書世に出では從來の傳記顏色なからん、余近來業務極めて繁劇、寸隙を得ずと雖も此書、譯成り世に出るを喜び匆忙の際、纔かに囑に應じて卷初に蕪言を附す

明治二十五年四月中澣、合北書屋に於て

羯南陸實識

評論

世界人傑詳傳序

古來數千百年の間、東西萬國の中、偉人豪傑の輩出せる者勝て數ふべからず是に於て豪傑傳あり詳に其言行を錄し偉業の蹟を述て後世に傳ふ、其書實に充棟啻からず、然れども其偉業と當世の形勢との關繫を詳說し照晰犀を燃すが如き者に至りては寥々として稀に見る所なり蓋し傳記の世道人心に益する偏に其著作如何に在るなり

夫れ豪傑の能く當世に顯はれ偉業を成就して不磨の教を萬世に垂るゝ所以の者は固に天性剛勇堅忍にして能く時機に投じ其才能を逞ふするに在り故に豪傑の偉蹟を錄するに當りては先づ其當世の形勢如何を叙し而して後、其人天性の能力を以て世に處するの方法を說くに非ずんは以て後人をして其豪傑の豪傑たる所以の眞相を窺ひ知らしむる能はず、然らざるもの之を眞の傳記と言ふを得ざるなり、予此種の

書我邦に出るを竚つ久し、以爲へらく是れ今世史家を以て任ずる者の責あり其書として出では唯り我が文學社會を益するのみならず世の教化に補あること實に尠小あらざるべしと、然るに今に至る迄世間寥として其書あるを鮮し、唯各國皆其史あり詳かに古今の事蹟を載せ時代に隨て豪傑の遺蹟を考ふべしと雖も史傳、書を殊にせるを以て事端繁劇の今日、學者文人と雖も一々對照考究の煩に堪る能はず、況や身、學業の暇なき者焉んぞ自ら好んで此勞を取らんや、曾ま書肆榊原氏衮然たる一大原書を持し來りて予に飜譯を囑す、取りて之を閲するに即ち世界古今の偉人豪傑を列擧して各、傳を記し其生存時代の形勢を說き其世に處するの方法を論じて釋然偉業の原因結果を會得するに便せる批評的傳記あり、其載する所皆功績宇内を蓋ふの豪傑、無慮四十有餘名、記事頗る詳密、秩然編次して千有餘頁を充せり、名けて「ウオルシース、ヲ

ツ、ウオアルド」(世界の人傑)と云ふ、予乃ち謂へらく是れ我が意を得たるものあり譯して世に公けするに神益する所尠からざるべしと即ち諾して反譯に從ふ

其書中一の日本人を載せず是れ著者の意專ら世界萬國に知られ功德宇内に均霑せる者を擧るにありて日本未だ曾て此の如き人傑を出さゝるが故なり且著者が傳を擇ぶや純然たる武人的豪傑に在らずして主として平和の事業に偉勳ある俊傑を擧げ其功業を論評して赫々萬世に傳はれる遺德の跡を釋明せんと欲するに在るが如し、蓋し世に文野の別あり人文粗野の時世に在りては人皆武將の偉勳、猛士奮戰の跡を讀で喜び之に由りて國人の忠勇武烈を振起すべしと雖も文明日新の時世に在りては專ら平和事業の偉蹟を讀で國人立志の龜鑑と爲さゞるべからざるが故あり、今予の淺學不文を以て此貴重の書を譯す固

より當らずと雖も亦以て著者が世教を益せんと欲するの意を助くるに足らん歟、因て敢て卷首に一言を書すと爾り

明治二十五年卯月上浣　　江東隱士　元木貞雄識

凡例

一本書は一千八百八十五年倫敦出板に係りエーチ、ダブリユー、ダルケン氏原著、ウオルシース、ラヴ、ウオアルド(世界の人傑)と題せる批評的傳記を譯せるものなり故に今之を評論世界人傑評傳と名けて世に公けにす

一原書中編入せる所の傳記凡四十餘名に至り記事頗る詳密にして一千余頁を占むるが故に一時に全篇を譯出せんは容易の業に非ず且書冊甚だ浩瀚に渉り購讀不便にして自然世上に普及せざるの恐あるを以て先づ其中に就き、鐵道蒸車の開祖ヅヨージ、スチブンソン、新世界發見者開龍、以太利救濟家ガリバルヂ三氏の傳を以て初編とし今茲に出板す尙自餘の傳は編を繼ぎ續々譯出して世に公けにするを期すと雖も間々其譯筆上譯者自ら取捨する所あるべし

一譯文中往々讀者に解し易からざる事實を掲ぐるときは譯者自から史を參考して之が註釋を挿み讀解の便と爲す

一譯文は專ら解し易く時俗の耳に入り易きを尙ふが故に大概時文を用ひ敢て史体に

凡例

泥む事を爲さず

一譯文中人名地名等に用ふる文字は凡て讀み易きを主とするが故に便宜に隨て漢字又は片假名を用ひ敢て之を一定せず

譯者識

評論

世界人傑詳傳目次

○讓治、斯迭邊孫傳

緒言　一頁

斯迭邊孫の幼時　一

斯氏出世の始　四

斯氏自ら技能を養ふ　七

斯氏不幸の時期　一〇

斯氏始て工業に技能を施す　一二

問業者の猜忌並に斯氏安全燈の履歴　一五

蒸氣車の沿革　一六

斯氏始てキリングウオルスに於て蒸氣車を製造す　二一

斯氏起業家ピース氏と鐵道敷設を計畫す　二五

斯氏新圖の鐵道始て業を開く　二七

三一

目次

マンチエスター、リヴァプール間の鐵道　三三
斯氏起業の障礙並ゝ蒸車ロッケット號の勝利　三六
○斯氏改良の蒸氣車、並に倫敦、バーミンハム間の鐵道　三八
斯氏の新大計畫並に氏の聰明　四一
鐵道狂熱並ゝ斯氏の正實　四四
○基德法、閑龍傳　四七
第十五世紀を論ず　四七
葡萄牙國、首として航海事業を勉む　四七
閑龍家の宗族　五〇
閑龍船乘と爲りて傍ら學術を修め武技に秀づ　五三
西半球に新世界あるの徵候　五四
起業の障礙並ゝ一家の艱難　五七
閑氏、發見事業の保護主に遇ふと雖も擧行の遲滯を慨歎す　五八
○閑氏の要求並に皇后イサベラの和解　六〇
閑氏パロス港を發し始て新陸發見の航程ゝ上る　六四

目次

閑氏、グワナハニ島を發見して聖薩瓦多（サンサルヴアドル）と名け並に新世界黃金に富めるの徵候を認む　六七
古巴（キユバ）島の發見並にマルチン、アロンゾピンゾンの謀反　七〇
閑氏風濤の險を冒して歐羅巴に歸る　七二
閑龍第二の渡航　七五
バーゾロミウ、コロムバスの渡來並に閑氏怨府となりて西班牙に歸り第三の渡航を企つ　八〇
千四百九十八年閑氏第三の航程ゝ發す並に兄弟禍難の前兆　八二
亞米利加大陸の發見、附たりトリニダッド島並にヲリノコ河の事　八六
殖民地の叛亂、並に使節ボバヂラ閑氏兄弟を捕縛して歐羅巴に送致す　八九
　　九〇
　　九二

閻氏第四回の航海を爲し終に不遇にして病を衝み死す　九七
閻龍に關する批評　九九
○ジョセフ、ガリバルヂ傳　一〇二
以太利國統一の事は實に成し得べからざるに似たり　一〇二
以太利の命脉將に絶んとして纔かに存す　一〇四
千八百三十年に於ける以太利の形勢　一〇七
ガリバルヂの誕生並ゟ其父母　一〇八
ガリバルヂ船乘と爲りて始て以太利の自主獨立を感想す　一一〇
千八百三十年の佛國革命以太利の人心を激昂せしむ　一一三
ピードモントのチャーレス、アルベルト、チャーレス、フェリタス並にチープレス國及び其王　一一四
秘密會社、並にヤング、イタリー黨の首領マーシニー　一一六
ガリバルヂ始てマージューに結ぶ事。チャーレス、アルベルトの怯懦なる所爲並に危險なる陰謀　一二〇

ガリバルヂ並にマーシュー事敗れて逃走す　一二二
南米の共和政治、並ゟガリバルヂ海陸の將軍となる　一二五
カリバルヂ寛大の法皇パイアス九世ゟ書を獻ず　一二八
千八百四十八年の以太利　一三〇
千八百四十九年の以太利　一三三
羅馬府に共和政治を布告す並にガリバルヂの到着　一三五
佛兵、羅馬を圍みガリバルヂ奮戰功あく遂ゟ再び敗績して羅馬を退く　一三七
ガリバルヂ再び船乘と爲り强國の專制以太利に再興す並にチープルスの形勢　一三九
千八百五十九年ロムバルヂー、以太利の有に復す　一四二
チープルス王フランシス二世並にガリバルヂ、細々里に遠征して奇功を立つる　一四四
以太利王國の建設並ゟガリバルヂとヴヰクトル、エマニエル　一四六

目次

ガリバルヂ勇退の理由並にキープルスの凱陣、ガリバルヂの發程　一四八
ガリバルヂ、カプレラの住所に在る事並に其家の貧素なる事　一五〇
カウント、カヴオルの事、並に千八百六十二年ガリバルヂ再び征討の師を起してアスプロモントに捕虜と爲る　一五三
ガリバルヂ晩年及びヴエニス、羅馬を併するを得て遂に其希望を貫ふす　一五六

評論世界人傑詳傳目次終

評論世界人傑詳傳

英國　エーチ、ダブリユー、ダルケン　原著
日本　元木　貞雄　譯述

○讓治、斯迭邊孫傳

緒言

地を開するは古來卓越世の士多く出でたりと雖も、孰ら其爲せる事蹟を察するに其往世の勇氣に富み興實爽快の教訓を後世に垂るゝに至りては、未だ曾て英國ノーサムベーランド產の一抗夫、讓治、斯迭邊孫に及ぶ者あらず、何となれば斯氏が日々に抗業に勤して得る所の賃錢は、固とに微なりと雖も、常に心機を凝して國家將來の爲に準備する所の富は、實に幾百萬なるを知らず、且其成年に至る迄、目に一丁字の識なきも猶よ能く一種の利器を使用して地球上萬里相距れる國々を連接し、交通比隣の如くならしむる術を發明し之を當世有識の士に知らしめて、廣く平和の勝利を制するの勇略と爲り

たるを以てあり、而して其勳功の高大なると遥かよ戰爭の凱陣に勝れり、何とあれば平和事業の勝利に以て全世界の幸福繁榮を作り且之を增加すれ共戰爭の凱陣は事物を荒廢し悲歎を生ずるのみなればなり、詩伯シェクスピーア嘗て言へるとあり凡そ英雄豪傑の中にも或は天性英邁よして特立進取能く大業を行ふ者あり或は唯大業を委任せられて之を行ひ因りて英名を得る者あり、夫れ古來卓拳非凡の名ある輩の行ふ所を視るに、多くは門閥、財產の力を假り、或は主君の寵を負ひ其保護の力に依りて奇才を逞ふし、偉功を擧る者ならざるはなし、獨り斯氏の擧よ至りては全く然らず、其身賤より起りて平和の中原よ馳騁し、世界大鐵道の方案を吾人に授けたるが如き、未だ勝利を爭ふ勇士よして此の如く完全且榮耀なる者は有らず、又未曾て此の如く自ら力め自ら樂しむの格言に稱ふ者は有らず、若し小說家あり思を巧にし筆を健にして、智勇絕倫、既よ機多の勁敵を制し偉功を奏したるも、自ら矜らず、行爲正實にして能く衆の感歎敬服を來し、榮名愈々盛なる人を描出して自在に之が說を作らんと欲せば、請ふ先づ斯氏の經歷せる所を取れ、而かも恐くは之を十分に述べ盡すと能はざるべし、其事の奇にして且驚くべきは豈に小說の比ならんや

人若し斯氏の傳を讀まば其微頭微尾、剛勇正實の氣、充溢せるよ驚かざるはあかるべし、勤し完全の立身と云へる一語以て能く氏の一生を言ふに足り、其手の觸るゝ所は必ず全力を注て之を行ふ、其性樸直にして專ら己れを恃む、是れ其剛勇なる所以にして、動止瞻遲敢て己れを飾らず曾晴鄙野にして純然たる田舍者を免かれずと雖も、言はんと欲する處は必ず深慮して而後よ發し、自ら其眞誠なるを信ずると厚く、他人に意見を陳るよ方りては、强きを畏れず貴きよ阿らず、嘗て白耳義國王レオポルド陛下の召よ應ト「ラックン」宮よ於て王の諮問に對し、其國の石炭地に關する所見を陳るよ從容として毫も憚する色なく假りよ其携へたる帽を炭地よ像りて議論を證明したるが、其狀宛かも一友人よ向て事を談ずるに異ならず、退て後、人に語て曰く「予が帽は粗惡なると其しければ予は王が其裏面を見ることを好まざるべきを恐へり」とて遂よ一笑したりと云ふ、嗚呼、其身素と微賤の一勞夫なりと雖も、剛毅能く艱難の事業に耐へ、加ふるに慧巧奇才ありて常に廉節を守り、己れを恃みて從容自若、遂に絕世の偉業者と爲る、亦故あきに非ざるなり

予は今斯く俊偉にして且有益なる傳を記するに先ち、一の忽せにすべからざる要件を

言はんとす、是れ斯氏が最も卑賤なる勞夫の身を以て常よ艱難と爭ふの大なるを明瞭あらしむるものなればあり、凡そ人の世よ立ち事に當るには未だ曾て身よ教育の利器を備へずして能く其艱難障碍を排し得たる者は有らざるあり、其教育たる唯り私立の學校よ於て之を受くるのみならず、政府之れが必要を認れば國人を誘ふて官立學校に入らしめ、其知識を養ふて人々世務に當るの利器と爲さゞるなし、故に若し斯氏をして此の如き時世に出でしめたらんには、乃ち衆と等しく教育を受け、自ら就學の爲に苦心準備するの歳月を省き得て、其幸福大なるべかりしに、惜哉、當時官設教育の事、未だ政事上の計畫に採用せられざるに由り、斯氏い其教育の利器と買はんが爲、自ら非常の勤儉を行ひ、僅かに其費を辦するを得たり、故に今日より見れば當世教育の完からざるい固より論ずるを俟たず、斯氏は其不完全なる教育だも全く受るとを得ざりしものなり、況や今世衆人の親接し得る情緒なる真書を求むる事に於てれや、斯る不文の時世に出でゝ自ら貧賤の裏よ其才能を涵養し、遂に卓絶當世の名譽を輝したる非詳細は即ち下文記する所を以て見るべし

斯迭邊孫の幼時

今を距ること一百年、英國ノーサムバーランド州、ワイラム村の傍に矮小の一茅舍あり檐端敝はず土を鋪て牀と爲す、一見して貧賤なる勞夫の住所なるを知る、當時其地の人之を「ハイ、ストリート、ハウス」(大通りの家)と呼び、斯氏の出處あるを以て現今猶一の舊跡として存す、斯氏の出生は實に一千七百八十一年に在り、是時恰かも英國の政事界にありては、米國殖民地の叛亂ありて、汝は覺よ米國を鎮制すると能はず」と云へるチヤタム侯の一言、實際に虛ならざるを証し、英政府大に悟りて國會に列あれる貴族紳士も皆叛黨の魁首華盛敦には到底敵ち勝つべからざるものするに至れり、ワイラム村よは同名の石炭抗あり全村の繁榮之に賴りて立つ、斯氏の父を露伯多、斯迭邊孫と云ひ母をメーベルと云ふ、子數人あり、全家正實の名あれども、露伯多は炭抗の火夫に雇はれて一週間に得る所の賃錢、僅かに十二時令(一時令は十二センニー)に過ぎざれば、其貧困甚しく假令ひメーベルい善良憐悧の婦人なりと雖も、斯る些少の所得よりして、全家の活計を維持するは、其困難實に想ふに堪へたり、而して千七百九十二年に至りては、其子愈々增加し、讓治を次男として、總て六名と爲れり、其八口の衣食は纔かよ維持し得るも、所得の賃錢は常よ給し盡して剩す所なければ、一人として其子を學校に入らしむると能はず、左れ

ば少童讓治も亦尋常貧賤者の子に倣ひて、常に僕童の用よ充てられ、且其稚き弟妹の看護等に忙はしく、書を讀み字を習ふ事に至りてハ絶て有ると無し

父露伯多は稍や奇異の行あきよ非ざれども、人と爲り篤實よして家庭の教育に注意し、常にロビンソンクルーソー等の事を談トて兒等を誘へ、且讓治を伴ひて山野を跋渉し禽獸草木を愛好するの念を誘起せり

讓治幼よして娼戯を爲その方は多くは其將來の大事業に關繫せり、其居家、ハイ、ストリートハウス)の前に方りて一條の車道あり、是れ炭坑より埠頭に至る迄、石炭を荷車に積載せ數哩の間、軌道上を馬に挽かしむる運搬路なり、所謂る軌道なるものは當時既に百五十年の間、諸處の炭田地方に種々の形を以て行はれ、讓治は弟妹等と共に戸外に遊ぶ時、其幼稚なる者を看護し、路上を通過する荷車の爲に危害を蒙むらしめざる様注意するを任とせり、而して當時ワイラムの軌道は粗造の木道なりしが、是時誰か知らん期る木道の爲に讓治の心急を化して將來の大發明者たらしめんとは、讓治八歳の時、父露伯多、家を挈てデューリー、ボルン炭地に轉居し、再び矮小なる屋宇を借りて一室よ雜居せり、某詩人嘗て言へる事あり、兒歳の中間ほど多くの深意を伏ずと、少童讓治が考察よ富むの

性、方に此地よ於て日常の嬉戯に現はれ即ち共友ヒル、ザールウォルと戯るゝに粘土を以て機關の形を造り、矢鳩荅の莖を切りて瀛管と爲し塞子木を以て炭籠に摸し、以て坑中より石炭を揚るの機械に擬せり、夫れ此の如く齠齔の時より考察の力、摸造の才よ富みたれば、成長の後に及んで眼力治ねく世界に達せんと疑ふべくもあらず

斯氏出世の始

少童讓治は初め農業上、最下等の勞働に雇はれ、某寡婦の牝牛を牧して一日二邊尼の賃錢を受け、次て鋤馬を導き蕪菁の雑艸を除く事に轉ト て、前に倍する賃錢を得しが、其後炭坑に雇はれて六邊尼の日給より機關を運轉し馬を馭して、日に八邊尼を得るに至りしも猶ほ露胚跣足よて勞働せりと云ふ、已にして讓治は少童中、活潑敏捷の聞へ高く、且善く戲れ善く樂しむ者と爲せり、年已に成童よ達すと雖も、自ら以爲らく「吾が年齢未だ現職の位地に適せず」とて雇主至れば罷められん事を慮りて毎に自ら避匿せり、爾來數坑に歷雇し、終にスロッグレー、プリッヂ坑に於て一週十二時令ある成年者の給料を得るよ至り、人に語りて「吾は始めて一人前の人と爲れり」と言へり

其後、讓治は幾くもなくして機關手の職よ擧げられしが、其機關よ屬する火夫は讓治の

父之を勸め、即ち讓治は十七歳にして其位地已よ父に超越せり、何となれば機關手の任は偶ま機關に生ずる缺損は凡て機關師の指揮を仰がざるも、直ちに之を修復すべき技倆あるものとし、其責の重きと火夫の職の及ぶ所よ非ざればなり、斯くて斯氏は日〻よ機關に親接して其組織及び各部の運動作用を暗知しけるが、恰かも是れ人爲の智工妙案を表する一の奇觀なるが如き想を爲せり、抑も斯氏は新奇なる事物に接すれば必ず之を實地よ試驗して而後に其眞確を認定すると其天性なれば、其後久しく星霜を經て、始めて鐵道よ旅客運搬の業を行ふよ及び、其用よ充る客車よ命ずべき名を撰ぶの議起りし時、氏は熱心に「試驗」の號を以てすべしと主張し、遂に用ひられて試驗號と名くるよ至れり、斯の如く氏は常に非常の忍耐を以て徐々に事を試み、實驗に實驗を累ねて其淵大なる腦中よ充分なる知識を蓄へ、機會の至るに及びて、之を實地に施行し、世を益する の源を養成すと雖も、其時機猶遠く將來に在り、何となれば是時氏は未だ一丁字を知らざるを以て、同僚若し氏の爲よ機關の火光を假りて新聞紙を讀む者あれば、其好意に依りて奇事異聞を知ることを得、或は拿翁軍を進めて以太利と戰ひ勝を制すと聞き、次て埃及人の發明に係る人工熱を以て鳥卵を孵化するの法を聞き、直ちに近郊の鳥巣を探り

て、數箇の卵と雛之を實驗よ試みたるに稍や其效果を見るを得たり、然れども一朝慨然として身に讀書算の識なく、吾が志を達するには、他人の補助を假らざるべからざるを慨み、茲に始て某夜學校よ入り、學に就きしが、其後別に每週一逸尼の授業料を拂ひて畫學の一科を加修せり、此の如く斯氏をして自ら奮ひて我が身を敎育せんとの心を起さしめたるは、前條の覺悟に刺衝せられし故なりと雖も、其嘗て聞けるワット並にプールトンの機械書を讀で、悉く之を解得せんと欲するの心亦大に其原由と爲れりと云ふ、事情此の如くなるを以て、氏は其學資に充てんが爲に、愈々其所得を增加せんと欲して、日々に職業の餘暇を偷み、同僚なる坑夫等の破靴を修覆せしが、事に從へば完全の極よ達すると共天性なるを以て、遂に其精を積で善良なる靴工の技に達し、唯修覆のみならず、能く新靴を調製するを得るに至れり、

斯氏は既よ思慮ありて敏捷なる工人なりとの評判を得たるに由り、更に位地を進めてドリー炭坑の「プレーキマン」を爲りしかば、同僚中、氏を嫉忌する者あるに至れり、「プレーキマン」とは石炭を容るゝ筐と役夫を載する筐を坑中よ昇降せしむる機械を掌るの責に當る者よして、氏が受る所の給料は每二週、當時諸工人の給料は二週每よ受るを常と

せり)三磅五時令なるに至りしかば、是よ於て氏は以爲らく「吾が婦を娶るべきの時至れり」と乃ち近傍農家の一雇婦フランニー、ヘンダーソンと云へる者を擇び其妻と爲しゝが、配偶宜しきを得て、ヘンダーソンは温雅の淑德を具へ、一千八百三年始めて一男子を擧げ祖父に倣ひて之を路伯多と名けり

斯氏自ら技能を養ふ

斯迭遜は少壯の時、誠心雄膽の工夫にして膂力衆に勝れて角觝槌振等の力技を好み最も强壯輕捷の聞えあり、但し他の工夫の如く火酒を嗜み品行を汚すの事なく、巍然として特り群小に異なり、常に能く我分を守り節儉を以て躬ら行へり、加之性質剛毅にして他の凌辱に從はざるは左の一事を以て証すべし、曾て同村にサルソンと云へる倔强の抗夫ありけり、兇悍無賴にして鬼村之を忌避す、斯氏を聞け自ら「ブレーキャマン」の職に代らんと欲して、斯氏の技能を講論し剩さへ暴行を以て氏を恐嚇せしが、氏は毫も之を懼れず、適當の場所と時日を約してサルソンと決鬪し、痛く之を打伏せ、其兇暴を挫きしかば、爾來彼れより和して氏の好を乞ひ、互ひに親睦するに至れりと云ふ、

氏は成年に及びて常に其幼時より教育を受けざりしを慨みとせり、有爲穿鑿の意志强

ければ、吾が耳目よ新奇なる事物よ會へば、必ず力を盡して之を攻究し、其眞理を發見するに至りて之を實地に試み、其效果を見んとを努むと雖も、其攻究の手續に於て屢々隙腐なる誤認の方法を經ひ、徒らに時日と勞力を消費せるを悟りて慨歎すること少からず、然れども其胸中の推考を輙すく實地に施すに慣れたるゝ實に千金を以て換ふべからざる事にて、隨て其所見能く事理を檢驗するの價あるあれば、敢て償ふ所なしと言ふべからず、嘗てニューカッスル府に近きウヰリントン坑に雇はれ、妻を携へて二年間寓居せる時、無盡期運動の理を攻究せしが、初め其運動の秘訣を發見せりと思ひしも、却りて是れ學理上の原則よ非ずして、全く誤認の想像に欺むかれたるを悟れり、唯其堅忍不撓の精神に依りて敏や喜ぶべき效果を得たるは自ら按出して齟齬の器械を創製したるに在り、即ち其精密に且實用的に意を用るの習慣よ由り種々の摸案を作出して或は分解し或は裝合し一々局部を檢して、機能を完修す、此の如くにして徐かよ其機械的の技術を養成し之を實地に施すの時機を待ちしが、偶ま ウヰリントンに於て意はざる事變に遭ひ、即ち之よ處するに其已よ養成せる技能を以てしたると下文の如し

一日氏出でゝ業を執りしが、偶ま其住屋の烟突、火を失せしかば、平生氏を嫉忌せる者、此

機を乘じて彼を窘めんと名を消防に托して、したゝかに汚水を注げり、氏は馳せ歸りて見るに屋内泥水漲りて什具盡く煤塵に塗れ殊に其愛重せる自鳴鐘も破壞して汚穢を被り運動全く止みたれば、今は之を時計師に命じて修復せしむるの外なかりしが、氏は自ら之を爲して機械學上に得る所あらんと決し、悉く其機關を分解して更に之を組立て、遂に完成に至らしめたるに、滿坑の人、其技能に驚かざるなく、是より全村一致し氏を推して其郷の自鳴鐘博士と崇め、是に由りて爾來氏が工業上の新利源を開き、其所得を增加するに至れり嗚呼、亦快からずや

此時に當り、氏は又併せて良好なる靴型を製するの技に達せりと云ふ、

斯氏不幸の時期

斯氏は夫妻睦ましく暮せしが、フランニー不幸にして肺勞を患へ、終に良人と愛兒露伯多を遺して黄泉の客と爲りぬ、是より斯氏の愛情露伯多の一身に鍾り極めて其養育を渥ふせり、殊に氏が曾て受得せざりし教育を授くるを目的とし、其學費金を貯へんが爲、已に善くする所の技多きまも拘はらず、別に裁縫の工を始め、地方坑夫の需に應じて衣服を裁せしが、精巧にして能く時樣に合へりとて大に其賞讃を博せり、久しふして後、土豪

ピース氏の女、斯氏が縫技の巧妙なるに驚き、其熱達せる所以を問ひしに、斯氏は之に答へて、曾て多く坑夫の衣を裁する時、其鈕孔を縫ふに由りて、其技を得たりと言へり、露伯多も亦父の性を稟けて已れ父の慈愛に由りて享得せる教育を實地に應用せんと心掛け、日々に學校にて授かりたる事は、必ず夜間父の膝下に於て復説し、以て父の知らざる所を補益す、後ち罫記法を學び、エヤンバラ府に出で、其會場にて種々の講説を速記し携へ歸りて、毎夜之を正寫し、以て之を父に示しければ、父は喜んで之を賞み大に益する所ありき、要するに露伯多、斯迭邊孫は稟性非凡にして幾んど父讓治、斯迭邊孫に伯仲するの才を懷きければ、長ずるに及びて能く遠大の謀圖に堪へ、曾てマゼー海峽に管形の大鐵橋を架け、其他大工業を行ひて、世の耳目を驚かしゝ事多し

然れども此事蹟遠く將來にあり、露伯多幼稚なる時曾て父はキリングウォルスの炭坑に雇はれて、「プレーキマン」の職を勤めしが不幸にして妻を喪ひたれば、獨り露伯多の愛育に餘念なき内、既に讓治が技術精練の聞ゆ高きに及び、遂に任選せられてモントローズの工場に裝置せるプールトン並にアットの紡績機を監査せんが爲、一時露伯多を某の信任すべき婦人に托し置きて發程したり、斯くて任所に在ること幾んど一年、其間得る所

の給金より凡三十磅を貯蓄し、始めて家に歸りしが、其老父母は已に貧困に陷りて負債に苦しみ、且父は思慮なき同僚の過誤に因りて、蒸氣の爲め眼を害われ、憫れむべし、終に明を失ひて盲者と爲りければ、讓治は直ちに老父の負債を償却し、別に屋舍を營みて兩親を安居せしめ、且錢穀を給して其餘命を養へり

一千八百七年より八年に渉り、英政府交戰の政略を執りしかば、國内到る處の商工業之が爲に沮害せられ、租稅の賦課漸く增して國民の重荷は專ら陸海軍の徵募、兵粮彈藥の增加と爲り、斯氏も此時民兵に徵せられ其免役を得んが爲には幾んど其貯蓄の全額を盡すに非ざれば能はず、故に時の總理大臣ロルドカンスルリーの交戰政略を歎きしも道理なれ、去りとて此事唯歎して止むべきに非ず、唯斯る場合に處するの一策として胸中よ浮び來れるものは、其身海外に移住する事是なり、而して其妹アンは既に讓治に先ちて良人と共に米國に移住せしが、讓治は旅費を缺きて遂に俱に行く事を果さゞりき然れども讓治にして終に其移住の決心を果さゞりしは、寔よ其國の爲、且は自己一身と其將來の榮譽の爲に却りて倖なりと謂ふべし、何となれば妖雲慘澹、殺氣國土を蔽ひ一時殆んど平和の望を失へりと雖も、敢海の波瀾終に靜穩に復して爽快の日光、再び讓治

の身上を照すよ至りたればなり

斯氏始て工業に技能を施す

氏は曩既に自鳴鐘博士の名を得たるが今又機械博士として其名聲を定めんとす茲よキリングウオルスの炭坑に使用せる一種の吸水機、損所を生じて全く坑中の水を吸取するの用を爲さゞるに至りければ同地に其人ありと知られたるアウスボルンのクローザーを始とし近隣の機械士等皆其修復に力と盡すと雖ども絶て其功あければ終よ監督長ラーフ、ドッヅは斯氏に其機械の修復を依頼し且約して言ふ若し首尾よく其機能を回復するを得ば終身足下を其管理の事業よ使用すべしと(是れ自立の性に富める斯氏に取りては寧ろ無用の約束なりと謂ふべし)氏は之を諾して悉く其機械を分解し其缺損と思へる箇所を修治し機能間然する所なきに至て之を與へければドッヅ大よ斯氏を尊信し金十磅を與へて其功勞に酬ふ蓋し十磅の金は斯氏が是時よ至るまで未だ曾て一時に得たることなき所のものなり是に於てアウスボルンのクローザー及び其黨類は互に顏見合せて打驚き讓治、期迭邊遲は機技絶妙の人なりとて名聲頓に喧しく其地方にて老朽用ふべからざる吸水機は悉く氏に囑して修復すべきものとなせり且

フーッ、ドッヂも共百の如く懇篤にして爾來斯迭邊遜氏の利益を加ふるに注意し之をキリングウオルス炭坑の「プレーキマン」より進めて機關手となし其給料を增せしかば氏は幾くもなくして百磅の金を貯蓄し其後千八百十二年に當り偶ま其炭坑の機械匠ロルドストラスモーアザー、トーマス、リッデル死せしに由りドッヂは諸炭坑の所有主並にミストル、スチユアート、ウオルトレー等に說き熱心に斯迭邊遜を薦めたるを以て氏は遂ま其機械匠に擧げられ百磅の年俸を得るに至れり

同業者の猜忌並に斯氏安全燈の履歷

讀治、助迭邊遜は今敢て宏壯魏峨と云ふには非ざれども先は陋しからぬ屋宇に愛兒露伯多と住居し、出ては日に偏强の小馬に跨りて各坑を見廻り其節儉ある活計には先づ不足ならぬ給料を得るの身と爲りたれば世を度るの計は已に達して又慊らぬ所あしと謂ふべし然るに自ら辛苦を忍び正實に勉めて獲たる效果たりと雖ども既に榮を得、利の歸するあれば每に他の同業者の猜忌嫉憎を生せさるは莫く彼のキリングウオルスの機械士等が持て餘したる吸水機を修復の功を遂げし時も是れ學理に依らず法式を取ます無學無識の江湖先生が漫ま自家の經驗を恃み譎詐以て人を嘯すものなりと

て痛く氏を誹毀したり抑も氏が初めて機械上の技術を顯したる時は其學識ま乏しかりしと疑ふべからず左れば其常ま諸般の理を推究するに必らず學者の視て以て曖昧拙劣と爲せる法方によりて歸着を定むると雖からず然れども其有形の技術に至りては專心忍耐倦く其精に至るを勤む其精神の不屈なると常に氏を忌嫉へる敵黨と雖ども既に熊ける所にして且つ其慧敏にして心機に富めるに由り往々學識經驗を併せ具ふる機械學士の誤認を匡正するとあり然而して茲に又斯氏は工業上に他と機軸を爭ふの事を生じたれば敵黨愈々猜忌嫉憎に堪へず氏を危害に陷れんと謀るに至りしが氏は大膽に之と爭ひ遂に全勝を占めたると彼の腕力の鬪爭に奸惡の坑夫サルソンを擊伏せたるが如し、其工業上の爭とは何ぞや即ち有名なる安全燈の爭論是なり當時凡そ炭坑あるの地方にては坑中の炭酸瓦斯時に火を得て爆烈し許多の人命を失ふと常なれば世擧て之を憂へ學識ある人は何卒して此禍害を豫防するの法術を發明せんものをと種々ま心を用ゐける、殊にキリングウオルスの炭坑は其坑內の延長百六十哩ま亘りて屢次爆火の災に罹り千八百十二年の如き之に死するもの成丁少童を合せて無慮九十人ま及へり左れば斯迭邊遜は斯く無辜の生命を失ふと夥しく且其妻兒の跡に殘

りて日々饑渇に迫る者年一年に增加せるを悲しみ業已に此禍害を豫防し得べき安全燈の創製に心機を凝し居たり、其後千八百十四年に至り一日出て丶職に在りしが卒かに愕きて曰く「嗟坑内最下の本層火を失せりと直ちに馳て坑口に至り躬ら筐に乘りて坑内に下さしむ筐の坑底に達するや躍り出で坑夫六人を麾きて已れに隨いしめ縱横之を指揮して磚瓦を積上げ煉灰石もて塗固め咄嗟の間一の防壁を築き成して空氣の通路を塞ぎ以て危害を未然に防ぎ遂に其炭坑と坑内無數の生命を救へり、其紀律號令の嚴にして且動作の勇猛なること宛かも鬼神の如くなりしと云ふ、是に因りて氏は坑内に用ふへき安全燈の必要欠くべからざるを感すること愈々切にして更に其熱心を奬めたれば愈々前日に繼て數回の試驗を累ね、時に或は學理の原則に背くとありと雖ども非爲す所、巧みに思ふ所の趣意に合し終に其困難の點を解破するを得たるが故に始めて坑内の燃燒瓦斯に火を失せざるの燈を製出するに至れり

氏が自己の心機創製に成れる機器の効力を實地に試みたる其狀況は恰かも百戰百勝の勇將に異ならず而して戰爭の勇は人命を害するの損われども斯氏の勇は之を救濟するの事業に著はせり、其の單身燈を持し毒氣陰々として聚まれる坑奥に進入したるは恰かも兵士の彈丸を冒して敵陣を衝くに似たり、氏に伴へる黨人は坑内に於て遠く炭酸瓦斯の至らざる處に停まり燈火一たび失すれば斯氏の死立ところに至るべきを知メタンガス り手に汗を握りて試驗の成蹟を窺ひ居たり、氏は燈を持し進んで深く危險の地位に入り即ち燃に炭酸の毒氣を噴出する孔口の線に到り倒も臂を伸して颯々と吹上る瓦斯中に燈を差出し之を久ふする内、燈火は瓦斯の噴出する勢に吹き滅されたれども其間絶て火を失するの眩なかりしかば試驗の效果茲に全く擧り氏の勝利疊ふるに物なし、

斯氏が創製せる新燈の安全なるを確証すると此の如し、然れども其精妙なる技術を以て種々の足らざる所を補ひ遂に實用に適する完備の安全燈となし始めて之をキリングウォルス炭坑に使用するに至り其名を讓治ランプ(斯氏安全燈是なり)と稱へ坑夫等の貴重せる物と爲れると爾來五十年に過ぐ、然るに礦業上の安全に關する事件は當時齊しく他の有力なる學者紳士社會の問題となり當時化學者として名聲夙に英國に顯はれたるサー、ハムプレー、デヴィーと云へる人あり自らニューカッスルの諸炭坑を巡檢して詳密なる報文を作り千八百十四年十一月、即ち斯氏の燈、安全に試驗の難場を通過したる後、一閲月にして之を國立學術會に提出し且つ自家の安全燈を示しけるに會

議之にプゲサーラムプ(達微氏安全燈是なり)の稱を附し其有功を承認したり抑も此二傑の殆んど同時に安全燈を製そるや初より互に其爲す所を知らず實に自他相類ると無くして各其心機に發する所を實用に施さんとせり然れども其創製の先後を論するときは斯氏の燈、既に達氏に先ちて成れると疑ふべからず、達氏安全燈の國立學術會に出るの後、幾もなくして斯氏は其朋友の勸告に從ひ自らニューカッスル學藝協會に臨みて自製安全燈の說を陳べしが達氏も亦其後幾ならずして其會に臨み自家の安全燈を說明したり其時聽衆は英國北部地方人の性として巧みに之を評して曰く「嗚呼何ぞ其斯氏の創製に成れる安全燈と相似たるや」と

事情此の如くなれば兩燈創製の先後と其功能の優劣に付き爭論を生ずるは自然の數にして達微氏が學術上の名聲一時能く論壇の勝を已れに歸せしめんとするの勢力ありて其黨中苟くも學識あるの輩い地迭過遲を以て自己の才力に賴り知識を得たるの人と倣さず爭論息むの後と雖ども常に之を冷笑せりと云ふ、然るに斯氏に左袒するの黨は賞金を出して其功勞の價値を定め、達微氏の黨二千磅を出して其安全燈創製の勞に酬ひんと議定せし時、斯氏の黨は直ちに帳簿を製しキリングウオルス炭坑の一所有

者ロルド、レヴンスウオルス氏に先ちて自ら百「ギニー」(一ギニーは我が五圓許)の醵額を記して其名を署せしかば其他の黨員之に倣ひて各〻若干の醵額を記し合計千磅の額に上りしが猶其他石炭場の坑夫等若干金を醵集し併に銀時計一個を贈らんと同じく帳簿に記入せり其石炭場にては現今猶斯氏安全燈を貴重すと云ふ

蒸氣車の沿革

安全燈の爭論方さに熾なるの時、斯氏は別に鐵道の事件に思を凝し從來の如く軌道に獸力を用ゐずして之に代るに蒸氣車を以てし以て運搬旅行の利器と爲すべきの理を攻究したり當時石炭、人夫を載せ馬に挽かしめて軌道に運搬するの法は已に二百年間行はれ唯初め木製の軌條を以てしたるもの、後漸く鐵製の軌條を用ゆるに至りしなり斯氏幼少の時已來其舊居家の前に通ずるワイラム炭地線路も終に木道を廢て鐵製とあり、彼の有名なる將軍アウトラム氏の父ベンジャミン、アウトラムと云へる人、所謂る「アウトラム、ロード」(阿氏鐵軌道)の製を以て稍や之に改良を施せしが是時已に軌道の獸力を廢して蒸氣力を用ふべきの論國內に起り「蒸氣車は何人の發明せるものある乎」と云へる問題に關して辯說交々起り甲論乙駁の聲天下に籠しく各黨皆共推す所の候補

者に其名譽を歸せしめんとせり獨り蘭伯多、斯迭邊遜(讀治、斯迭邊遜の子)ニコーカッス
ル學藝會の宴席に於て公平なる演說を爲しゝが其論旨實に正を得たるが如し其言に
曰く「蒸氣車の世に出でたるは蓋て一人の心機に成れるものに非ず抑も此機關の事業
上有益の利器と爲るに至る迄は之に關するの發明時々繼て起り許多なる創製者の心
機を累ね積て以て此大結果を成したるなれば其勳功名譽は即ち其勞を分てる發明者
共に之を享くべきものあり其他の學藝上の發明概ね此の如きあり」と今蒸氣車の發明
進歩に付て其沿革を略述すれば第一之か爲に勞苦經營したる者はソロモン、コークス
にして其知見衆に卓越し世と合はざるが故に狂人と呼ばれ失望憤悶精神殆んど常を
失ふに至れり、次でセヴオリーは幾んど蒸氣車の原理を發見せんとするに至りて果さ
ず、ヴユームス、ワットは蒸氣機關の發明ありと雖ども是れ蒸氣車の一部分を爲すに過
きず遂に之を大成するに遑あらずして已む佛人コグノットは大砲の運搬に蒸氣力を
用ゐんと欲し、ブールトン並にワットの工人中錚々の名あるマードックは夙に蒸氣車
に志せる先覺發明家の一にして殆んと之を大成せんとするに至りしが其勳仕せる會社
の爲に沮遏せられて其運轉試驗を斷念せり、其友シミントンは初め蒸氣車を造り後に

及びて通常の道路に運轉すべき蒸氣傳車を造れり、右二氏の雇主たるソホー會社は實
に鉄道に用る固着蒸氣機關(固着蒸氣機關とは一方に之を据付け置き其より軌道に沿
ふて索或は鏈鎖を施し之に由りて運貨乘客を曳くものを謂ふ)を製造するに盡力した
りと雖ども之が試驗に要する時日と勞力を以て全く得失相償はさるの費なりとす
るに至れり、シミントンは殊に航海に用る蒸氣機關の發明に因りて其名譽を得たる人
なり

リチヤード、トレヴエシックと云へる人あり曾て蒸氣車を造りウエールス洲マーシル、
チドヴヰルに鉄道を敷設して之を運轉せしめ又曾て市府ケムボルンに於て其友ヴヰ
ヴアンと協力し蒸氣傳車を造りて通常の道路に試轉し漸く改良を加ふるに隨て其
距離を延長し遂て之を首府倫敦に輸送し其運轉作用を衆人の觀に供せしが猶も不完
全の點を發見して之が改良に着手せる内、其腦中知識方圓に富むに拘はらず一時に多
きを貪り忍耐節抑の性に乏しきが爲に未た完全の效果を獲るの熟期に及ぼさずして
終に之を半途に放棄し車を轉じて蒸氣車製作の業に從へり、是れ世人の方に注目せる
要件なり、其の南米伯露國より歸るの後、强壓力の蒸氣機關及び之に用る鑵に改良を施

し之が專賣特許を得んと努めしが成らず終よ千八百三十二年僧石の儲なくして死せり

然れどもトレヴェシックが苦心經驗したる其功空しからずして爲よ實業家の注意熱心を促かしワイラム石炭坑の持主クリストフォル、ブラッケットは殊よ倫敦よて蒸氣傳車の運轉を觀て大に其効驗の著るしきに感じ其使ふ所の監事者ウヰリアム、ヘッドレーと謀り其鐵道の石炭車を曳くに蒸氣機關を以てすべしと決せり、是より先きリーヅの近傍なるミッドルトンの石炭地にてはブレンキンソップと云へる人既に蒸氣車を造り石炭の運搬に供して頗る好結果を得たりと雖ども其機關車は齒ある軌條の上に齒輪を轉せしむるものなればヘッドレーは種々經驗の後摩擦の其理を發見して謂へらく「若し機關車の重量よして其曳くべき載貨の重量と相稱ふときは齒あき平滑の軌條を用るも其摩擦にて車輪を轉せしむるよ足るべければ敢て齒ある車輪を用るを要せず」と蓋し當時の技術家い平滑なる鐵軌面に車輪を運轉せしめんとする時は車輪滑り去て進まざるものと思惟したるなり、偖てヘッドレーの創意に出る蒸氣車成りて之を「パッフィングビリー」(叱咤する棒と云ふ義)と名け他の猜忌嫉憎あるにも拘はらず

爾來ワイラム鐵道に於て日に空を叱咤し運轉快駛するを見るよ至りしは是れ蒸氣車發明の歷史よ於て其發明者の名譽と共よ特に大書すべき重要の事實あり

是時恰かもニューカッスルの商人輩亦結合して蒸氣車を造れりと雖も其平滑軌條を應用するの理に嗜きが故よ軌道に沿て鎖條を張り以て豫想せる車輪の滑脫を防がんとまたれども終に成功に至らずして廢絕せり

斯氏始てキリングウォルスに於て蒸氣車を製造す

斯迭邊遲は既にワイラムに於て運轉する蒸氣車を實見し後千八百十三年よ至りブレンキンソップの蒸氣車の一コックスロッヂの石炭地に輸送せられたれば乃ち之を按檢するの機會を得て其實效を試みしが其明敏有爲の智を以て忽ち將來を洞見し以爲く「國內一般の軌道悉く獸力の使用を廢し蒸氣力を換用するに至るは遠きに非さるべし」と、常に深く斯氏の技術に敏あるを信するロルド、レヴンスウォルス輙ち資金を投じて蒸氣機關車を造らしめ之を「マイロルド」(吾が主と云ふ義)と名け重量三十噸の載貨を一時間四哩の速力にて曳かしめしに果して著るしき效果を奏したれば尙ほ數箇の機關車を製してキリングウォルス坑業の用よ供せり、其蒸氣車は皆斯氏が先進發明者の

創意を改良を加へたるものとして其樞要なる點を擧ぐれば、第一機關に蒸氣の吹管を加へたる事是なり、之が爲に機關常に蒸氣の勢力を維持するとを得て大に進行力を增し且燃料石炭の消費高を減省して獸力を用るよりも其出費を廉ならしむるの利益あれば實に能く經濟の要點に合したるものと謂ふべし、左れば此改良は蒸氣車の發明より於て實に決着の點と爲せる處よりして斯氏が此樞要なる發明家の位地を占ると猶はッットの凝縮蒸氣機關に於けるが如し、然るにヘッドレーの子某、此事を論じて其父曾て既に吹管を具ふる蒸氣車を造りたれば此樞要發明家たるの位地い業已に父の占る所なりと言へり、故に此事實に付ては稍や疑あきに非ずと雖ども兎角斯氏新製の蒸氣車は舊製に大なる改革を加へたる者なる事、又其數臺の新汽車の多年間キリングウォルスの軌道に運轉したる事は現に疑ふべからざる事實あり

殊に斯氏の常に固く執て疑はざる所のものは軌道と汽車との關係是なり、通常の道路に於ける蒸氣傳車の事は指て論せず、平滑なる鐵軌上に蒸氣車を運轉せしむるの利益は重に其車輪の運轉するに隨て鐵軌の摩擦減少するに在りと爲し之を喩へば鐵軌と車輪は夫と妻の如く互ひに分離すべからざる關係を有するものなりと言へり、此點に

付ては當時の學者多く之を疑へりと雖ども特り斯氏は斷然心を決し充分なる根據を取りて其說を守れり、凡そ氏が一び信じて其確と爲せる事は曾て其其を認ると無くキリングウォルスにて氏を用る礦業家は皆其人を得たるを誇りて其名聲愈々高きを喜び猶ほ爭ふて氏を聘用せんとする者多し

千八百二十年氏はブラック、カラートンに住める農家の女ミス、ヒンドマーシを娶りて後妻と爲し交情互に厚く且露伯多、斯迭邊も亦甚た父の結婚を喜べり、何となれば繼母、心を盡して露伯多の敬愛を得んと努めたればなり

斯氏起業家ピース氏と鐵道敷設を計畫す

今ま機械匠斯氏の伎倆愈々廣大なる區域に著はるゝの時至れり、蓋し工業盛なる大市府の間に鐵道を敷設し以て彼此交通の便を開かんと欲するの望い既に二十年間某の遠慮ある實業社會の間に發起し同友會にて名聲殊に著るしきダーリントンのエドワード、ピース首として之を唱へウエストブロムウヰッチのウヰリアム、ジエームス之に亞ぐ、ジエームスは曾てトレヴエシックの爲す所を見て大に其心を奮勵し千八百三年に於て早く已にマンチエストルとリヴアプールの間に鐵道を敷設するの企圖を起

したれども其知、世の俗見と合はず徒らに無益の事に心を勞するの狂愚者とせられ獨り許多の資金を失ふの後止むを得ずして土地測量の本職に復し空しく其圖を懷きて窮かに時機の至るを待ちしが終に讓治、斯迭邊遲を起業の友とし得て宿望を遂ぐるとなり下條に見るが如し、エドワード、ピースは富豪の人なれば共力能く同志を結合してストックトンとダーリントンの間に鐵道敷設(ピースの初め發起せるものは馬力を用ゐるの鐵道にして蒸氣車を用ゐるの鐵道に非ずと知るべし)の事業を起すに足り、初めは同市府の間に於て單に石炭其他商貨の運輸に便せんと欲するの趣意に出で旅客を載するの事は其價に値るの收益あきものと爲せり其敷設の許否議案は國會に提出すると三回の後、終に可決せらる、時に千八百二十一年なり

一日閑談ある起業者ピース氏の家を訪へる二人の客あり之を誰とかする、一人はキリングウォルスの視察者ヴードにして一人は沈毅謙遜、且賢能の機械匠讓治、斯迭邊遲其人なり、ヴードの紹介者となりて斯迭邊遲を伴ひ來り初めて新企圖の事をピースと商議せしめけるにピースは捷くも斯迭邊遲が鐵道と機械に關し万金換ふべからざる意見を抱持せるを知れり、斯迭邊遲は蒸氣機關車は其曳進力正に五十頭の馬に當るを盲

ひピースが企圖の鐵道に馬力を使用せんと欲するの無益あるを辨じ且曰く「足下請ふ試みよキリングウォルスに至り予が蒸氣機關車の轉輾營作せる實況を見よ實見は即ち信を置くの本なり」と、商議の後ピース斯氏を同社の重役に披露せしかば會社即ち使者を發し書を齎して斯氏を招聘したり、然るにキリングウォルスにては斯る紳士の其地にありとは知る者あければ使者は失望して空しく書翰を持し歸らんとせしが是れ乎即ち其地の機械匠讓治、斯迭邊遲あるとの始めて知れければ即ち村人の指教に從ひて氏の矮屋に到りける

發起會社にては其鐵道に馬力を使用するの意を棄て之に代て固著蒸氣機關を採用せんと欲したれども斯氏は固く初めの言を執て變せず、會社企圖の目的に合ふものゝ獨り自輾曳進的の蒸氣車あるのみと主張せしかばピース遂に自らキリングウォルスに到りて親しく斯氏が蒸氣車の一に就て其實效を目擊し乃ち其意見を變じて斯氏に從へり、爾來斯氏は會社の需に應じ三百磅の年俸を得て敷設線路の技士と爲り線路を測量し且ピースに勸めて敷設定款を修正して其鐵道を蒸氣車運轉の鐵道と定め貨車と共に客車を設くべきものと爲さしむ、其線路測量中、斯氏は一塊の麵包と一片の鹹豕肉

を衣嚢に携さへ以て午餉の用に備ふ、線路到る處の農人喜んで之を迎へ延て屋舍に入らしむ、斯氏即ち許を請ふて携る所の冢肉を炙り餉を啖す、蓋し其性、誠實淳厚あるが爲に人々をして欵待措かざらしむるなり、斯く其身尊貴の位地に推されたるは偏に其正實の行に由りて此に至れるものと信ずと雖ども尚前途遠せんと欲する所の目的は日夜須臾も思慮を離れず、地方の諸新聞紙は太く新圖を喇り旅客運搬を以て鉄道の一事業と爲さん抔とは全く無謀の所爲なりとて嘲笑罵詈を極めたり、然れども斯氏は其計畫の成功を疑はず已に之が爲に多年の思慮を費やしたる事なれば斯る貶言の爲に挫折すべきに非ず毅然として之を勵るの色なかりき

斯くて其鉄道全く竣工に至りだれば某日斯氏は其子露伯多及び朋友ジョン、デ#クソンと共に一場の酒を命じ無事成功を祝せり、其時遠く國家將來の事を前言したるを#クソン即時に筆記したるものあれば之を左に掲ぐ、其言に由りて見る時は斯氏の明能く百世の後に徹し遂に人類交通の習慣に一大改革の起るべきを預知したるを知るべし

予は今敢て汝に言ふべき事あり惟ふに少壯の汝等は必ず其生存中、當國運搬交通

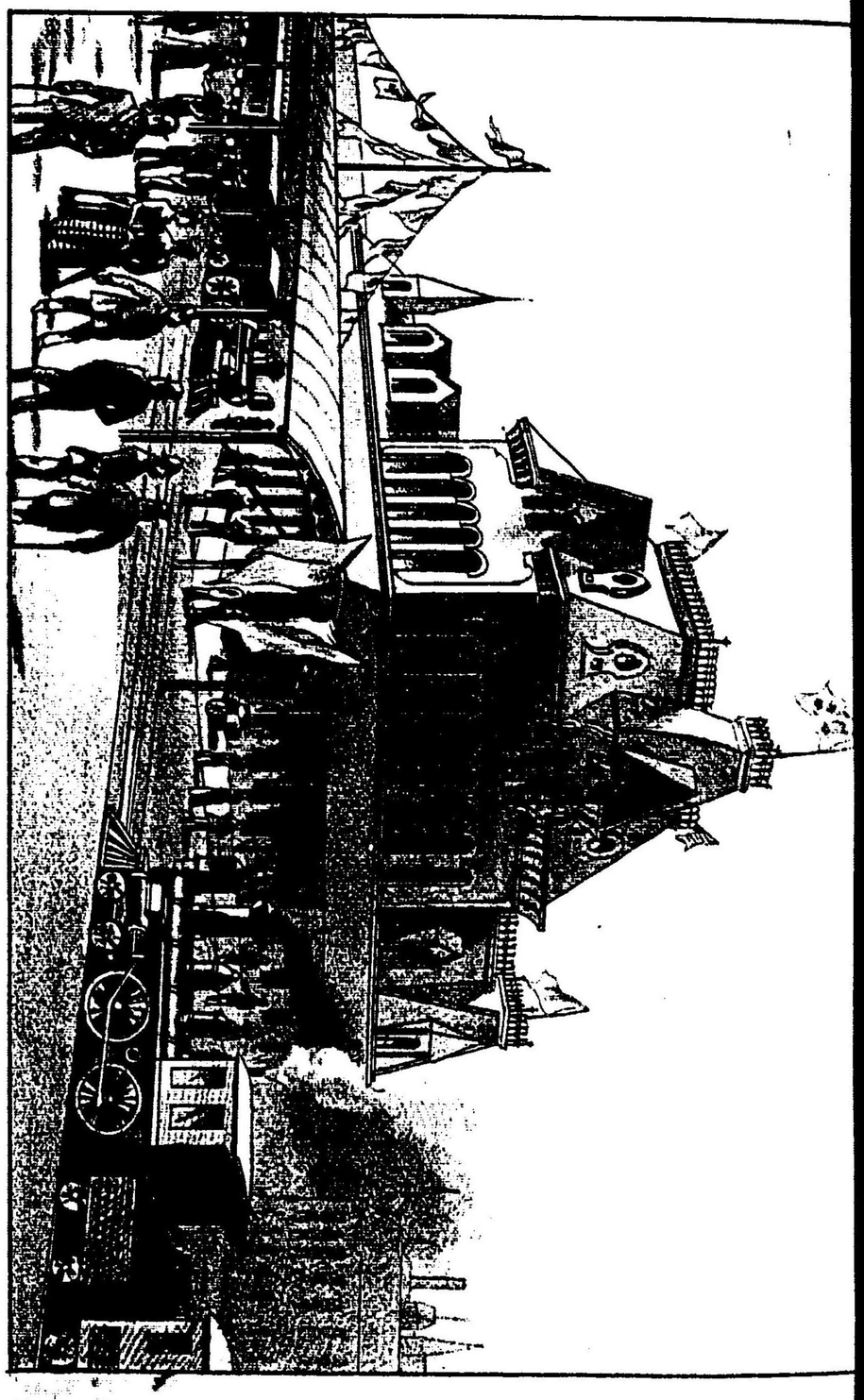
の諸方法盛く鉄道の爲に廢替せらるゝの日を見るべく、即ち信書物品盛く鉄道を以て運送し王侯臣民も亦皆鉄道を以て其通行の大道路と爲すべく、卑賤の職工と雖も徒歩せんよりも寧ろ鉄道に乘るを榮ありとするの時至るべし斯る時機に達する迄は殆んど制すべからざるの困難に遭ふと雖ども次之あるべしと雖も其到達の必然なると毫も疑あるとなし、予も亦其日に至る迄殘生を維ぎ得て親しく其實況を見んとを望ふと雖ども人事の進歩は按外に遲徐なるものなれば是れ或は望むべからざるの事あるべく、現に吾がキリングウオルスの蒸氣車も予が發明試驗に好果を得たる以來幾多の困難を經歷すること十有餘年の後、始めて之を使用するに至れるものなりと

斯氏新圖の鉄道始めて業を開く

ストックトンダーリントン間の鉄道工事中、其軌條は鑄鉄を用ふべき乎、將た鍛鉄を用ふべき乎の問題起りしとき、斯氏は固く鍛鉄の強剛久しきに耐ふるを主張し、鑄鉄は機關車の重量に堪へずして常に怪癖を要すべしと言へり、是より先き、氏は友人ロッチと協同して鑄鉄の專賣特許を得たれば今ま會社に對する此助言は即ち其藏中より五百

砿の利益を失ふよ當るも誰とも共既にキリングウオルスよ於て經驗し飽くまで鍛鉄の用ふべきを知れるが故よ己れを欺き且人を罔るに忍びず斯くは其裏を吐露するに至れりと云ふ、是れ氏の正廉潔白なるを證す、るよ足る、其時ロッチ大に怒りて曰く「斯迭邊遲は宜しく蔦ひるよ鑄鉄を以てすべきなるよ反て之を貶す、彼れ何ぞ共同の利益を思ふの海きやを然れども是れ斯氏が事物を審斷するの性に非ざるを奈何せん、偖てストックトン、ダーリントン間の鉄道終よ開業式を行ふの運よ至り其景況を略言すれば一人の旗手、馬に跨りて「一人の危難、萬人の便利」と大書せる旗を持し、機關車の前に立ちて駛す、其後に續きて斯氏躬から「ロコモーション」と名くる第一號機關車よ乘りて之を指揮し、乘客を以て充ちたる附車纍々として長列を爲し來る、其重量實に九十噸なりきと云ふ、氏は頓て旗手を線路より避けしめ速度を加へて一時間十五哩の割合に運轉せしめたり、開業の式首尾能く終りを告げ、後數日を出でずして斯氏「エクスペリメント」斯氏自製の試驗車と云ふ義を名くる客車を列中第一位に加へ一時之を英國よ敷設せる大鐵道の客車と爲せり

是より先き斯氏は蒸氣車を製造せんが爲に一の工場を設けんとの企圖を起し、其資本



に充つべきもの自から有する所の金千磅あり、是れ概ね發ヨ斯氏安全燈發明の爲に石炭地の坑夫等より贈る所に成る、是時に方り最も厚く氏を信用せるピース氏他に先ちて五百磅を醵出せしかばジョン、リナヤードソンも亦次て五百磅を出せり、是ヨ於てフオルス街に一の蒸車製造所を設けしが漸く盛大の工場と爲りて一時は熟練の職工を數出せり、其工業上氏は喜んで故郷ノルサムバーランド出身の者を用ゐしが、曾て言て曰く、彼れ能く有形の物を工作すと雖ども人心を工作する(能く人を變化せしむるの意)に至りては其最も難しとする所なり)と

マンチエスター、リヴワプール間の鐵道

既に成功せるストックトン、ダーリントン間の鐵道は今新たに計畫せるものヨ比すれば寧ろ甚だ小事にして其遭遇せる困難妨碍も亦甚た輕しと謂ふべし、爰ヨ業を起せるマンチエスター、リヴワプール間の鐵道い其區域廣大なるに從て其敷設に對する困難妨碍の力亦極て強く凡そ其線路に沿へる地方の富豪貴族にして名望勢力ある者は皆反對黨の魁首となり、舊來地方に存する無數の營業皆鐵道敷設の爲に損害を蒙るものとし、到る處に猛々之を非議し衆力一致して之に抗拒す、殊にブルピー並にウヰルトン

の両侯は線路の其所有地を通過すべきを聞て齷齪なる田漢、坑夫等を募集し處々に潛伏狙撃して線路の測量者及び其助手の一隊を打敗らんと欲し、ブリッチウオーター侯所有の運河管理者ブラッドショーは新設鐵道の爲よ從來其運河を以て營めるマンチエスター、リヴァプール間の棉花運漕の利益を奪はるべきを知り、夥多の根人逃手を率ねてグルビー、ウヰルトンの両侯ょ運合し、至るを要して斯氏を撃伏せんと備へたり、其勢の勁強猛烈なるが爲に初より斯氏の助に依りて其計畫を成就せんと皆へるシエームス其人も一時殆んと之に屈服せんとするの擬樣ありしといふ、夫れ地方線路測量の困難なる未た曾て之に過る者あらず、假令ひ其成功の完からざるもの有りと雖ども敢て怪しむに足らず唯能く其工を竣るに至りしを以て奇と稱すべきのみ

斯の如くよして線路の測量終に全く竣を告げたれば會社は國會に願書を呈出し、新設鐵道の許可を得んとするよ當り、國中之に反對する者は演說に新聞紙に力を極めて其非なるを論じ、只管國會の輿論を刺衝して新國を敗滅ょ陥せしめんと欲し、王黨の機關たる新聞紙「クォーター、レヴュー」の如き百方、文を弄して攻撃罵詈し、其極之を以て「沙汰の限りの所爲」なりと云ふに至れり、其論に曰く「斯る害悪不當の設あるより牧畜農業に

最も恐るべきの影響を起し、社會を攪り人心を汚穢ならしむるの悪結果を生ぜん、即ち牧馬の業先づ衰へて漸く其數を減じ終ょ英國内に其跡を留めざるに至るべし、假令ひ之ありと雖ども將た何の用に供すべきや、其他路傍を通過する滊車の火、散て到る處ょ火災を增加し、唯人家の其災に罹るのみならず田畝の間、穀禾乾艸を燒くの光焰、常に地方に絶るとあかるべし、但し乾艸は既に之を食ふの馬なきを以て、其火災ょ罹るも、敢て憂ふべきに非ざれども、烟雲大氣を汚して悪疫之ょ胚胎し、吾が英皇陛下の臣民をして常に呼吸に堪へざらしむ、且夫れ旅舍の主人なり、驛車の馭者あり、馬車製造人なり、凡そ間接ょ直接ょ、生業を道路往復の繁に頼む者皆其業を失ふに至るべし」と而して「レヴュー」記者は斯る憂懼を懷くと雖ども鐵道其物は不變不動にして敢て害なく唯蒸氣車の終に業を失て運轉を廢し、其目的と齟齬するに至るの日は遠きに非ずとなし以て、自ら其心を慰めり、千八百二十五年國會の開期中、マンチエストル、リヴァプール間の鉄道許否の議案一旦下院の斷訟委員會に附せられけるが、其委員會には身ょ絹の長衣を着け、頭ょ鬘を被りて威儀儼然たる貴紳多く席を占め、力を極めて其議案を排撃せんと待構へたり

斯氏起業の障礙並に滊車「ロッケット」號の勝利

斯氏は人と爲り事を行ふに長じて之を言ふに短なり故に事業上の困難は常に甘じて之に當り且之に打勝つとも甚た容易なりと雖ども之に處するの方法如何に關し巧みに之を辯明するに至りては每に其難しとする所にして、其親友と縱話し或は熱心激論を爲すの外は言語澁訥して且方式なく、其國會議員に出で長衣の貴紳に對するの時も苛酷なる法律家の難問に會ふて殆んど辯に窮せりと云ふ、曾て人に語て曰く「予は議廷に出で鉄道事件の証人と爲りて委員會の尋問に答へしが、到底委員會並に予自らを滿足せしむるの語を見出すを得さりければ、問答少時の後若し穴あらば入らんとを欲せり、其時反對の意見を持せる十人の狀師予と對詰し成るべく予を惑乱せんと努め、或は予を怪みて英人に非さるかと云ひ、或は狂人なるべしと諷せり、然れども予は其舌鋒に折けず飄然心を決して予の計圖を維持したり」と畢竟氏は此決心あるに由りて熾火の如き猛烈の抗拒を排して終に其賞賜を貰けり、其對詰辯難三日に亘れりと雖ども、是れ猶は障碍の初步なるのみ、其後議案一旦敗れて議場外に却けられしが次期の國會に於て線路に變更を加へ、「ブルヒー」並ひに「セフトン」兩侯の所有地に渉れる部分を修正し

て議案を提出したれば、終に議場を通過せり、但し其線路變更の爲に工事上、要する所の費額二万七千磅なり、是に於て氏は技士長「レンニー」の異議を挾むにも拘はらず會社の在留技士に選任せられ、年俸千磅を給せらる、其職に就くの後幾くも無くして斯氏の職務上に一大難事起り來れり即ち「チャット、モス」と云へる大沼に鉄道を架せざるを得ざる事是れなり、其沼は上面より深さ三十四尺に至る迄總て軟土を以て成り且其下層概ね流沙なれば沼身常に動搖して迚も鉄道經過の處と爲すべからず、流石に當時熟練の名ある技術家も皆考案盡きて匙を投げ、斯る非常の困難と爭はんは狂人に非ざるより は爲さゞる所なりと言ひ、會社の重役等も亦皆之に當惑し、假令ひ之に工事を施し得るものとするも、深窟不測の沼中に投ずべき材料殆んど際限なかるべしと爲し、助工手等に至るまで其難場に驚かざるは莫かりき、然るに斯氏は敢て之を事ともせず躬自ら其工事を擔當すれば成功請合なりと言ひ、遂に其工を完ふして沼上に鉄道を架設せり、且有識の技士「ガイル」は其工事に二十七万磅を要すべしと鑑定したるにも拘はらず斯氏の費す所値かに二万八千磅にして足れりと云ふ

又に又斯氏が身に一大難事の落來れるものあり、今其勞力を助けんが爲に其子「路伯多

の亞米利加に在るを呼戻せり、技士レンニー並にアルフォルドと云へる者、斯氏の才力を忌みて故らに其意見に反對し、既に敷設せる鉄道に蒸氣車の用ふべからざるを唱へ黨を結ひて其志望を妨げんとせり、然るに斯迭邊遜父子は固より蒸氣車使用の成功を疑はざれば、熱心よ其素志を辯護し、之を實地よ試みて雌雄を決すべしと言ひ終にレーンヒルに於て蒸氣車の大競走を行ふに決し、四個の機關車を以て共用に充てり、即ち漢車「ノヴュルチー」號はプレースウエット並よエリクソン之を指揮し、「サンスパレール」號はチモター、バックウオルス之を指揮し、「パーセヴァランス」號はポルストール之を指揮し斯氏は「ロッケット」號に乘りて其機關を督し、衆の觀る所に於て、目覺しき競技を演せしが「ロッケット」號遂よ勝ちて五百磅の賞金を獲、且其製作巧みよ消費を省き効能を多からしむるの術を得たるを明かにせり、其後「ロッケット」號はカーリスル侯所有礦山の借區人タムソン氏の手に渡りて石炭及び石灰を運搬するの用に充てられしが、或る時、四分三十秒に四哩を駛せ即ち一時間幾んど六十哩の速度を以て進行せりと云ふ

斯氏改良の蒸氣車並に倫敦、バーミンハム間の鐵道

斯氏は素と二三の大功績を以て滿足し、其身を安樂の地位に置かんとを欲するの人に

あらず、念々心機を練りて先輩の發明製造せる機械よ改良を施し「プラサット」號「サムソン」號等、數個の改良機關車を造れり、偖て鐵道の敷設漸く延長を加ふるに從て、各地方の地主等常に之に抗拒せしが、廣大の土地を領する富豪貴族は鐵道運搬の便利に由りて現に其有の地價を騰貴し、其地代の倍蓰せるを見ては流石に之を損くるの意なく、氣勢漸く折けて猛烈の抗拒を試みんより寧ろ會社に向て不當の賠償を求むるに至り、實に某地方の如きは富豪の貴族「マンチエストル、リヴァプール」間ノ鐵道線路其所有地内を通過せんとを冀望し、之が爲め其地に利益を生するにも拘らず、已れ之を所有すと云へる權利の城壁よ據りて線路敷地に要する部分の土地よ對し、市價の六倍乃至十倍の賠償を要求せり、而して會社若し其不當の申出を諾して其障碍を買はざれば百方策を盡して其敷設許否の議案を國會に於て廢棄せしめんと謀れり、是時に方り倫敦、バーミンハム間の鐵道は已よ斯氏工事を督して敷設に取掛り居たるが、バートフォルドシヤイアとバックス地方の地主等固く同盟して公衆を集め、鐵道の有害無益なるを說き、某の雄辯ある紳士は之を以て英國憲法の精神に反せるものなりと論じ、其極終に腕力を以て線路測量者を要擊せんとするに至りしかば、止むを得ず一切の工事を夜間に振向

け、忍提燈を點じて業を執り、危險の虞あるべき處に到れば警備加勢の隊之を擁して四邊を衛れり、其他線路の猶は同市府外に延長せんとするを聞て、其地方の田舍紳士等大よ怒り、是れ英國憲法を破壞するものなりとし、又は線路測量者を見るの後は忽ち夜盜剪徑を見るよ至るべしと言ひ、又製造盛なるの小市府と雖ども其人民、淺見なる新聞紙演說の爲に煽惑せられて自ら鐵道抗拒の黨與と爲り、ノルサムトン府の如きバーミンハム線路をして之に近接せしめざらんが爲に、會社は其市府と距れる處に有名なるキルピーの隧道を築き、三十五万磅の費額を以て露伯多、斯迭邊遜之を成就し、其他クラレンドン並にユッセルス兩侯の施地を避けんが爲よ、ワットフォルド隧道を造る等、諸處鐵道怨望者の障碍よ遭ふて往々不用の土木を起し爲めよ費す所の金額少ならず、且之よ加るよ線路經過の便を得んが爲、土地賠償に費せるもの十有余万磅に及べり、是れ鐵道の事業始て起るの當日、國内よ存せる封建の遺制、斯迭邊遜父子並に其同志者の前途に反抗するものよして、即ち其才と勇とよ取りて、經歷の大快事たり、且露伯多、斯迭邊遜は其全線路を大成するに至るまで百難を冒して倫敦、バーミンハム間を往來すること二十余回よ及べりといふ、宜なる哉、其工事の豫算初め二十五万磅なりしも千八百三十

八年其大成の時よ至る迄倍して五十万磅を費すに至れると

讓治、斯迭邊遜は初めストックトン、ダーリントン間の鐵道を築造し、次てリヴァプールマンチェストル間及び倫敦、バーミンハム間の鐵道を成就せると此の如くなれば其見込の確實にして胸算の銳敏なるは是に於て彰明となり唯鐵道其功を完ふせるのみならず世人の深く驚愕したる事物も却て之が爲よ隆興の機運よ遇ひ、石炭を所持する者も之を消費する者も、共に得る所の利益前日よ加はり、馬は市場の不用物たらずして反て、其價格を增し、地價頓に騰りて、鐵道近接の田畑は借料愈々高く、旅舍驛夫の利益は損せられたりと雖ども鐵道に緣ある農產、工業新に振興するが故よ恰かも一人の職を廢して十人の業を得るが如き快事を生するに至れり

斯氏の新大計畫並に氏の聰明

斯迭邊遜は鐵道事業の愈々功を奏するに隨て、愈々其意見を擴め更に英蘭と蘇格蘭の間に此利器を設け廣く其財本を交換運轉せしめ以て大英國内の各部よ、周ねく其發明の利澤を蒙らしめんと欲せり、因りてニューカッスル府とエヂンボルグ府の間に線路の測量を爲し活潑に新企圖を經營して頗る進捗の景況なりしが、是時各地の石炭堀採

家、鉄器製造家、及び其他の製造家が一時必要を感じたる線路、已に頓整して一般の人心其他の鉄道敷設を思ふと甚だ冷かなれば千八百三十八年より同四十四年に至る迄、鉄道事業に休歇の時期を生じ、同年に至りて頓に其熱を回復し世人擧て新鉄道計畫を渴望するよ至れり、然るに是年に先ち斯氏は其子露伯多の已れに代るべき力量既に充分なるを見て、漸く之に繁劇なる勞力を讓り、其身唯鉄道事業の顧問として、日に諸線路を巡問し、父子協合して事を執る、實に是れ餘處よ見る目も愉快なり、ウエストミンストルのグレート、ワオヤ街あるる露伯多、斯迭邊運の事務局は其鉄道業務の輻湊する中心よして讓治、斯迭邊運數次此よ至ると雖ども露伯多常に活潑よ事を遇し、復た父の關沙を煩さず、然れども讓治は勇氣猶ほ凛然として未た曾て少壯の時に劣らず、曾て其腕力を養成したる少年の戲技と雖も晩年猶之を好み、一日友人ビッダー氏を事務局の一室に招き角觝の戲を爲しゝが爲に室内よ供へ置ける椅子の破損するもの多きに由り露伯多戲れに其修復料二磅十時令の勘定書を父に遣れり即ち知る讓治、斯迭邊運が身を卑賤より起すの當日、如何なる氣力を以てせしかを、露伯多は親愛を盡して父に事へ、且之を尊崇すると殆ど至り、凡そ其事の擧り功の成る毎よ、曾之を父の大德に歸し、吾が特立出

世の人と爲れるは偏に吾が父の模範薫陶よ由れるものなりと云へり

讓治、斯迭邊運は性樸實よして豪快の勇あり、自から卑賤より出でゝ有形世界に大功を遂けたるを誇り、以て他を驚かし名譽を收めんとを冀はず、又驕傲他を嘯し、以て衆と其一介の役夫たるを蔽はんと欲せず、其少時より夙に末顧母しき性質を徹はし、早晩世の活劇場に卓出すべき者と知られたり、其一旦好運よ際會し出處已れよ優るの人と位地を並るに至りては、自若として廉節を守り、他人之を恭敬すると、恰かも高貴閥閲の人に異ならず、言語自ら威ありて能く人を服し、虛心平氣能く物を察し、慧眼看破して細大洩す無きが故に、人其談話を聽て快と爲さざるは莫く、時ありては爽快の一言以て事物の道理を藏ふものあり曾て、人に對して競爭試驗の貪饕無厭の弊あるを論ず、且曰く「予敢て一片の助言を足下に與へん、足下請ふ味料に由りて鵝肉の味を斷ひるると勿れ」と、讓治又慈善の心深く曾て其先妻の姉妹數多の眷屬を遺して死し、孤兒等の讓受くべき物は唯一の工場あるのみなれば讓治之を救ふて養育せり、其ニューカッスル府に行きし時、書知ブランドリングを訪ふの後、曾て讓治の馭者たるアントニー、ウヰグワムを訪ひ叮嚀に別を告げて去りし如きは、其磊落なるを見るよ足る、晩年よ及ひて一派の技術社會

と軌道よ關する爭論を生じ、讓治ハ實利主義よ據りて斷然軌道の間を狹ふし、四尺四、インチ)と爲すべしと主張せり、其素志尚に吾が國をして鐵道の國たらしめんと欲するに在りと雖とも、正明確實の眼に出るものに非ざれば已れ其事業に名を假すを好まず、千八百四十五年より同四十六年の間、國内鐵道會社の設立頻りに起り、有力なる會社總代陸續として至り、其協議を用ゐんが爲には如何なる俸給をも拂ふべきに由り、新設の鐵道よ對し顧問技士の職を引受けん事を請へり、然れども斯氏は常に之を謝絶し漠然たる世俗の誘導に狀かれて其名を著はすを許さず

鐵道狂熱(レールウエー、マニア)並に斯氏の正實

千八百四十五年より同四十六年の間に當り、國内鐵道投機の熱起る之を鐵道狂熱の時期と云ふ其勢燎なるに至りては人々熟慮を要せずして新會社を設立し、鐵道株を以て日に商機の輸贏を決し、自ら狀かるゝを知らず、朝に之を賣て夕に之に倍するの數を買ひ、愈々賣て愈々買ふ、凡そ公侯紳士より坊間無賃の細民に至るまで、皆奇利を攫み暴かに其靈理を肥さんと欲するに熱中し、朝に鉅萬金を損して失望する者あれば、夕に空手計らざるの富を致す者あり、是時に方り鐵道會社の發起趣意書若し斯迭邊蓮の名を載

する事あれば其株券賣買の價を騰貴せしむるの力あると殆ど底止する所を知らず、左れば斯氏は會社發起に其名を用ゐんとを懇望せらるゝと頻なるに隨つて一々之を承諾したらんには則ち大なる富を作すに至りしなるべしと雖とも、氏は斷然之を拒絶して許さず、且曰く、予は鐵道を以て人々私に投機を營むの具となせるを知る、故に其鐵道にして得失價はさるとあるも予は之に關するとなかるべし」と、其身終にチエスターフールドより一哩を距るタアトンの佳麗なる別莊に退き、時々倫敦に出でニューカッスルに赴き知友を訪ひ時勢を視察し、及び其故鄕なる石炭地の景況を遊覽し以て殘年を送れり、キリングウオルス並に其近傍の人皆氏と舊交あり、到れば必ず其小屋に入りて親しく家人の安否を問ひ、快く相話して去る、千八百四十七年即ち其死するの前年、再ひロバート、ピール氏の邸宅に招かる、是より數年前、斯氏トレントヴァレーの鐵道敷設を企てしが後ピール氏之を經營施工したるに因りて、此年斯氏は其開業式に臨むべきの約あり、同年中自轉四輪車を發明製造し、ソーヅ機械學會の集會に臨み、其身の實歷を演説せり、千八百四十八年八月十二日少間病を患ふるの後、溘焉として長逝す、享年六十七、嗚呼、斯人一び逝て後、才名天下よ聞るもの尠からずと雖も、躬ら身賤に起りて才智飢

く精神剛く、能く千難万苦に耐て以て卓絶の名聲を輝かす者復た出て、其業を繼ぐと無し

○基德法、閣龍傳

第十五世紀を論ず

讀者心を留めて歐洲の歷史を見よ其中世以降の史中、人心漸く方向を變じ事蹟全く面目を更むるの時期あり、之を航海上の標識に譬ふれば其峻平として高く著はるゝは山嶺の雲に聳ゆるが如く、其輝々として明かよ燈臺の光を放つよ似たり、扁舟纖かに逆浪怒濤の間を渡り遙かよ之を望み見て欣然として其航程の已よ幾許を經たるを悅び其舟の正に在る所の位置を知りて是より幾日にして彼岸の港に達し其勞を勉ふの期あらんとて自ら奮勵するよ至る、是れ歐史を讀む者の旬よ十五世紀末よ於て會ふ所の點にして即ち之を史海の標識と謂ふべく、其中古渺洋の滄溟を渡り艱難の航程を經過するの後、始めて目前に聳立せる標識を望めば會ま之よ亞米利加發見の事蹟と記るし蓋世の豪傑、熱那亞の航海者、基德法、閣龍の名を載するを認む

夫れ第十五世紀をして人心變革の時期たらしむるの徵候一よして足らずと雖も其最も著明なるものは地理學上の發見にして殊に其航海上の發見に富めると未だ曾て自餘の時代に有らざる所なり、蓋し其前に在りては歐洲の人智成く戰爭の一方よ傾きし事

彼の十字軍の一事に於ても之を證すべく、共勝利の期すべからざると自然の數なるにも拘はらず數々軍を出して毎に敗を取り、爲めに幾十萬の生命を失て猶顧みざるものゝ如し、加るに歐洲諸國の間、常に兵釁を生じ互ひに覬覦の念息む時あければ苟くも有爲の志ある者は各々智勇を磨き强國に事へて其伎倆を兵馬の間に顯はさんと欲せり、故に當時歐洲人民が戰爭の爲に生命を失ふと夥しきは論を俟たず、唯戰爭非事の爲のみならず惡疫東方より伴ひ至り、凶獸並び起りて到る處の生靈を播蕩し大陸之が爲に赤土と爲らんとせり、歐羅巴の人民此の如くにして數代相承け常に其精神を戰爭の一途に注き絕へて世の開明進步を導くの行爲あると無かりしが、第十五世紀に至りて中古蒙昧の長眠始めて覺め人心茲に一變して理を推し物を究むるの心熾發し漸く種々の大發明を出すに及べり、即ち第一に印書の術を發明せしかば之に由りて知識思想を傳達し以て各人の心機を激動し諸般の發明を促がすの具と爲れり

第十五世紀の中葉に當りて舊希臘帝國滅亡し其人民堵を失ひて一時四方に流轉したるに由り、古來ビザンチアム朝の長く保護傳承したりし上古文學之と共に歐羅巴諸國に播布し、譯者撰述するにビザンチアムは紀元前七百十五年希臘國の始祖ビザスの拠建

せる所にして後ち羅馬帝國の版圖に入り、帝コンスタンチンの時、都を此に遷し改めて君子但丁堡と稱す、時に紀元三百二十九年なり、其後紀元三百九十五年に當りて同帝國東西に分裂し其東部を以て屢々希臘帝國と稱し舊ビザンチアムを以て都と爲す、降りて紀元千四百五十三年に至り土耳其の大帝マホメット、東羅馬帝國を征服して君士但丁堡を取りしより爾來之を歐羅巴土耳其と稱す是れ即ち希臘帝國の滅亡あり（又以太利共和列國に於ては海外通商の業盛に行はれて國力の富實を致せるに由り他の諸國之を羨望し爭ひて力を海外に伸さんとせり）

之を要するに第十五世紀は歐洲の人民一般に超業の精神を發起し敏捷活潑の動作を呈するの時にして爽快の和風一たび歐洲全土に吹き渡りてより人智活動の機、頓に催し古來其天地に塞れる濃々の迷霧を掃蕩せしかば有爲の才を具へ攻究の思想を懷きて常に開明の光輝を慕める人は始めて陰鬱の冬去りて和煦の春に逢へるを悅び、上古の識に所謂る茫洋無際の洋面後世漸く縮小して地球上陸地の境域を擴め遂に一の新大陸を生じて某發見者の目に觸れ即ちシユールは最早世界極端の地に非ざるの時、正に近きにあるを想へり（譯者曰くシユールとは古史に所謂る世界極北の陸地にして今

より言へば或は那威を指し或はアイスランドを謂ひ或はシェットランドの最大島メーンランドを當れるものなり)

葡萄牙國、首として航海事業を勉む

第十五世紀に於て歐洲の人心特に確乎たる進路を取りたるは航海發見の事業に在り、是れ實ま以太利國の繁盛富實自ら他の奮勵競爭心を誘起したるに由るなり、蓋し中古に在りては常ま歐羅巴市場に需用を增加せる印度の產物皆亞細亞內地ま於て古來通ひ慣れたる迂遠の通路に由り來商結隊して之れを駝背ま運し數月を經て始めて之れを地中海邊の各港ま輸すを以て慣例と爲し、而して威尼斯、熱那亞の諸國之れを船舶に搭載し更に歐洲諸國の需用地に輸すを以て大ま利益を獲たり、然るに第十五世紀に至り葡萄牙國の王子ヘヌリー、ズ井、ナヴ井ゲートル(ナヴ井ゲートルは航海者と云ふ義)と云へる人自ら奮て以太利國と頡頏し航海事業の競爭を始む、ヘヌリー公は天性鋭敏まして人と爲り剛强果斷夙に大業の志あり嶄然として時人ま異なれり

ヘヌリー公は愛國の熱心と奉敬の篤志ま動かされて自國の名譽を增し聖教の弘布を計らんと努め、自ら航海の技ある者を保護監督して數ば大西洋ま巡航し以て前代未發

の地を探檢せしめけるに、果せる哉毎に重要なる發見の效果ま接してマデーラ、ポルト、サント、カナリ、アイランドの諸嶋續々世界の地圖ま加り、羊皮を衣て穴居せる野蠻人種を擕て之に殖民し葡萄甘蔗を耕植して大に民利を起せり、是に於て公ハ地中海ま入らずして直ちま印度に至るの航路を發見せんと欲し更に、數度を出して阿非利加の南端を周航し直ちに印度に達するを期せしかば其航海者は引續きて阿非利加海岸の數岬を經過し千四百三十三年ギリアネスと云ふ者始てボジャドル岬(サハラ大沙漠の西岸に在り)を周航し其地方の實況を探檢して本國ま報道したるより古來赤道熱帶の地を以て人の住居すべからざる處とおせる謬傳を消散し、尊て千四百四十一年ゴンザレス、トリスタンなる二人の船將をして更にボジャドル以南に航せしめてブランコ岬(大沙漠の西岸)を發見し其より探檢の船を出すと猶數回にして着々發見の功を累ね一回は一回より南して遂ま バージロミウ、ダイアズと云へる者阿非利加南端のストルミー、ケープ(暴風岬の義)に達す、是時葡萄牙國王ジョン二世は巧みに其名を改めてケープ、ヲヅ、グード、ホープ(吉望峰と云ふ義)と爲す、其後ヴヲスコ、ドガマと云へる人尙ほ業を繼て全く此大陸を周航し遂に印度のマラバル海岸あるカリカット港に達せしかば、是に於て

歐羅巴、印度間航路の問題始めて釋明するを得たり、抑もヘンリー公の此事業を起せしより是に至る迄幾んど五十年の星霜を經、其間公は毅然として志を一途に持し常に自らセント、ヴインセント岬(阿非利加州セヲガンビヤの西に方りケープヴオルド群島の一に在り)に在りて常に渺茫たる大西洋を望み許多なる航海者の其保護に依て海岸の探檢に從事せるを想ひ將さに其本國に至大の名譽繁盛を齎らし歸らんとするを樂しみ居たりと云

夫れ葡萄牙國の獨り東方に關する航海發見の名譽を擅にすると此の如し、然るに茲に又正しく反對の方向より於て同一の功業を行ひ得べきの地あり葡國の船舶正に阿非利加の海岸を探檢し漸く東方より通するの新路を開くに當り一方に於ては思慮遠大にして堅忍比なく已れ一ぴ信じて期する所の事は無上の熱心と不撓の精神を以て之を守らんとするの人ありて竊かに沈思して西方に向て印度より達し得らるべきの理如何を攷究せり、是れ時機の到るに及で世界の歷史上、重要無比なる功業の著はるゝ所以にして、其時機は即ち千四百九十二年より於て到り其功業を期せる人傑は即ち基德法、閣龍(クリストフアー、コロムブス)と爲す

閣龍家の宗族

閣龍は千四百三十七年熱那亞國に生る、氏は梳毛工ドミニコ、コロムバスの長子にして其家假令ひ當時は貧困に陷れりと雖も其血統は或る高貴ある門地の末裔なると疑ふべからず、又當時以太利共和列國より於て商工業の繁盛なるとフランダース並に日耳曼の大市府に於けるが如くなれば手工者は自ずから社會に貴重せられ凡て工業會社を以て國家の重きを爲すに肝要の結合体と爲せり、閣龍、亞米利加を發見するの後尙ほ數ば其大陸より遠航して黃金國の探檢より從事せるとき其船中より乘組める西班牙下等貴族の輩傲然として氏を侮慢するに遭へば每に之より屈せずして言て曰く「上古グヲ(イスレール國に王たりし人)は曾てイスレールの野に牧羊者たりしと雖ども天神ついよ之に王位を授け給へり而して予は宗族の長者に非ずと雖ども予の常より信奉する所の神い即ちグヲットの事る所に同じ」と氏に二人の弟あり、一人をバーツロミウと稱し、一人をヂーゴと云ふ、後其兄と事を與よそるよ由りて其名稍や顯はる、但しバーツロミウは兄が業を成すの股肱たりしと雖も性質剛毅にして才智敏捷なれば若し之をして獨立事を行はしめたらんには、恐らくは偉業を擧げて其名を輝かすと雖からざるべ

しと云ふ、閻氏又一人の妹あり熱那亞の一工人ニ嫁せりと雖も當時爲ス知らん其宗族中他日著名の一豪傑を出さんとは

閻龍船乘と爲りて傍ら學術を修め武技に秀づ

閻龍が少壯の時に從事せる業は多く其後年に及で大業を成就するの砌補と爲らざるあし其父ドミニコ氏が少年の時ニ於て早已ニ地理天文の學術に長すべき才性の具れるを認め、之をパヴィヤ大學校ニ入れて地理、天文、幾何の學科及び占星學、航海術を學ばしむ、然るニ當時以太利沿海の諸國は常に戰爭貿易を事とせるを以て勇憤大膽の士共國に仕へて輙すく雄力を伸すべきの事業甚多し、左れば閻龍も勇憤敢爲の情、勃々として抑へ難く半途にして大學を退き、熱那亞共和國の水兵と爲りて海上の業務に服せり、然れども其勇憤の性、既に學を好むの心に馴れて眈勉致究の功著るしければ忽ち隊中群を抜き衆兵をして其後に眈若たらしむるに至れり、爾後、氏ハ當時の慣習に從て以太利列國の中に歷仕し或は熱那亞軍旅の下ニ艦隊を指揮し或は那不勒斯國王の爲ニ其艦長と爲りて戰ひ、漸く功名富貴を得るの途に上れり、故ニ氏の一身ハ同時に武事、航海學術の事を兼ね行へりと謂ふべし、氏は幼より天體說と地理學を好むの情切にして專

心之を性めしかば、長するニ及で遂ニ其の奥ニ達す而して之を其後年の事業に察するニ都て其幼時より學び得たる效果の跡あらざるはなし、其想像の熱心に富めるは即ち聰明叡智の人たるを表し、且其曾て航海遠征ニ從事せるとき間隙ある毎ニ自ら地圖並ニ海圖を製して生活の資を獲、常ニ地理學上の事件ニ心を留むること久しければ、其思想自然に其般の業ニ偏向し、意以て其將來事業の方向を確定せしむるに至れり、殊にマルコ、ポロ(ヴェニス國の人)の旅行日記を讀て東方日本、支那の奇談ニ感じ、深く其國に心思を注げり、蓋しマルコ、ポローは陸路に由りて此等の國ニ旅行せりと雖ども閻龍は海路に由りて之に達するを得べしと爲し、爾來其思想は多年、氏の胸中に横はり、終ニ閻龍自己と雖ども豫期せざる方向ニ於て好果を結び一大發見を爲すの原因とはなれり

時に氏の弟バーゾロミウは既ニ葡萄牙國里勒本府ニ在りて船乘の爲ニ海圖を製し以て其生業を營みしかば、氏も亦其地ニ往て住居し、同業を以て生を營みしが、其地ニて時に或は英蘭に或は幾尼亞ニ或は西班牙領群島ニ航海の事ある毎ニ之に從事し、殊に其の北西ニ向て遣く克林蘭の海岸に航せし如きは最も其將來の大發見に密接の關係あるものとす、蓋し其極北冱寒の地にはアイスランド並に諾威國より堅忍勇敢の人常に

渡航し、往昔歐羅巴北地の探検家數ば西方よ航海して某の大陸に至り云々の事を口碑に傳へ、又古き說話ありて其言ふ所渺として定まらずと雖も、現に西方よ於て一大陸の存そるものありて曩昔某の航海者曾て其地に至りしと有るを說くに至りては、實に其事の確實なると示すものゝ如し、但し其地に至るの航路は錄して傳ふる所なきを以て得て考ふべからず

閔氏里斯本府に於て有名なる以太利の水先案内パレストレロの女ドンナ、フエリッパに會すパレストレロは當時ヘンリー公に事へて航海事業に從ふものなり、而してドンナ、フエリッパ遂に閔氏に嫁せしに因り閔氏はドンナの母に緣てパレストレロが當時名聲喧しきフローレンスの地理學者トスカチリと通信往復せる書類を獲て常に思想の中よ徘徊せる印度及び其他遠海に於ける航路の模樣を窺ひ知るを得たりと云ふ、凡そ大發明の世に起るや多くは其初め誤謬の推考よ基くものあり日耳曼國の古賢に曰く「凡そ人、誤謬より經驗して遂に眞確に至るもの之を賢者と云ふ」と夫れ基德法閔龍の西方に航して直ちよ日本、支那よ達そるを得べしと爲せるは即ち氏の始めて誤謬の推考よ入れるものなり

西半球に新世界あるの徴候

閔龍はトレミー派(譯者按ずるよトレミーは本と希臘の天文地理學者にして埃及に移住し天動說を唱へたる者なり)の學說と亞剌比亞派の地理說を根據として世界の地理を考究し現世界を以て圓形、球の如きものなりと爲せしが其周圍の里程を算するに至りて幾んど全里數の三分一を缺けり、而して其海圖を製するよ及で當時人の呼で以て世界と爲せる陸地は都て東半球の一方に包括せらるゝなれば、隨て一方の半球よ於て亦之よ稱ふの陸地なかるべからざるを發見し之を舊地圖に按ずるに大西洋中アンチリヤと稱する國あるを示して其意、暗に符合せるが如く愈々海圖を檢して愈々其心に想像する所の確實なるを證し、殷富の一大陸歴然として反對の半球に存在せるを知れり、但氏は初め其陸を以て支那又は印度の衍亘せるものと爲し、且其殷富なると往昔蘇路門王が祠宇を造らんが爲に黄金を獲たるヲフヰル國の如くなるべしと想へり

且其海中よは舊世界の人未だ曾て耳目に經驗せざる品物の碎片間ま漂ひ至る有りて晴に其西方よ邦國あるを告るものゝ如く、見馴れざる樹枝莢殼の類は勿論鐵製の利器を用ゐずして彫刻せる木片、一本の松幹より造れる大艦木舟等常に東流せる潮よ浮び

て大西洋中に漂へるとあるのみならず曾て數隻の整木舟アゾルス群島中に漂着せし時其の一隻よりは二人の死せる銅色人種ありて風態狀貌曾て其群島より於て知られざる所のものなりと云ふ、且つ氏の北洋に航せしときは必ず無數の流木赤道地方より灣流(譯者曰く灣流とは熱帶地方なる墨西哥灣より出で北流して合衆國の海岸を經過し其より迂曲して北東大西洋に至るの温流を謂ふ)に乘じて北洋に至り其海濱に集まるを聞きしならん、氏は斯く世に知られざる陸地の存在せるを心に確信すと雖も之を以て亞細亞大陸の延張せるものと爲す亦其考究の一隅と謂ふべし

起業の障碍並に一家の艱難

然るに悲い哉闔龍の知れ時世と合はず、人民無知にして妄想、威を擅ふし、或は曰く歐洲の西、人跡未だ到らざるの洋海は風濤極めて艱難にして間ま深底不測なる洋中の奈落あり、進で其極端に至れば洋中の水落ちて險峻測るべからざるの巨瀑と爲り其聲の凄絶ときと百雷の集まれるが如しと、或は曰く海潮當るべからざる勢を以て常に地球反對面の方に流る、故ふ堅牢の大船と雖ども其勢力に驚動激進せらるゝに堪へずして遂に破壞すべしと、之を要するふ當世の人皆云ふ所は其遠洋未發の地は即ち聖經に、汝等

宜しく此處まで來るべし但し是より以外に至を得ずと曾て人類に宜へる天神の守護する處とするふ至れり、然るに闔氏種々の徹憑と推究とに由て其志を決し、西方探檢の船を出さんとの計畫を以て各國の政府に遊說したれども到る處ふ拒絶せられて其望を達せず、其本國熱那亞の如きも凡そ未來の事を言ふ者は其國ふ貴重せられずと云へる諺の實を表し、唯葡萄牙王ジョン二世は其說を聽て奇となし知識の僧官を集めて之を議せしめたるに、議會は之を以て空想、取るふ足らざるの說と爲せしが、密かふ水先案内某に命じて船を出し、西方ふ航して亞細亞に至るの新路を探檢せしめ、實驗果して闔龍の說の如くならば、其功名を以て某ふ歸せしめんと謀れり、然るに某は航して僅かにアゾールス群嶋を過るの後、其航路を定むる能はず且不知案内の遠洋に航する事なれば其身萬一の虞を恐れ、遂に船を返して葡國ふ歸り、闔龍の計畫を以て全く虛妄の詐術に出るものなりと誹れり

闔氏の時世に不遇なる斯の如くなるに加へて、其妻ドンナ、フェリッパ死して歸らぬ人と爲り、且氏が地理學上研究の爲に費したる費金、實ふ尠少あらずして、爲ふ衣食住快樂の費を割くも尙足らず、遂に債を負ふて債ふふ由なければ、所有の地圖及び海圖は悉く

僧主の押取する所と爲り、其子ヂーゴを携へて密かに里斯本府を逃れ、西班牙に向て進みしが、道中一錢の儲なく唯國王ッヱルヂナンド並に其后イサベラに謁して新世界發見の計畫を說かんと欲せり

閣氏、發見事業の保護主に遇ふと雖も擧行の遲滯を慨歎す

斯くて某の月日二人の旅客あり其人は誰ぞ、一人は沈着雄膽にして容貌眼しからずと雖ども、未だ老ひざるに頭髮早已に白を雜へ、年齒七八ばかりなる嬰兒を擎へ最と行步に疲れたる体にて某の庵寺の門に至り一夜の宿を借さんことを乞ひぬ、是れなん西班牙國アンダリユシヤ州にて當時繁華の一市港パロスの傍なるラ、ラビダ寺にてありける其庵主シユアン、ペレズは心智當代の人に勝れたる名僧知識にして閣氏が畢生を能めたる大業の計畫を聞て其奇に驚歎し閣氏も亦之を談ずるに諄々として能く其の旨を盡し怪かも確乎たる歌旨に據りて法を說くが如くなればペレズは轉た聽て神に入り感激措く能はず、遂に氏の意見に與して之を贊畫すべきの約を結び、已れ前に皇后イサベラのコンフエッソル(コンフエッソルは宗教上にて信徒の懺悔を聽くべき職を持てる僧官なり)にてありし縁を以て其後職の僧ッヱルヂナンド、ダ、タラヴエラに宛

て閣氏を皇后に紹介すべき引薦狀を附したれば氏は子ヂーゴを以てペレズに托し書翰を懷にして當時西班牙の在地たるコルドヴワに向ひ、再び勇ぜ發途したり、(譯者曰く下條に見ゆる如く西班牙半島は中古ヴヰサゴス王國の時よりムールスと云へる人種、阿非利加南岸の地より侵し來りて多く之を占領し、爾來累世西班牙人とムールス人との間に戰爭絕るとなくムールス次第に其土地を亡ひしが千四百年代に至り其半島にてヴヰサゴス種の君主なるアラゴン家のフエルヂナンド並にカスチル家のイサベラ、姻を結び、兩家、力を協せてムールスを征討し遂に其治世に於て全版圖を回復し、全く其半島にムールスの迹なからしめたり、初めムールスの此地を占領してより此に至るまで幾ど八百年間なりと云ふ、故に閣龍の時は恰かも西班牙國多事の際にして未だ長く都を定むるに遑あらず、時々便宜の地に於て其朝を設けたるものと知るべし)然るに此く閣氏の景況も忽ち疑惑の雲に蔽はれければ、氏は深く之を憾めり、蓋し是時に當りてッヱルヂナンド並にイサベラの兩陛下は長く西班牙國に跋扈せるムールス人と戰ひ之を國外に擊攘ふの大業に從事し兵馬倥偬、用度多端の際なればッヱルヂナンド陛下は縱令ひ之を聽くと雖も衆の空想特ひに足らずと爲せる冒險の爲に敢て

其歳入の幾分を投ずるを好まざるべし況んやフユルヤナンドガ、タラヴユラは閑龍を以て其費賦無實なるよも拘はらず空想を以て没に廣大不測の謀圖を抱けるものなりとし、ジユアン、ペレズの引薦を弄て顧みず絶て閑龍の願意を孰れの陛下よも奏聞せざりければ氏は不遇よして空しく其地に二年の星霜を經過せり、其間威權强盛なる兩陛下は何ぞ思はん天外不遇の孤客、其祭殺の下に住し製圖彫刻の術を鬻て綴かに生を營み嚴格なる忍耐を以て時機の到るを待ち、將さに稀世の偉業を行て當代の王室を輝かし、其治世をして永く萬世に著明ならしめんとするもの有らんとは、其人は客地にありて親戚故舊なく服裝極めて粗惡にして引薦を權門に求むるの緣信あく、唯廣らす所のものは久しく在朝の人に疎遠なる一僧侶の添書あるのみなれば、誰とて之を顧みて其窮を救ふものあく、到る處の門戸に拒絶せられけり

然れども愛に一の氏ガ要、憤を慰むる事あり、即ちコルドヴヲの一婦ドンナ、ビートリクス、ユンリケズと云へる者を娶りて親愛の情、亡妻フユリツバよ劣らず、兩人の間に一男子を擧げ、之をフユルナンドーと名く、歳月推移るに隨ひ氏と交を結び志を同ふする者漸く多き中に就てトレドー府の大僧正メンドサ、一友人と爲りて遂に陛下に奏聞して

閑龍よ參朝謁見を得しめたれば、氏は是時始めて宮廷に於て大業の人たるを表明したり、其後自ら書する所を見るに、其天命を遵奉するの深きが爲よ全く自己一身の存立を忘るゝに至るを知るべし、其語に曰く「予は已よ我あるを覺へず、予は一大事業を行はんが爲に特に天神の選定したる一の用具たるよ過ぎず」と國王フユルヤナンドは天資沈毅にして敏捷すく情を動かさゝるの君なれども深く閑龍の氣力剛强にしてオカ英邁なるに感動し、皇后イサベラも一見直ちに氏の胸中を洞察し、爾來志を同ふせる輔車の友とはなれり、然るよ氏の計圖を以て又も僧侶の會議に附せられしよ、衆人ど全員一致を以て空想、神を瀆るものなりと評決せり、蓋し閑龍の世界を以て圓形、球の如しと爲すと當時耿法學者の守說よ反き其怒を招く所以にして、會議は聖經の條文を引て氏が地說の誤まれるを証し、獨り其一會員たるヤーゴ、ダ、デザと云ふ者衆と意見を異よして閑氏の說を贊し衷情を盡して之を維持せんと努めたり、然るよ事猶は何れとも決せず其儘淳瀉して日を送るよゞ氏は再び憂悲を懷き望の綱も切れ果てんかと氣遣ひしが、皇后イサベラ遂に之を救はんと決し命を下して陛下行在の各地に氏の寓所を設け、公然百僚群臣をして之を兩陛下の賓客として承認せしめたり

兎角して星霜を累ぬる内ムール人との戰爭終りたれは閣龍はフエルヂナンド並に
イサベラ兩陛下凱陣の儀列に加りて共にグラナダ府に入る、時に千四百九十二年一月
一日なり、即ち是れ西班牙國にムール管地の跡を絶つの日にして憫れむべし其亡國の
君主ボーブヂル、エル、チコは其の失へる版圖を顧みて涕泣せし時、氣丈の母は叱責して
「汝之を防ぐと男子の如くあらずして却て其失へるを泣くと婦人の如くす」と曰へりと
ぞ

西班牙の國事愛に始めて靜謐に復したれば閣龍の計圖更に評議に附せられ會議遂に
之を否決したれどもフエルヂナンド陛下は皇后イサベラの慫慂に由りて其事を實地
に試みんが爲探險の船を出さんと欲するの情勢なりしが又も荏苒と日を延て事を果
さゝれば閣龍今は朝に望あしとて殆ど悲傷して斷然其地を去り、徒歩してラ、ラビダ寺
に至れり庵主ヴユーアン、ペレズは直ちに氏の爲に手書を裁し以てイサベラ陛下に獻
りたれば幸に其効ありて氏は再び朝廷の迎ふる所と爲り更に僧官をして再議決定せ
しむるに至れり

閣氏の要求並に皇后イサベラの和解

然るに愛に一の難事と云ふべきは閣氏は素より其企圖せる目的の確實なるを信ずる
が故に已れ他日發見して新に西班牙國の版圖に加ふべき土地には自ら立て代王と爲
り且其地に生ずる歳入の若干分を領取すべき權理を有せんことを要求し固く之を執て
寸毫も讓らず是れ獲るの一方に偏して毫も失ふの責なく頗る不正の要求あるが如く
なりと雖も抑も氏の此機會を待望むこと既に十八年、而して今にして其辛苦經營の價を
減ずるが如き訂約を聽くを欲せざるが故なり然るに其要求遂に却けられたれば乃意
を決して西班牙國を去り更に他の政府に說かんと已にコルドヴワに向て發足し其よ
り佛國に至んとせしが、皇后イサベラは素と寛大の君なれば金錢に關するの故を以て
彼を失いんは惜づべく且惜むべきの至なり迚、即ち使者を發して氏を追及せしめ慰諭
して之を止む、但氏の弟バーブロミウは是時已に英國に在て國王ヘンリー七世に新世
界發見の計圖を申出せり、然るに當時西班牙國の財政はアラゴン並にカスチル王領の
二部に分れアラゴン部はフエルヂナンドに屬しカスチル部はイサベラの管理する所
と爲れるを以て(譯者曰前條に述る如く是時西班牙統一の業始めて緒に就くの時なる
を以て其財政の如きも猶兩家に分離して未た之を合一するに遑あらず讀者宜しく今

日の西班牙國を以て視るべからず)皇后イサベラ令して曰く「凡そ此航海探檢は要する所の費は皆カスチル王國參入の内を以て支辨すべしと」因て一切の準備此令の如くし千四百九十二年四月十七日グラナダに於て兩陛下ト閣龍の間は新世界發見は關する條約を訂結す

是に於て三隻の船をパロスの港灣より艤ひ將に日を卜して纜を解かんとす、特に港民の中、三人同姓の兄弟あり、ピンゾンと云ふ、共に航海を善くし且富貴の人なり、其二人なるマルチン、アロンゾ、ピンゾン、ヴヰンセント、ヤネズ、ピンゾンと云ふ者俱は躬ら閣龍の遠征事業に隨はんと決し、即ち第一船サンタマリヤ號ハ閣氏自ら乘りて提督船と爲し第二船ピンタ號はアロンゾ、ピンゾンは第三船ニナ號はヤヤズピンゾンに各々其指揮を分任し而して閣氏此船隊を提督す、然るは其船体甚た小に過ぎて斯る遠大の航業に充てんには寧ろ不適當の者と謂ふべし唯提督船サンタ、マリヤ號の甲板具足せる有るのみ、他の二船は「カラヴェル」と名くる圓形の小船に類し腹部開濶して首尾の兩方に甲板を具へ、今日より之を見れば實に地航船の用に充つべき者なるのみ、而して右三船の乘組員總て百二十名なり

閣氏パロス港を發し始めて新陸發見の航程に上る

一千四百九十二年八月三日三隻の船一隊と成りてパロス港を出帆す、之を見送る人民は皆以爲らく是れ安に危險の地に入らんとする暴虎馮河の所爲なれば彼れ等は必ず無腹よ葬られん、何ぞ生きて再會するの期あらんやと、愕然として別を爲し乘組の人々も亦自ら心中悚悅あらずして其身已に安信者の空想と女皇の名譽心に供するの犧牲と爲れるものとし人心甚た穩かあらず、獨り提督のみ氣色靜肅にして從容事を執れり、蓋し其希圖既に多年の艱難辛苦を經て始めて實地に臨するの時に到れるあれば今は勉めて部下の衆を鼓舞し共事業に關して吾が心に信ずる將來の期望をも併せて感覺せしめんと誠に時に取りて肝要の措置と謂ふべし

斯くて船体は次第に西方の遠洋に出て、航路を進むるよ隨ひ水夫等畏怖措く能はず、精神殆ど挫けんとするの体なるにぞ、提督は種々に之れを戒告して一時其勢を回復せしが其のカナリー嶋(阿非利加大沙漠の西方に在り)の近海を過ぎテチリッフエ峰(カナリー嶋中の高峰よして當時の世界にて西方極端の地と爲せる處)漸く水面を下りて眼峰遠せず四面茫渺として人跡皆て至るなきの波濤に觀し益々西に向て能を把るの時

に及び畏怖の心再び船中に發し、爾來新世界の陸地其眸中に入るの日に至る迄衆心沮喪して復た振はず、時ありては絶望狼狽屢〻心中の不平を腕力に訴へんとし「新世界發見の事は虚喝なり我輩の生命は將さに此虚喝の犧牲と爲らんとす」の聲常に斷へざれば開氏は力を盡して之を解諭し固く共方向を守て船首を返すの心なからしめんが爲遂に己れを責めて發見の目的を達する迄は一瞬も寐に就かざるべしと約するに至れり、且衆の心を誘鮮せんが爲將さに發見せんとする土地の財貨に富み地質膏腴にして天然の景色佳絶なるを談ずると宛かも曾て其實地を目擊せるもの〻如く共の前進すべき航路に於て貿易風の吹來りし時の如きも既に經過せる航程の哩數を秘して衆に知らしめず、蓋し洋上の距離愈々大なるに衆心畏怖を增すの恐あればなり、氏が衆心を維持するの注意此の如く共れ到れり、縱令ひ船中不平失望の氣勢は發して人心乖離の兆なきに非ずと雖も、氏を外にしては復た信服すべきの將なしと謂ふも可あり、進で漸やく赤道に近つくに隨ひ盤針、方向を變すると愈々甚しければ今まで開氏に信服せる水先案内も驚愕して稍や氏を疑ふに至りしかば氏は是れ赤道地方に耀やける星晨の引力に由りて生ずるの變化なる事を辯明し以て共銳氣を復せしむ

兎角する内、海濱に近き岩礁に生ずる植物の漂へるを處々に散見し海藻の夥しく浮び至るものあるのみならず未だ遠く陸地を距るの海上に見ざる鳥類、數〻目に觸るゝに由り、一時船中の鋭氣を復興して衆以爲らく是れ必定海程の一標的よ達するならんと、又遠く水平の上に黑雲の鬱鬱たるを望見て、數ば陸地と爲し歡呼、切なりしと雖ども其の消去て跡なきよ及で畏怖又生じ、且時ありて貿易風の船隊を西方に吹くに遭ふて衆皆駭て曰く「我輩は已に本國西班牙よ歸る能はざる遙遠不測の境に入れり」と風位遂に變ずるに及で異口同書よ船を返さんとを求め、且曰く「我輩は已に職分を盡したれば是より本國よ歸らざるべからず」と是に於て開氏は賞を約して畏怖者を慰ましし國王陸下の逆鱗を說て不逞者を慫かし以て僅かよ其威權を保持し已に回らされたる船首を横に乘じて再び西方に轉せり、斯くて益々航程を進めしが其進路の一面夥しき浮藻を以て塞りければ又も水夫等は畏怖すると甚だしく是より愈よ進行するよ隨て浮藻の蔓延愈よ甚しく船體之れよ纏繞せられて遂よ脫すると能はざるに至るべしと云ひ是より天地の間、凡そ目に觸るゝ所奇異の現象ある毎に衆心疑惑を生じ物議洶々たるよも拘はらず開氏特り從容として毫も動ずるの色なかりき

衆人疑懼の中、遂に新世界を發見す

今や一百余名の航海者擧て日夜斯望する所の陸地は已に發見せんとして未だ發見するに至らず、船中擾々として幾ど収むべからざるの勢なりしが、某日天正に明るに及で近く提督船より隨へるピンタ號より「陸よ」の呼聲起りしかば、衆皆眼を皿にして遠く水平の線上雲かと怪しめる微陰に眸を定め、「吁、成功の期遂に到りて我輩の勞苦危險將さに終らんとするか阿那丕哉」と一同甲板に跪きて天上感謝し、漸く船を進め近くに及べば、何ぞ計らん其陸と思ひしもの次第に消去て跡を留めず、恰かも空中の樓閣に異ならざれば一同望み外れて唯憂愁の外なし、其後二三日又ニナ號より旗標を揚げて陸地發見の號砲を發せりと雖ども亦是れ空虛の誤認に外ならざれば、乃ち水夫等は絶望の境遇に沈まんとする情勢なり、是時閣氏は竊かに以爲らく吾が船隊或は既に亞細亞大陸の極端を過ぎて更に他の洋海に入るゝ非ざる歟と、數日の後遂に紛ふ方なき陸地の景狀、閣龍の熟練なる眼中に入り、唯提督の之を疑はざるのみならず之に抵抗ふ水夫等と雖ども爲めゝ感喜の心を起し、日ならずして目的の陸地に達すべく、望みの成功疑なしと衆相保して時の至るを竚てり

爾る處へ蘆草の拔取られて未だ日子を經ざるもの根ゝ土を帶びて船の傍ゝ漂ひ來ると間もなく、樹枝の流れ至りて、中ゝ新鮮なる無數の子實を著るもの有り、海面の水色漸く變ずるゝ由り、鉛錘を下して深淺を測るに、輙ちにして水底に達す、而して忽ちゝして板條の斧痕を帶るものあり、又忽ちにして棍棒の某器を以て斷れるものあるは皆是人の手工を示すものならざるは莫く、最も頑冥の者と雖ども今は是等の兆候を見て陸地發見の期、正に迫れるを知り、十月十一日の夜に及では三船の人皆樂で前途を望めり蓋し船隊の初め西班牙國パロス港を發するに先ち、フエルヂナンド陸下は能く他に先ちて新世界の地を發見したる者には必ず褒老年金を與へて其功を賞すべしと約せしが之ゝ加ふるに今又閣氏も自ら高價なる天鵞絨の美服一組を懸けて賞品となし、惡く乘員を勸めて觀察を嚴にしたればなり、而して氏も亦躬らサンタ、マリヤ號の艦樓に登りて終夜觀望せしが偶ま火光の移動するが如き現象を遥かに認めたれば、即ちペドロ グゼレズ、ロドリゴ、ザンチエズなる二人を呼で之を參觀せしめ、其の實に火光なるや否やを問ふに、共ゝ閣氏の認定誤まらざるを言ひ、暫くゝして火光消失し後再び現はる、即ち是れ船隊の將さに近づかんとする陸地に於て人類の棲居せる明證あり、斯くて十月

十一日の夜盡き十二日の曉天に方りて稍や他船に先だてるピンタ號より一發の號砲を發し、大西洋中の秘密遂に釋明して新世界の發見せられたるを報ず

開龍、グワナハニ島を發見して聖薩瓦多と名け並に新世界黄金に富めるの徴候を認む

水夫等今は提督に對して面目なく、且は感喜に堪へず皆拜跪して其寛仁を謝し、前の悖逆なる罪を赦さんとを請へり、然れども是れ氏に取りては敢て他の非を以て懷に介然たるの時に非ず、吾が多年の想像始て實にせられて心中の喜悦大方あらず、是より應さに務むべきの事は其の發見せる土地を以て我が有と爲すに在り、遠く海上より之れを望むに綠蒼たる島にして其の大西洋より面するの一方より背後に至る迄樹林繞立して宛かも天然至大の圓翠欄を築けるが如く、景色甚だ美なり、船員短艇に乘じて海岸に漕寄する時、暗色の土人外客の至るを見て大に驚き右往左往に奔走するを見る、後にて之れを察するに西班牙人を以て天人と爲し其船は綴合せる羽翼を以て空中を飛翔し其嶋の海濱より飛下せると、大鵬の如きものありと爲したるなり、嶋民斯の如く無知ありと雖ども淳樸謙遜よして能く禮を知り、其異邦人くるの後は心を盡して外客を優待せり、其

皮膚銅色にして頭髮蓬然、肩に及び顏色自ら寛容の氣現はれ、百般の巧智に乏しきと眞に遺化所生の子孫たるが如し、(聖薩瓦多嶋は現今地圖にワットリング、アイランドの名を以て著るゝ處なり)

開氏は部下の衆と共よ裝飾を修め儀典を設け、始て新世界の地に上陸の式を行ふ、一船陸よ進む毎に神歌を奏し第一に開龍、第二にアロンゾ、ピンゾン第三にヤネズ、ピンゾンと各々其部下の水夫を率ゐて逐次其艇より上陸し、高く十字架どフェルヂナンド、イザベラ兩陛下の徽號を有する旅章を揭げ、開龍先づ恭しく十字架の下に跪きて自己並に乘組衆員の無難と成功を神よ拜謝す、是時氏は身に提督の記號を佩るのみあらず其の發見すべき國土に王たるの記號を佩び且紫服を着けて其位權を表せしかば、前に氏を以て妄想欺負の徒と爲し之れを海中に投せんとしたる悖逆の輩も皆其周圍に跪きて敬仰すると神の如く、全く其大智に心服して深く前日の非舉を悔悟するに至れり、而して氏い其成功を喜ぶの餘、聖薩瓦多(大聖救世主と云ふ義)の名を以て發見第一の部分たる此島(衆と之をグワナハニ島と云ふ)よ命じ以て敬神報謝の意を表せり

初め開龍との島を以て遠く印度洋の盡る處に位し延張して日本、支那の東方に及ぶも

のなりと爲せしより、發見の後と雖ども加利比奄海の諸島を名けて西印度島と爲し其土人を呼で印度人と稱するに至る、是れ其の地理學研究上の誤謬に出るものにして氏、は其死に至るまで此の誤謬を守り、後の發見者精確の知識を以て此誤謬を訂正したりと雖ども其名は依然として之れを稱し今に至るまで遂に改るとなし

グワナハニの土人は金屬を利用するの術を知らず、西班牙人の煌々たる帶鉸を見て奇異の思を爲し、小兒の如く之を玩弄して其鋭刃を握り手を創傷するもの多きに及べり、又物貨交換の法を知らずして僅かに數個の玻璃珠、若くは、數片の紋布を與れば價の貴賤を擇ばず、喜んで其有する所の物と換ふ、而して其身に着くる粧飾品の價に富むが爲に忽ち西班牙人の注意を惹き大に貪婪の心を起さしめたるもの有り即ち其の耳鼻に帶る所の銀及び手節脚目に纏ふ所の薄帶皆純金ならざるはなく而かも之を輕ずること土芥の如し、外客之れを盜めば輙すく些瑣の物と交換す、遂に西人の發問に對し符徽に依りて其金の出處を答ふ、曰く「金は南方の某地より至る」と(譯者曰く南方の某地とは今より之を考ふれば「メキシコ」の事なり、「メキシコ」は聖薩瓦多島より西印度群島及び加利比奄海を隔て、南西に位せる大國にして國土の金銀に富めるとは後年其國發見以來の

歷史に於て既に詳かなり、然れども開氏グワナハニ島を發見せし當時に在りては其國名、所在、及び國柄に至る迄土人は之れを知らず、開氏も亦遂に知らず、唯南方の某地と云へると僅かに土人の記憶に存するのみ、嗟開龍の當世に不遇にして汚辱に身を終るも亦實に之が爲なり)是に於て開龍は再ひ船隊を艤ひ南方に向て航し去る、蓋し西班牙人は古來言ひ傳ふる所に由り且曩に歐羅巴に發行せるマルコポローの亞細亞旅行記を讀で無量なる黄金屬の獲らるべき土地あるを想ひ、殊に其書中に物語れる日本國は豪華壯麗の國にして其國帝は黄金を以て造れる宮殿に住すと爲しゝなり、土人等別るゝに臨み新鮮の菓實及び「カッサヴヮ」(同名の植物を以て造れる食料の名なり)を西班牙人の船に給し航旅中の食用に供して以て鹽となせり、是時彼等は何ぞ想はん、白人始めて其地に到るは正に其の族の禍難滅亡の時期を開くものなりとは、

古巴島の發見並にマルチン、アロンゾピンゾンの謀反

開龍の船隊は群島の間を航行し各島に上陸して或は其名を命じ或は其產物を檢し且土人に察するも都てグワナハニ嶋と趣を一にし其嶋より隨へ來る所の土人を通辨と爲し到る處の島地に金の產所を尋ぬと雖ども皆答ふるに南方の地に在るを以てし其

名を問ふに古巴なりと云ふ

十月二十七日始めて古巴島に達す、天然の景狀恰かも細々里島歐洲以太利の南ふ在り)に似て大なり其動植物の美麗なると他の諸島に絶て見ざる所なれば西人大に驚歎し、且閑氏其日錄に記して曰く「是れ世界に於て天工最も美麗の島なり、人誰か此地ふ永住するを欲せざらん、此地に住居せば絶て憂苦と感ぜず又死を忘るゝに至るべし」と其北岸の東部を航過するとき氏は古巴を以て亞細亞陸地に續きて突出せる部分と爲せり然れども其土人の外客を畏懼するとグワナハニ人よりも更に甚しく其の至るを見て直ちに逃匿せしかば百方招懷して僅かふ數人と親睨し談話を交ゆることを得て黄金產出の地を探問し、其内地に使節を派して之を撿按せしむるに、唯奇草珍花を齎らし歸ると雖ども黄金の富を獲るの望に至ては漠然として猶ほ想像に止まれり、是時に方り船中の西班牙人は心中漸く不正の慾念を生じ、只管罪業の母たる黄金に垂涎して將さに新世界發見の歷史上、鮮血の汚點を注がんとするの凶運を胚胎し、各々多量の金を獲て一時に富を爲すを以て其從事せる大業の目的と爲すに至りしかば、日本、支那の妄說再び其想像に現はれ、恍惚として其國の富潤を慕へり、左ればピンタ號の船將アロンゾ、ピ

ンゾンも亦黄金を望むの情慾に制せられて事の是非利害を思ふに遑あらず其船の破力特に快疾なるに乘じて他の二船に反離し、提督の管理を脫して自由に富潤の地を探捜し、多量の黄金を積載して先づ歐羅巴に歸り大發見の事實を復命して己れ其の名譽榮寵を專にせんと謀れり

閑龍は斯く不忠なる船將アロンゾに離反せられたる後、古巴の東に航進し遂ふ一大嶋地に達す、時に十二月初旬(千四百九十二年)あり、土民此嶋を海地と稱す、然れども閑氏は本國の名譽を傳へんが爲ふ小西班牙と云ふの義を以て之をヒスパニヨラと名く、是れ現今セント、ドミンゴの名を以て知らるゝものあり、其人民は寛厚順和にして喜で各酋長の治に服し安寧の生を爲す、造化自然の惠賜穰々として常に豐なるの沃地に棲息せるを以て未だ自他相貧るの欲を知らず、其美風善俗の高き未だ閑龍が經歷したる島民に於て見ざる所あり、氏其日錄に誌して曰く「本島の人民は廣大なる樂園に棲居して周圍に溝塹を作らず、又墻壁を繞さず、各自正實を以て行ひ絶て法律典籍及び判官を要せず、唯常に他を損ふて得とする者を曲と爲す」と玆ふ氏の身上に一大禍難を生ず、即ち其本船に在て寢眠せる時、船の進退を托せられたる水先案内某は故意ふ之れを岩礁に乘

上げ錨を陸地に運すと聲雷して一隊の水夫を隨へ短艇ニナ號の方に運る、是に於て氏は獸に殘れる部下の衆と共に桴に乘りて上陸し縱かに死を脫るゝを得たり、島の一酋長グワカナガリと云ふ者既ニ氏と和親を通ぜるを以て遭難の報に接するや、直ちニ舍を與へ欠乏品を給して其心を慰めり、而して島民の淳朴なる外客の禍難を見て涙を注て之れを憐れみ、酋長に從て難破船に至り、力を盡して諸品を引揚け之れを海岸に露積せしが曾て一の紛失せし物なしと云ふ、是猶ほ往昔英の賢王アルフレッドの時、貴重なる金裝具の路側に懸けたるもの曾て失へる事あきが如し、故に氏は島人の懇切と正實に感じ、其話中特ニ書して曰く「地球上何の處に尋ぬるも國土の善良にして人民の有德ある未だ海地ニ優れるもの有らざるあり」と

海地の島民も亦各々耳鼻ニ純金の環を佩び、頭ニ金裝の帽を戴き、敢て之れを貴重せざるが如くなるを見て、西班牙人は切ニ其黃金の產地を問ふにグワカナガリは其品物を與へて島內山間の地ニ黃金饒多なる地あるを解得せんとを求む、取りて之れを檢するに地名あり、シバオと記す、其シバング(當時歐羅巴の人日本を稱してジパングと云ひ支那をカシーと呼びしなり)と音相似たるを以て、扨は平素の想像果して實と違はず、今と

そ曾て世に知られざる黃金の國に至れりと閑龍は其名に歎かれて大ニ欣び、然る上は長留して事の敗れを致さんより、疾く歐羅巴に歸りて此の趣を復命するに若かずと切に歸航の念を起せしが、マルチン、アロンゾ、ピンゾンは前に已れに反て脫走し、吾が乘船は既に破壞して用るに足らず、唯小圓船ニナ號ありて頗る其用ニ充るを難ずと雖ども若し之れを全ふして西班牙ニ至らざれば其發見の密事は永く加利比奄海中に埋沒せんとを恐れ、乃ち歸航の準備を爲し且酋長グワカナガリの歡心を經、破壞船の木材を用て一の堡壘を築く、然るにグワカナガリは之れニ由りて他日其人民の禍害を生ぜんとは夢にだも預知せず、輙すく開氏の請に應じけり、開氏之れをヲナヴ井ダッドと名け西人四十名を留めて之れを守らしめ、ピートル、ダレナを其將と爲し、凡そ防禦に欠くべからざるの具い備へて遺す所なく、土人との貿易ニ充つべき物貨に至る迄其堡內に準備し、且常ニ酋長及び其人民と和親を保ち、島內黃金の產地に關して可及的の穿鑿を遂ぐべしと訓令し、是ニ於て氏はグワカナガリに別を告げ歐羅巴に向て解纜す時に千四百九十三年一月四日なり

氏は北海濱を航行するとき計らずもピンゾ号ニ會せしかバマルチン、アロンゾ、ピンゾ

ンに前に恵はざるの樂に由りて提督の船隊を離脱せりと詐辨す、是時閣龍は熟ら往事を回顧し遂に其のバロス港に於て三隻の船を購ふことを得たるは實にピンゾン並に其家人の力、與りて功あることを想ひ、其副將たる貴格に於て謀叛の証跡判然たるも拘はらず、寛大にも其分號を容れ遂に其罪を不問に措けり

閣氏風濤の險を冒して歐羅巴に歸る

是に於て提督閣龍はピンタ號を率ひて歐羅巴に進航す、然るに歸旅の航路は前回の如く風濤和順ならず猛烈の暴風、如山の怒濤、殆んと船体を沒せしかは、閣龍は一時大に憂慮し、唯其生命の危きのみならず其發見の成績も遂に歐羅巴に知らるゝを得ずして空しく海中に沈まんことを恐れ其新世界發見の事實を簡明に書し、密に器中に納めて海に投すること數回に及び、以て己れ若し部下の衆員と共に溺死するの後は、其書或る開明國の海岸に漂着して其大業の湮滅を救ふの日あらんことを冀へり、而して其納器の一洋中に漂ふこと二三百年間の後、實に某の國に達して某人の獲る所と爲れりと云ふ、偖航路の險難、此の如くなれば船中復た不平の聲を生じ、頑陋迷蒙の徒は風濤の暴烈なるを以て其提督の漫りに己れを恃んで遠洋の神秘を發くの神罰なりと爲し、氏を海中に投じて

神の怒を鎮めんと謀れり、然れども提督の威嚴自ら冒すべからざるもの有るに由りて因循其事を果さゞりしが終に船は太く搖蕩打破せられてアゾールス群島の一、聖馬理島に着す、然るに暴風猶は日を彌りて息まず、爲めにニナ號は其地より航路の外に吹流され三月四日葡萄牙國の海岸なるダゴス河口に漂着しければ國王ヲロン二世は閣龍を延見し航海發見の始末を聽て其功勞を讃歎せり、其れより西班牙海岸に廻航して遂に同月十三日バロス港に入る、實に其港民と憂愁の別を爲せし以來七八月を閲せり、是より先きピンタ號の將マルチン、アロンゾ、ピンゾンは再び船隊より脱離し閣龍に先ちて歐羅巴に至り發見の偉績を復命せんと謀りしと雖ども、海上の競走に敗れ、提督に後れて遠し、後數日にして死せり、蓋し其慚恚の情共死を致すの原因たらずと雖ども、亦之をして速かならしめたるなり、夫れマルチン、アロンゾの提督に反き之れに屬するの名譽を奪はんとしたるは其罪、誠に死かるべからずと雖ども然れども之れを公平に論ずれば其一罪を以て其少小ならざるの功勞に比し、輕重固より同じからざるを知らざるべからず、又千四百九十二年の大起業に於てピンゾン家の族共に共勞に與りて功あると亦後代子孫の宜しく感佩すべき所なり

閣氏のパロス港に歸るや衆民歡呼して之れを迎へ、其時朝廷パルセロナ府に在りたれば政府提督に命じ其地に至りて復命せしむ、フエルヂナンド並にイサベラの兩陛下は極めて鄭重ある禮を設けて之に接し、直ちに陛下よ咫尺して其發見の始末を口頭もて奏聞せしめ且其の齎らし歸れる印度人、美麗の奇鳥、稱有の草木、眞實、純中純金の冠、其他の粧品を覽て大に歡賞せり、是に於て閣龍は最に訂約したる官位特權を以て任ぜられ更に彼の地に渡航して發見征略の事業を全ふすべしと命ぜられぬ

閣龍第二の渡航

千四百九十三年新世界へ再渡の航海事業に對し、西班牙王室が監督保護を與るの懇切にして且厚きと、全く前年と異なり、他の人々も先づ黃金を獲んと欲するの心に誘はれて、續々其募に應じ、相援けて大西洋外の新發見地に十字架を樹て、西班牙の國旗を翻へさんと望むもの數百の多きに及べり、右に關しては閣龍は都て其發見すべき國土よ於て西班牙國の代王たるべき權理を有し、セヴヰルの副僧正ッオンセカと云へる者、西印度島の監督と爲り閣氏の再渡航海に關する一切の準備を督すべき任命を蒙むれりッオンセカは其後閣龍事業の勁敵と爲り常よ奸計を以て之れを窘むるの人あり

其船隊は十七隻を以て組成し特に大なるもの三隻あり、乘組の總員千五百人を下らず、皆事業の成功を期し同年九月二十八日を以てカヂズ港を發す、然れども概して之を言へば其輩眞に殖民に適し又發見の業に堪るよ非ず、多くは少壯なる下等貴族輩の或は血氣に乘じて危地を踏み以て其能を試みんと欲し、或は一時に其身を富さんと欲するの心に出でゝ之れが徵募に應せるものなれば輕躁よして威權を輕侮し規律に背き援々として統制すべからず、故よ此輩を率ゐて起業の目的を達すること難きのみならず、其心情常に新世界の人民を虐待するを好で之れを誘導教化するを欲せず、唯其本國を出る時共に前途を樂で斯る形跡の毫も現はれざりしのみ

第二の航海も亦第一の如く風濤靜穩にして貿易風、南西の方に船隊を吹送る、其便に乘じて閣龍は針路を更に前回より南よ定めしかば、之か爲めよ新奇なる發見を爲すに至れり即ち十一月二日よ於てグワダループ島(西印度小アンチル群島の中にあり)を發見し其地に於て西人始めてカリブと云へる野蠻人種住居して人肉を食ふの惡習あるを知れり、カリブ人の事は嚮に閣氏の古巴、並に海地を發見したる後、曾て其醇厚なる土民より聞ける所にして、斯る惡習の顚迹あるを以て考ふれば其人民の獷悍怖るべきを知

るべし、但し西人は之れを發見したるの際其數人を捕獲せりと云ふ、是より閻氏は郷に本國へ歸帆の際海地島に設けたる殖民地を訪はんと欲し、航路を轉じて其地に帆走す」

閻龍は殖民地の海岸に至りて入船の號砲を發すれども關として之に應するの聲あければ怪みて陸より上り之を檢するに、何ぞ圖らん堡砦は破壞して僅かに其址を遺し巨砲、毀れて半は地に埋まり白骨四邊に散轉して凄愴たる光景を呈せるは、問はずして堡内の西人悲慘の境遇より死せるなると明かあり、島民は西人の再び至るを見るや直ちに畏懼して遠れ、其の前年之れに對して厚遇を表するに反せしが、遂に酋長グワカナガリより事の顛末を聞き、始て釋然たるを得たり、並し前年閻氏の島地を去りし後、幾もなくして留守の西人暴威を振て無辜の土人を虐げ之れを亡ぼして遺孽あからしめんと欲し、男子を捕へて奴隷となし婦人女兒を劫掠せり、斯る暴虐無道の行を爲せしかば島内の人民は憤然として復讐の念を發し不意に西人を襲ふて之れを屠殺し以て其不仁に報ひりと云ふ

因りて閻龍は其址を距る少許の處に於て更に殖民地を建設し其志業の恩主なるカスチルの女皇に擬へて依撒伯の殖民地と名く、之れを新世界に永續せる歐羅巴殖民地

の嚆矢とす、閻龍は自ら督して家屋を建て墻壁を繞らし耕地を設け道路を築き、及び内地探檢の準備を整ふる等、一時其地に經營の勞を執れり、並し新殖民地活動の基礎を擊るは即ち黄金を收獲するが爲より必須の事業なればなり、然るに彼の黄金所産の地と聞けるシバオ山は殖民地を距ること敢て遠きに非ざれば西人は切より其地を尋ね行けりと雖ども、其の收獲せる所の物は全く盥む所と異なりしかば其失望不平なるい固より論なく、更に土人に問ふに、島の南方に於て金を産するの國ありと答ふ、因りて閻龍は弟ドン、ヂーゴを副將と爲し、依撒伯より留めて之を守らしめ、更に船に乘じて南方より航す、其の古巴海岸の一部を經過するとき猶其の亞細亞大地に屬せるものあるを信せりと云ふ、其より氏は土人の指示に從て南駛し一の大島牙買加より着し、唯其人民の勇悍にして戰を好み、草木の鮮麗奇異なると、風光の勝絶なるを見ると雖ども其切盥する所の黄金に至りては絶て自然に存するの跡なければ、氏は其地を去りて船に乘じ尚も探檢を極めんと更に航して南方に進みしが、偶ま病作りて果すを得ず、船艦を回してヒスパニヲラ(海地島)に歸れり、並し其の勞苦艱難を經るの久しきに由り、終に心身の健康を傷りて酒瘧より起り、身體の苦痛甚しきより加へて精神大に疲勞し、委頓幾ど死するが如く荷はれ

て依撥伯に上陸せしが全身衰弱を極めて幾んど治すべからざるが如くなりしと云ふ

パーゾロミウ、コロムバスの渡來並ふ閣氏怨府となりて西班牙に歸り第三の渡航を企つ

纔かふ是時に先ちて氏の弟パーゾロミウ、コロムバス殖民地ふ至る、誠に幸ありと謂ふべし、パーゾロミウは勇猛剛毅の人にして終始其兄の事業を輔け堅强の藩屏たる實を表せり、而して其輔翼の緊要なること未だ是時より甚しきもの有らず、其故如何とあれば是時殖民地の形勢正に瓦離紊乱し失望の氣、結で黨を成し、管理者に反抗して怨讐の眦顯りに西班牙に流傳す、然る所以のものは既ふ西人の間ふ傳説せる許多の金穴も全く其架空の想像に過ぎざるを知り、止むを得ず其黄金を獲るの夢想を棄て新殖民地の基礎を定むるに欠くべからざる勞役の責自然免かれ難きふ至り、扨は心中の不平を聲して提督ふ抗し、是れ衆を欺く者ありとし、數名の不平黨西班牙に歸りて其怨を訴へしかば、西印度監督フォンセカは情を傾けて之れを聽けり、フォンセカ常に閣龍を憎み以爲らく、彼れ吾が西印度管轄の權を侵すものなりと、是に於て計を設け委員を特派して殖民地の事情を檢察せしむ、其委員はジュアン、ダ、アグアド之に任じフォンセカ腹心の

黨なり、而してアグアドーが鋼心を抱きて証左を集むるを見て、閣龍は以爲らく是れ敢て予が過失を以て國王陛下に奏し、以て予を譴問せんと欲するものあり、若かず早く歐羅巴ふ歸り自から衷情を陳て陛下の信任を全ふせんには」と、乃ち船を艤ひ纜を解て發す、而して其のカヤズ港に達するや大に前回の榮歸と趣を異にし、昔て西人の想望せる如く多量の黄金を獲るの目的は遂に遂し得ずして貧乏富貴は一朝の夢と化し、惘れむべし失意怨恨の衆、怏々としてカヤズふ上陸し、自から以て閣龍の妄誕に欺かれたりと爲し悵然として其怨を報ひんと欲す、左れば閣龍も亦其境遇大に前日と異なれるを覺り、且怨望猜忌と相投じ相結で吾が命を絶たんとするを知れり、當時朝廷はポルゴス府ふ在るを以て閣龍は兩陛下に謁せんと欲して其地に至る、是時氏の服裝勇壯なりと雖ども桑力清會(基督書歌中セント、フランシスを信奉する一派の歌會にして即ち閣龍の歸依する所なり)の束帶を用ゐ頭に帽を戴かず跣足にして靴を穿たず其行裝の簡薄なると全く前日の美に反せり、皇后イサベラの順良なる、既に西班牙王室の名譽を擧げたる偉業家閣龍の至るを見て輙ち感動し、齢已に晩年に及ぶと雖ども其能を忌み又之を怨望する者あるが爲に未だ其功名を全ふするを得ずして只管讐怨の告訴ふ對し、己れ

を辨護せんと欲するの情を哀れみ、王フエルヂナンドも亦閣龍の辨解に由りて其寃を雪りしとを明かにし、自ら無實の罪告に欺かれたるを知れり然れども王は性慧黠にして方畧に富むの君なれば閣龍の殖民地に人望を失へるの是非を判せんと欲し、他事に託して之れを抑留したり、故に陽に氏を庇護して、更に新世界の秘密探檢の船を出さんとを欲する氏の鋭望を亟聽すと雖ども依違として事を決するとなく往時星霜を累ねて猶ほ船隊を艤するの運に至らず。而して氏は今齢既よ耳順を過ぎ既よ殖民地に於て非常の要慮艱難に逢へると重病長く身を冒すに因りて心身大よ疲羸し甚だ孤寂の急なるを覺へ、皇后依撒伯は西班牙人の島民を束縛し苛酷の所爲を行ふを憤り印度人に對して其の自主自由を許し之れを待つに正道を以てすべしと誓へり、然れども輕躁不仁なる西人は島民を束縛し之れを驅役するを以て自ら富を獲るの一要計と爲すが故に此擧をして后の誓條を守らしむると甚だ難しと謂ふべし、以上陳るが如き種々の事情あるに由りて閣龍が第三渡航の請願は往時として日を移し、長年月を經るの後に於て始めて允可せらる、其航海よ於ては氏は八隻の船を出さんとを請ひ其二隻を以てヒスパニオラニ糧食を運送し、自餘の六隻は親ら之を將ゐて探檢の用に充てんと欲す、而

して其探檢に於ては嘗て其想慕せるヲフヰル國(蘇路門王黄金を獲たるの地)を發見すると疑ひあるし、と想へり

千四百九十八年閣氏第三の航程に發す並に兄弟禍難の前兆

閣龍の第三航海の允可を遲延せしめたる所以の事情種々ありと雖ども就中重大の一理由と爲すべきものは國庫の空乏即是れなり、蓋し國王フエルヂナンド陛下は西班牙の王室を盛大富强ならしめんが爲に巧みに機密の政略を行ひムール人を征討して版圖を擴充しアラゴン、カスチルの國家を合併して一大王朝と爲し、以て其威權を鞏固ならしむる等莫大の國費を冒し多くの年所を費やしたれば之が爲よ閣龍が願意を貫くの妨碍と爲り、遲延して千四百九十八年四月に至り始めて其第三の航程よ發するを得たるあり

閣龍が畢生の友なる皇后依撒伯は力を盡して氏を庇護し之れを益するの道を謀りしかば氏は其官爵と俸祿を定められ、且千四百九十六年一般の航海者に自由を許すの法令は大よ氏の權理を侵すものとして憾を抱きしが今之れを磨して氏の特權を全ふせ

り、又氏の弟バーブロミウ、コロムバスは嚮に殖民地に於て其兄の爲に鎮將たるの職任を受けしが、是に至て陸下より其命を拜せり、然るに其航程に上るの後、幾もなく船中甚だ不穏の兆を發す、即ち當時バダロヨズの督獄として西印度島の監督たるフォンセカ常よ闘龍に反對し百計を運して氏を妨碍し、是よ至て其腹心の黨ダ、プレヴサスカと云ふ者をして第三航海の提督船に乘組ましめしかプレヴサスカは船中に於て公然と闘龍を侮慢したれば氏は憤怒己れを忘るゝに至り毆て佞人を倒し足を擧て之れを蹴たり、然るに氏は之に由りて陸經の口實を敵人に與へ、輕率暴戾にして將帥の任に適せざる者とせられんとを恐れ、直ちよ筆を採りて其顛末を讀るし且凱切に事を辨明して若し己れの失を陸下に奏する者あるに當りては第一己れ親しく其進奏の席に在らざる事、第二其身常に他人の猜忌する所たる事、第三己れ外國の生にして西班牙人は常に之れと同胞の感情を有せざる事を必よ記せんとを請ひ之れを西班牙よ遣はして兩陸下に上らしむ

亞米利加大陸の發見、附たりトリニダッド嶋並にチリノコ河の事

既に貪婪無厭の投機者流が黄金を獲んと欲して獲ると能はざるより、本國の人民は之れを明傳へて眼に新世界思幕の念を折き、之れを視ると更に前日よりも冷淡なれば、今は千四百九十三年の如く渡航を切望して募に應するもの衆からず以爲らく「彼の新世界は財貨乏しくして艱苦多く、居留者の甚た眠ふへきの地なり」とて共に渡航せんとを乞ふもの稀なれば闘龍は止むを得ず輕犯の囚徒を募集して此缺員を補へり、蓋し其意よ以爲らく「斯く募集せられたる囚徒は必ず其地位の改良せるを喜で快く殖民地の勞役に服すべし」と然るよ此處置よ由りて豫期に反對するの結果を生じ、爾來輕躁奸惡の亂民、殖民地よ充滿し輙もすれば他黨と相結で騒擾叛亂を企て以て管理者の威權よ逆抗せり

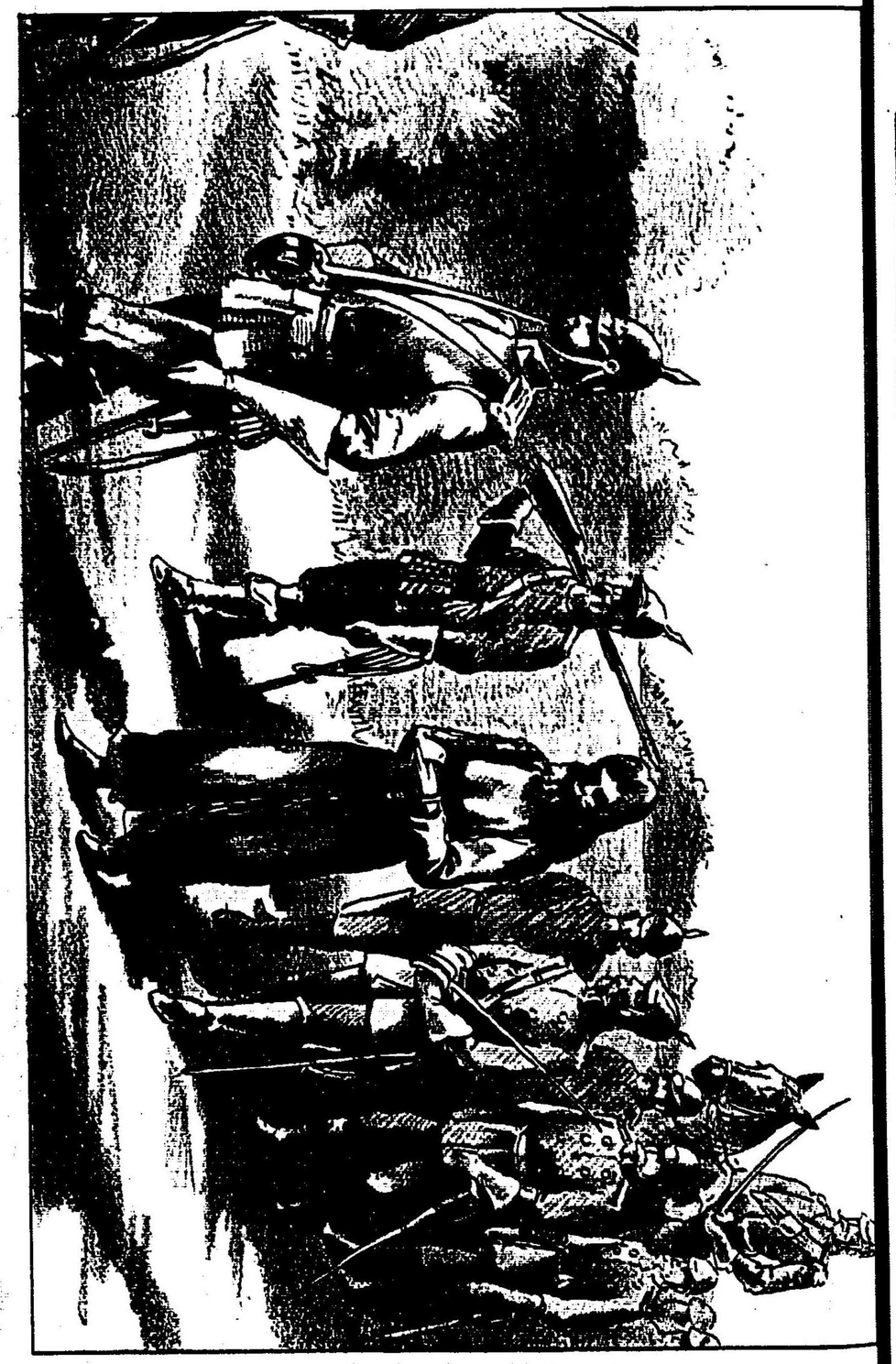
偖て闘龍の船隊はクープヴオルド群島(大西洋中に在り)を經過するの後、針路を南西よ取りて更に前回よりも南に駛行し、遂に赤道線を距る五度の處よ達して海上全く平穏の境に入る然れども暑氣極めて酷烈なるよ由り、熱帶地方を以て住居すべからず」と爲せり古來の死說、茲よ再生し衆皆苦悶に勝へざるより止むを得ず航路を變じて一時西北に進行せしが偶ま「トリニダッド島(南亞米利加州ヴェネヴエラ國の東岸に在り)を發

見せしかば即ち其近傍の海岸に於て一時碇泊す、其碇泊の地は實に是れ南亞米利加大陸にして有名の大河ラプラタ(大陸の西部安的斯山に起り東流してヴェネシエラ國海岸に至り大西洋に注く)の口を距ること遠からずとす、有名なる記傳家某の說に曰く「是時閣龍はラプラタ河の本流、及び其支流より無量の淡水を注出するに由りて海水の色を變するを見て驚くも其の上陸したる地の實に大陸なることを斷定せり」と然れども是れ甚だ疑ふべきの事なり、氏は他日已れに繼て其大陸を探檢する者ありて遂に其人の名は新世界大陸と離るべからざるの關係を生ずるに至るべしと想はざりしを以て見れば氏は竟に死に至る迄其發見したる地の何たるを知らざりしならん、故に是時敢て大陸に進入して深く之れを探究するを爲さず纜を解て北向し其殖民地なるヒスパニヲに航行せり、然るに氏は思慮監督の繁劇なるに由りて又も心身の健康を傷り病に勝へずして島地に着せしが、弟バーザロミウの迎待するに遭ふて大に其苦痛を慰めり、是時に至る迄バーザロミウの剛毅能く兄に代り艱難の中に在て殖民地の事務を執り其恒を變ることなしと云

殖民地の叛亂、並に使節ボバヂラ閣氏兄弟を捕縛して歐羅巴に送致す

殖民地の西班牙人は常に擾亂を企てゝ鎮將に抗し且無辜の土人を待するに暴虐無道を以てするの形勢なれば閣龍が曾て弟バーザロミウに吩咐して別に島内ヲセヤ河の近傍にサンドミンゴと云へる一殖民地を建設せしめたるに、其地の西人、黨を結び貪惡無厭のロルダンを推して魁首と爲し公然鎮將バーザロミウと戰を交へたり、是時閣龍は專ら和解の策を取り、內閣久しきに亘りて終に殖民地の廢滅を致さんよりは兩者互に相讓て仇怨する所なからしめんと努めしかば、擾亂遂に鎮定したりと雖ども、不平叛逆の餘燼未だ全く滅へず、船の歐羅巴に行くもの有る毎に殖民地の人必常に服せず、且土人際に乘じて叛を謀り其貢稅を納めずと報ず、是より先きフエルヂナンド陸下は閣龍が其船隊を督し陸地を發見するの功、既に著るしと雖ども混合無數の西人を陸地に統帥して其治平を保持するの才能に乏しと爲すと已に久しかりしが飛報頻りに至るを見て乃ち以爲らく殖民地の形勢、此の如し、宜しく全權の使節を派遣して事情を糺察し、若し止むを得ずんば閣龍の官職を褫ひ、併せて不軌の徒を責罰せしむべしと王の策甚だ善し、然れども其人を選ぶの當らざるを奈何せん、即ちドン、フランセスコ、ド

ポパヂラと云ふもの命ぜられて全權使節と爲り、殖民地に至りしが、秘密苛察にして使命の本旨を誤り、斷乎として、パーヅロミウ、コロムバスに命じて其官を辭せしむ然るにパーヅロミウは命を拒で應せざりしかば乃ち部下に命じて之を捕へ、鏈鎖を以て縛せしむ其の基督法、閻龍を待するにも亦此の如く擅斷苛酷の所爲を以てし、情を傾けて亂黨の囚告を聽き桎梏を以て之を束縛し之を依撒伯の堡塞に幽閉したれば一時は斯く著明なる功業者の運命も憫むべし斬首盡上に終らんとするかの想ありしが、追ふポパヂラも西班牙王室に偉勳ある其人を待するに斯く迄は擅斷に渉りかねて閻龍及び其二弟あるパーヅロミウ、ヂーゴを鉄鎖に繫ぎ本國に送致せんと決し、且殖民地にて既に私犯を以て刑せられたる品行穢惡の賤民を撰び其一群を送りて以て閻龍兄弟が殖民地の安寧を保持するに託して漫に酸酷の制御を行ひ、以て衆怨を釀したるの罪左に供せんと欲せり閻龍は今其身に蒙れる寃枉を悲憤せざるに非ずと雖ども、其の首として憂る所のものは唯吾が名の誤認に蔽われて後世子孫に至る迄遂に其汚辱を雪ぐ能はざらんとするに在り、是時閻龍の反敵ッオンセカは閻氏兄弟を歐洲に護送すべき事を部下の吏アロンゾ、ヂ、ゲサレゴと云ふ者に命じ且、其カヂズ港に着するときは直ちに之を



已れよ引渡すべしと訓令して殖民地に遣はしたるを以て見れば、フオンセカは自ら其意に從て閑氏の罪を斷めんと欲するものゝ如く察せられたり、然れども閑氏は以爲らく「警吏ゲサレゴの至る是れ予を斬首よ處するが爲なり」と、而してゲサレゴ護衛の兵を隨へ來て、閑龍を船よ拘送せんとする時氏は、慨然として問て曰く「足下予を何處に導かんとするや」と、答て曰く「閣下を船よ乘らしめんと欲す」と曰く「足下の言ふ所眞なるや」曰「然り」と是に於て閑龍い自ら心を慰め以爲く「吾死するの前必す吾が屈辱を明かにするを得べし」と乃ち新世界の發見者閑龍は足に桎し鉄鎖よ繋がれて奸惡なる罪人の如く一隊の警吏に誘ひられて船中に乘込み西班牙に護送せらる

是時海上浪靜かよ風順なれば航行快疾よして險難を覺へず、ゲサレゴ及び部下の警吏は深く閑氏を憫みて之を優待し、其縛を解て苦痛を宥めんとするに至りければ、氏は稍や其憂愁を減ずるを得たり、然れども其身に結へる鉄鎖を解かんとするに至りては氏は之を辭して曰く「是れ王后陛下の命あるに至る迄吾身體より解かざるべく且尙後來と雖ども予が功績に對する西班牙王室の賞牌として長く之を吾家に保存せんと欲す」と其後氏は果して其言を守れりと云ふ、其子ッエルヤナンドの言ふ所に據るに曰く

「予は父が常に其鉄鎖を室内に掛け保存するを見たり而して父は常に言て曰く我死なば共に此鉄鎖を墳墓に埋むべし」と噫

閣龍カヂズ港に上陸したるとき其鑑然として鉄鎖に縛せられ両足に桎せらるゝを見て衆叱呼してポパヂフの酷待を憤れり、閣龍は偶ま皇后の嫡某の其地に在るに遭ひ、之に事の實狀を告げて以て當時グラナダに在るイサベラ陛下に奏聞するを得たれば、陛下は惻然として之を憐み艴然として措置の擅横を怒り、直ちに両陛下より命じて閣龍の縛を解き、之を釋放してグラナダに召し、旅費二千「ダカット」(「ダカット」は貨幣の名なり)を給す、閣龍朝廷に至りて陛下に謁見し其の勞苦經營して寃を訴るの事實と具さに辯奏せしかば、皇后イサベラは深く感激に感動して涕泣、衣を濡し、王フェルヂナンドは直ちに之が爲にポパヂフを罷め閣龍の官職を復すべしと約せり、故に王は令してポパヂフの全權使節たるを罷免せりと雖ども、然れども閣龍の官職を復するに至りては王其言を左右にして躊躇せず、蓋し王は業已に閣龍を以て海上船を督するに長するも陸上人を御するに短なる者と爲せしが、是時に至りて前に閣龍が部下の船員となりて航海の技に習ひ、殆ど氏の業を繼

ぐに堪る者を多く輩出しければ、向後新陸發見の事業を擧て此輩に任じ、巧みに氏を疎外して嚮の訂約に關する發見地の所得を制與すべき責を免かれんとすればなり故に氏を釋放するの後、久しく之に航海を命ぜず、千五百二年に至りて始て提督の職に復し第四回の航海を命ずたり、是時恰かも葡萄牙の航海者ヴァスコ、ダ、ガマと云へる者東方に向て印度に達するの航路を發見せしが閣龍は猶ほ古巴島を以て亞細亞大陸の一部分と爲し自ら西方に向て印度に達するの航路を發見し得べしと云へり

閣氏第四回の航海を爲し終に不遇にして垢を銜み死す

是時閣龍は齢已に六十六に達すと雖も尚ほ地球を周航するの志を以て遂にカヂズ港を纜を解けり、其精神の不撓なること此の如し、其船隊は四隻の圓形船を以て成り積量七十噸より五十噸の間なり、其の本國を發するに當りてや途次必らず、セント、ドミンゴに寄港せざるべきの命を受く、蓋し氏の再び其地に至るが爲に殖民地の人心動搖の虞あらんことを恐ればなり、然るに氏は其船隻に駛力遲鈍なるもの有りしかば之を輕快の船に換へんと欲してセント、ドミンゴの海岸に至りしに新任の管理者ヲヴァンドは其上陸を拒て許さず、且閣龍が非常の暴風、將さに至らんとするを豫知して港内に碇泊せん

とを請ふと雖も亦肯許さず、蓋し奸黨ポパヤラ並にロルダンは其土人より強迫して獲たる鉅萬の財貨を積載し許多の黨與と共に乘船して正に本國に歸らんとするに會ひたれば、閑龍は其宿怨を棄て、今や暴風將さに至らんとするの危險を告げたれどもポパヤラ等之れを輕蔑して顧みず、船を出して海上に進みたれば何ぞ遂はん船は海上に覆沒して遂に魚腹に葬らる、其時閑龍は寄るべき處なければ暴風を冒して船隊を督し、成るべく陸地に傍ひて地位を守れり、其より氏は亞米利加海岸の一部を探檢して遂に幾ど墨西哥黃金國の秘密を發見せんとするの地位に至りしが其船隻の太く損じたると部下の苦情甚しきに因りて止むを得ず舳艫を返してジャメーカ島の海岸に至り其破損船を浸處に乘上げ以て其沈沒を救へり、是時部下の員二人、一葉の艇木舟に乘じ危險を冒して加利比奄海を渡りセント、ドミンゴに至りてヲヴァンドに告るに閑氏の現狀を以てし其救助を求めしが奸黠なるヲヴァンドは閑氏をして困難病患の爲にジャメーカに死し遂に其功勞に對する要求の名を長く湮沒せしめんと欲し故らに遷延して救助船を遣さず切に其死沒を待ちしが事、望の如くならざりければ閑氏遂に救を獲て西班牙に歸る、時に一千五百四年なり、其時皇后イサベラは既に崩じて在らず、獨りフェルデナンド陛下の在世せるありと雖も是れ未だ氏の爲に組篤なる恩主たらず、待遇甚だ冷淡ありしかば爾來氏は貧窶にして幾んと其殘生を安慰ならしむる能はず、終に齡七十五歸として一千五百六年ヴァラドリットに死し其子ヂーゴ提督の職權を襲ぐ、氏の未だ死せざるの前數日櫛にフェルデナンドが其后イサベラと親しく其名を記るし璽を鈐して氏に盟へる條欵を履行せざるを歎じ一友人に遺る所の書に曰く「予は力を竭して予の務むべき所を行へり任他れ餘事は予之れを吾が神明の德に委す蓋し神は予が要むる所の事を恤まざると無ければなり」と噫

閑龍に關する批評

英國の某記者曾て閑龍の功勞と之に對する王室の冷遇に就き巧に批評して曰く「閑龍の絕大起業家たる名譽は万世に傳へて決して衰へず、聞く者其功德を歎賞せざるはなかるべし而るに其の冷遇汚辱を蒙る所以のものは其功勞の絕大にして之れに報ふべき適當の道なきが故なり是れ古今の事例に於て往々見る所にして怪しむに足らざるなり、斯る場合に於ては其王室に寵を獲たる嬖人、阿諛、命を行ふに由りて特り榮賞を受くべしと雖も嶽爾たる一王國に加ふるに廣大不測なる新世界の版圖を以てし名譽赫

々として人をして眩せしむるときは猜忌之より由て起り讒說之より乘じて入り遂に其人を目して君王と地位を爭ふものと爲し之より報るに不信不義の爲を以てするに至る、夫れ闘龍の身を不幸に終る所以のものは職君王と協同の威權を以てせんとを盟ふに在り是れ實に氏の注意到らざるものあり、氏若し利害を熟思せば王と事を共にするの不可なるを悟りしならん可惜哉」

又西班牙の正實なる某記者闘龍の性質行狀を評すると左の如し曰く「闘龍は體高く顏長くして容貌甚だ威あり、鈎鼻白眼にして肌色鮮はし、少壯の時頭髮頗る美なりしが難難を累るゝ及で變じて頒白となれり性快活にして能く辯ずと雖も擧止沉着にして度あり、其の人に接する丁寧にして且巧に談話し而かも氣風儼然たるに由りて世の才人名士皆之を愛慕崇敬せり、其の法敎を信するの篤く德行を修むるに嚴なるを以て氏に隨て航海する者は必ず多少氏の敎化を被らざるなし、曾て亞米利加の印度人をして自ら率する所の神に歸依せしめんと欲し力を盡して之が敎化を圖りしが、先づ西班牙人をして其の行ふ所を信實あらしめ、然後漸く島民に及ぼさんとせり、人と爲り剛毅にして大業を喜み、儉素にして能く艱難傷害に堪へ、常に其敵人をして自ら過を悔しむ

るを勉め之に怨を復すると好まず、躬自ら危難攻擊の中に在りと雖も固く天命を恃み泰然として驚かず、之を要するに氏にして若し古代の歐洲に出ては必ず其行爲功勞の爲に時人祠宇を築き肖像を造りて以て氏の名譽を表しヘルキユレス（古代希臘敎の神にして大力無双の勇將なり）並にバッカス（同敎神祇の一にして酒を司るの神あり）と同一の地位に列せしめ且つ其名を擬へて天の一星座に附せしなるべし、今然らずと雖も氏の名は万世に傳りて滅ると無かるべし」と

以太利の統一成し難きに似たり

○ジヨセフ、ガリバルヂ傳

以太利國統一の事は實に成し得べからざるに似たり

諺に曰く「事實の奇なること小說よりも奇なり」と夫れヴヨセフ、ガリバルヂの映は實に此言の眞意を證するに最も的切彰明のものなり、唯外面の形勢より觀れば其事業は全く成功の望あきが如くなりと雖も正實且忠勇なる以太利の濟世家ヴヨセフ、ガリバルヂが劇苦淬厲の後より得たる效果は實に壯且大にして古今史上、未だ曾て其比あるを見ず、蓋し正理を思ふの情は堅ふして動かすべからず、奇政に困める人民を憐れむの念は深ふして拔くべからず、數々出でゝ正義公道の爲に爭ひ千顚萬起、遂に能く國民の元氣を振作して外國の壓制を脫し不羈自由の基を開きて政治を更革し、一國樂んで立つの時至るに遭ふ、抑も以太利をして能く此盛運に至らしむるの人、即ちガリバルヂが勢力の强大なる古今未だ曾て其比を見ざるあり

凡そ世に難事多しと雖も、當時長く歐洲諸强國に分轄せられたる以太利諸部の地を併せ同質同體の一箇獨立國として統一する事業の如きは、之を當時の形勢より考ふるに實に難事中の難事あるが如し、故に墺地利國の威權を負ひて以太利の屬地に臨めるメ

ッテルニッタは常に以太利半島を蔑視し且曰く「以太利半島は之を一個の國として視るべからず寧ろ是れ地理學上の名なるのみ」と、夫れ此の如き勢なるを以て當時切よ以太利の不羈安樂あるを賞ふの志士多しと雖も已に諸强國の半島に專權を立ると堅固にして拔くべからざるを知り、事を擧げて爭はんも其成功は實よ期すへからざるものと爲し、敢て之が圖を爲す者なく、唯偶ま ジヨセフ、ガリバルヂの如き稀世の豪傑あり、其後よ至りて遂に以太利救濟の大業を成就したりと雖も、當時多くは氏を目して輕躁有害の冒險者と爲すに非ざれば已れを亡ぼし且之よ隨ふ狂妄の徒をも誤らんとするキホート流(ドン、キホートは有名なる西班牙小說の任俠武士にて自ら世界を周遊し强を挫き弱を救ふを業としたる者あり)の熱心者なりとして痛く擊蹠したり、然るよ此偉業成就の時機終よ到りて之を利用するの人亦終に出づ、即ち其時機は一千八百六十年にありて又其人は衆の曾て擊蹠せる熱心者ガリバルヂあり其公道を守るの志操、金石の如く、情に當て事を擧げて敗を取りしかば更に奮起して畢生の勢力を振ひ絕大の勝利を得て其汚辱を雪がんと勇を鼓して再び半島の中原に出づ、是に於て曾てガリバルヂの成功を疑へる人々も氏の全勝を得、凱陣を爲すを見て皆歡呼して萬歲を唱ふるに至

唯ガリバルヂ能く此偉業を成就す

れり

ガリバルヂ濟世の偉績よ由りて考れば專ら經驗を以て事業成就の基本と爲せる議論は偉謀雄圖より生ずる人事の變化を斷定するよ足らざるを知るべし是れ氏の傳の特よ價値ある所なり、蓋し謀圖數々敗ると雖も、其事遂に時機に會して成るに至るべく喩へば季節到りて地味熟し而して後、種子遂よ萠して根幹を生ずるが如きあり

以太利の命脈將れ絶んとして纔かに存す

曾て旺盛なりし以太利の樂土一たび專制の威權よ從ひてより既に幾百の星霜を閲せり嘗て第十八世紀の中頃に當りゴールドスミス之を詠ずるの句に曰く

南方地沃衆、禾滋唯惆半島人心衰、

と又曰く

當政百年壓民心、壯土雄圖遂不伸、

と然れどもゴールドスミスは其後長く生存せざりしを以て遂に以太利國民の貴重なる行爲を知るに由なく又其在世の時、縱令半島人民は自己の利害を視るに淡泊なるが如くなりしと雖も是時敵愾の氣、磅礴として以太利の天地に塞り恰かも其葡萄林下の

地熱鬱積し將さに些頭を得て轟然爆發せんとするが如き形情あるを知らざりしあり」

一世拿破崙は元と以太利の人(千七百六十九年コルシカ島よ生る)なれば夙に半島人民の氣風を領得して之を自家の功名よ利用せんとせり、曾て其幼子を羅馬國王に封じたるは當時其名あるに過ぎざりしかども是れ實よ帝權の下よ以太利を統一せんとするの企謀に出ると疑ふべからず、然れども千八百十四年に當り拿破崙一旦其本國に於て帝權を失ひければ以太利を統一せんとの目的は固より消滅したり、サーデーニアの王ミユラーは千八百十三年レープシックの戰の後其妻の兄よして且重恩の君主たる拿破崙よ背きて封土を維持せんと謀りしが遂に奪ひ取られて羅よ曾て其領主たりしボールボン家のフエルヂナンド代りて之を管理す、然るよ前の領主ミユラーは資性苛酷なるよ拘らず其政略頗る寛厚なりしが後の領主フエルヂナンドはサーデーニアよ王たるの後幾もなく其世襲の氣風に從て貪婪酷虐なる苛政を行ひ、以て翌に佛蘭國革命の亂に由り國外に追放せられたりし其間、絶て心に學知したる所なく又傳來の家風に於ては一も忘るゝ所なきを證せり、(ボールボン家の君主は祖先以來威權を擅よし苛制を行はざる者一人もあるとなし故に酷薄貪婪をボールボン家傳來の家風と云ふ)扨又ヴェ

チシヤは千七百九十七年カムポ、フオルミローの和議に於て伊破崙之を墺地利に讓與し爾來共國の有となり、ロムバルヂーも亦當時墺地利の領する所と爲れり、是時に當り羅馬よ屬する諸國よ於ては法皇俗權を回復して親ら行政の事務を執れり、法皇領と北部なる墺地利領の間に位せる以太利の地はタスケニー、モデナ、パルマ等の如き種々の公爵國に分れて皆墺地利の監督保護を受く、例へばパルマ並よりニツカの二公國は墺地利帝フランシスの女にして伊破崙の後妻なるマリー、ルイサの終身采邑と爲れるが如し、半島北西の一隅にはサルヂニヤ王國ありて初めピードモント及びサルヂニヤ島を以て成りしが、後ちジエノアを以て之よ加ふ、當時以太利全土の形勢此の如くにして到る處よ專制の政府確立し各々競ふて嚴酷の政を行へり

且是時よ當りて歐洲諸強國互に約を結び力を協せて各々其臣民を抑壓せんとを務めたり之を神聖同盟と云ふ、是時獨り英國は首相カンニング之を拒みて此同盟よ加はらざりし共名譽は今に至るまで識者の稱賛する所なり、右の同盟は初めとう掠く名けしも其後墺弗の意を以て「諸國民の自主自由を妨碍する諸王の神聖同盟」と稱せらるゝに至れり、其同盟の主意は同盟國の人民中若し黨を結ひ亂を企るの徒あるときは之を鎮

壓せんが爲に自餘の同盟國の援兵を假るを得るに在りて既に此主意を實行したること數回なり、今其の一例を擧れば千八百二十三年西班牙の庸君フエルヂナンドが其誓言よ背きて擅まに憲法を廢したるより國會は王の爲す所よ服せず、君民の間に一場の爭論と開きしがアングーダム公佛軍に將として西班牙に至り國會の黨に強迫して其抵抗を鎮壓し、又以太利に於てはチープレスの人民曾て其王の背政を憤り將に其政府を覆さんとせしとき墺地利の軍、以太利の境を越て至りネープレス王を扶けて其專權を維持せしめたるが如き是なり

千八百三十年に於ける以太利の形勢

然るに千八百三十年七月佛國よ革命の亂ありて國王チャーレス十世を廢し之を國外に追放せしかば神聖同盟よ大く影響を及ぼし共盟約大よ弛ぶよ至れり、蓋し佛國にては初め昏暗なるブルリツプ、エガリテ自ら激烈なる民主政治を唱へ其血族なる路易十六世の死刑に同意を表したるが共後、已れも亦共首を全ふすると能はずして死せり、其子ワルレアン公ルイ、フヰリツプ擧られて王と爲りしが前代の君主よ倣ひ佛蘭西國王と爲るに非ずして自ら稱して「佛蘭西人民の王」と云ひ一時立憲君主國たる佛蘭西の王

位に登れり、此時伊太利の人民は此革命の報を聞て大に激昂し、各々共國に於ても革命を行はんと欲して一時氣勢頗る熾なりしが熱氣終に消去て復た冷淡となれり、然れども「ヂーブレス」國にカルボナリ(即ち木炭製造社)と名くる一の秘密會社ありて半島内に分立せる專制の諸王を倒し以て共和政治若くは立憲君主政治を建設するを目的とせり、然るに當時の諸王は强迫主義を行ふに傾强の手段は兵力を用るゝ在りとし、人民ゝ不平の挙動あれば立ろに干戈を用て之を戡定するを常とし就中墺地利の轄地ゝ於ては武斷を以て最其の治安策と爲したれば、シールベルグ其他の諸堡塞に設くる囹圄は皆囚人常に充滿し而して其罪とする所は唯共人の伊太利自由黨ゝ與すと云ふに在り、其間國の景況如何及び其囚人の待遇如何を知らんと欲せば請ふシルヴヰオ、ペリコの囚中記事を讀むべし、當時伊太利の形勢此の如く憐むべき境遇なりしが、ジョーセフ、ガリバルヂは此時世猶少ありしなり。

ガリバルヂの誕生並に其父母

稀世の愛國家ガリバルヂは當時サルシニヤ王國の一部ゝして現今佛領ある沿海アルプス地方の首府ニースゝ生る、時ゝ一千八百七年七月二十二日なり、其父ドミニク、ガリ

バルヂはジュネヴリを距る遠からざる處にて、ラバルロ灣に枕める伊太利の一舊港チアヴリよりニース府ゝ移住せし者なり、家世々船乘を業とせしかば夙ゝ其父の有する船に乘りて水夫の業を學び、其後己れも亦一隻の船を有するに至りて妻ロサ、ラギンドーと共にニースに移住し之を永住の地と定む、其ニースゝて住處と定めたる屋宇は眞に佛國にて革命の將たりしマルシヤル、マッセナの生れし線故を以て著明なりしが此家ゝして又他日更に數府の令名ある豪傑ジョーセフ、ガリバルヂを生ずるに至るとは豈ゝ亦奇ならずや

ガリバルヂは生長の後も其母の事を語る時は必ず限なく思慕感激の情を起し其慈愛の德を稱して曰く、予が母の賢德を備にして人の妻たるものゝ龜鑑とすべきは予の敢て誇る所なり故に若し予が身に善良の德あれば予は之を以て母の薫陶に獲たる寶とす」と、又ガリバルヂは常に危險を冒して事を行ひ母をして憂慮絶る間あからしめたるを悔るの餘り、縱令ひ怪異を免かれずと雖ども苟に事の危急なるに臨みては眼中恍然として母の地上に拜跪して己れの爲ゝ天ゝ救濟を天に祈るを見るが故に死地に陷て勇氣倍々振へりと云ふ、母ロサは高齢まで存命したるを以てガリバルヂが羅馬の愛國

黨を糾ねて以太利國の爲め戰ふを見るの後、一千八百十五年身退れりと雖もガリバルヂが尙鞠躬力して遂に全國の束縛を解き以太利半島をして赫々たる自主獨立の王國たらしめたる偉動をば見るに及ばざりしなり

ガリバルヂ船乘と爲り始て以太利の自主獨立を感想す

常に一葉を沿浜に浮べ飄然として常居を春戀せざるは航海者の習ふて性となす所なりガリバルヂは祖先より累代海上に生を營むの慣習自然遺傳して其氣質に現ばれ、幼より海上に出て丶事を爲すを喜び讀書の業には意を注がず、其父母は固より學識なかりしと雖ども既に學問の重ずべきを知れるが故に平生務めて勤儉を行ひ餘資を儲はへ愛兒をして完全の教育を蒙むらしめんとせり、然るにガリバルヂは天性有爲大膽のものなれば童兒たるの時より父母の寵愛に反して日々遊伴の群兒を集めて水夫となし、自らこれを指揮して航海の戲を爲しゝが一日ロビンソン、クルーソーに類するの熱心を現はし數名の童兒を强迫して己れの意に從はしめ遠海の樂土に航行して俱に將來の幸福を覓めんと、既に扁舟に乘じてニース港を發しけり、折ふし其港寺院の僧侶が窓内より此体を見て大に驚き遽かに舟を出して之を追及し對岸のメナコに至りて連歸

れり、因りて事遂に止めりと雖も抑もジョーセフ、ガリバルヂが一方の將帥と爲りて事を成さんとするの行爲は已に此時に於て發せしなり、時に年僅に十二なりと云ふ

是故に父ドミニク並に母ロサがジョーセフをして博く學業を修めしめんとの希望は到底行はるべくもあらず、其常に事業に勇往なる天性は抑へんと欲して抑る能はざるものなれば父母は其性に任して爾來ジョーセフを學問上名譽の位地に達せしめんとの念を斷ち、專ら海上の事に意を用ゐしむ、是に於てジョーセフは兩梔の快船コスタンザ號に乘組みラヂッサ(歐羅巴洲西亞の一港にして黑海の岸に在り)に航行す、是を其遠航の始となす、其航海に由りて海上の業を好むの情念々加はり、意中非た滿足の体にて家に歸り來りしかば、父ドミニクはジョーセフの意向に任せて更に己れの所有船に乘組ましめ、船乘にして果して其性に合ふものならば充分其業に熟達せしめんと望みたり

斯くてジョーセフ、ガリバルヂは年々地中海上を航行して航海術の初步を修めたれば數年にして沿海運輸船ノートルダム、ド、グラースの船長と爲れり、然れども斯く海上に業を執るの間、常に其思想を占ひるものは唯其職掌の事のみに非ず、蓋し船乘の業は他

の事物を思考するの機會を與ふるものにして即ち天晴れ風順にして船体の運動平夷なるに方りては腦中種々の想像を起すの餘暇あるものあり、ヴヨーセフ、ガリバルヂは其身專ら學業を修むるの徒に非ずと雖ども既に自國の史を讀で曩昔曾て以太利の旺盛なりしを知り、且己れ曾て其强大國の稽都たる羅馬に遊びて深く懷古の感を起し、事ありければ爾來少年あがらも顧みて自國當時の形勢を憤るの情、胸腔に滿ち、實に其國人の爲に獨立の勝利を獲、永く以太利をして確乎たる不羈自由の一王國たらしめんと冀望し、想ふて此に至れば怒髮、帽を衝き、胸心激動を加ふる程にて數々此感想に堪へざる事ありしが初は單に胸中の想像たるに過ざりき、蓋し當時以太利を分轄せる專制の諸政府は固く力を協せ、各々其人民を强壓して以太利の統合を妨げ、人民の公議を容るべき政府を建るに由なからしむるを以て無上の政策となし到底之に當り難きを察すればなり、然るに是時に當り一大革命を促がすの事情、忽然として發生し久しからずしてガリバルヂの想像を實にせんとするの運に向ひしかば乃ち常に以太利の自主獨立を冀望するの士をして恍然として一千八百三年の佛國革命を想ひ、天命此に至れるを喜ばしむるに至りぬ

千八百三十年の佛國革命、以太利の人心を激昂せしむ

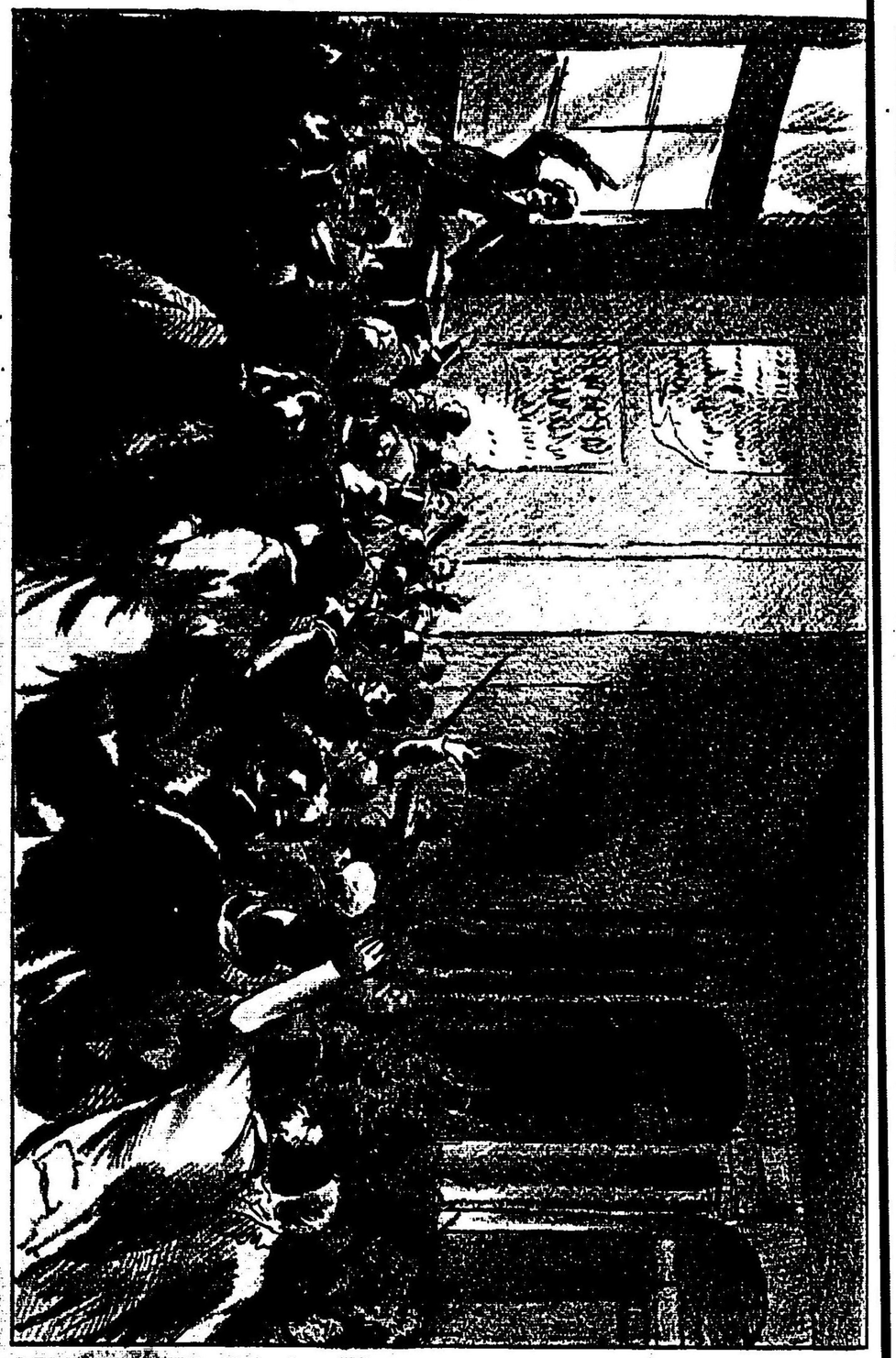
千八百三十年七月佛國有名なる三日間の革命起り響に曾て淋漓、海をなせる鮮血と數百萬の財貨を以て回復せるボールボン家の王朝之が爲に再び顚覆す、然る所以は頑陋無知のチャーレス十世漫に自家傳來の家風を守て六年の間暴政を行ひ、國財を糜して人民を抑壓し强て當世の佛國をして千七百八十九年前の佛國たらしめんと努めしよ由り抜するよ千七百八十九年は路易十六世の時よして其年バスチル城陷落の事あり是より前の佛國は即ちボールボン家の王政隆盛の時なり)扨は人民の激動を生じて遂に佛蘭西國外に追放せられ其頑陋妄爲の報を受けしなり、是に於てルイ、フヰリップ擧られて王位に即く、其佛蘭西人民の王となるや老將軍ラフエット並に銀行頭取ラチットが切に憲法政治の建設を望み大法典及び人民の自主自由權を尊敬せしめんが爲に特に幹旋盡力したるに由るなり、此變動は獨り佛國のみに止まらず其影響、小國の比耳時に波及し、瑣末の原因より大事を生ずを云へる諺よ違はず、ブラッセル府の劇場に於てマサニーロ(サーブレス府叛黨の巨魁)と云へる戲題を演したるより輙ち反乱を生じて全國よ騷延し、遂よ維也納府の條約に由て比耳時を和蘭に併せ以て爾來ヲゼルラン

ド王國と稱せる有害の聯合を破り、英の皇女プリンセス、チャーロット、ヲーヴ、エールスの鰥夫サクスコボルグのレオポルドを奉じて獨立不羈の立憲王國と爲すに至れり、斯く歐洲の西部に於て既に實功を奏したるの事業又南部以太利に於て時機の熟するに會ひ等しく行れて、將さに其の惘むべき束縛を脱するの日あらんとせり

ガリバルヂ自ら其日錄に記する所に曰く「予は自ら左の如く明言す曰く予が千八百三十年佛蘭西革命の時、其國人高く呼で「吾が國よ」と云ひ地上に烽火を點するを見て喜べると、猶はクリストフォル、コロムバスが大西洋中にて殆ど望を失ひ且其部下の衆に脅迫せられて爾後三日間の猶豫を約するの後、第三日の夜に至りて卒然「陸よ」の聲を聞けると寔も異なるとなし」と而して更ら語を繼て曰く「予は是時已に以太利の救濟を謀るの人あるを知れり」と

ピードモントのチャーレス、アルベルト、チャーレス、プエリクス並に子ープレス國及び其王

然れども是時以太利の國土は猶は眼識の景況を帶び、其ょ立憲政体の望あるは獨りピードモント（サルヂニヤ王國の一部）と爲す、其地よりては一千八百二十一年カリグナノの



君チヤーレス、アルベルトが其國王と定められたるチヤーレス、フエリクスの到着する迄一時權りに政を攝しサルヂニヤ王君の憲法を裁可公布せしめたり、然るにチヤーレス、フエリクスは素より神權主義を執るの君なればサルヂニヤ國の政務に就くの後、直ちに神聖同盟の兵力を假りて既設の憲法を全廢したるのみならず此所爲に拒抗する有爲の士を捕へて嚴罰を蒙らしめたり、此時チヤーレス、フエリクスが發したる諭告文は一千八百十五年より四十八年に至る人心激動の日に於て以太利の諸王が常に其臣民に對して言ふ所の奇なるを覺するに足る今其文を左に抄出す

凡そ吾が忠實の臣民たる者は神命と君權を以て定めたる治國の法に服從すると誠に其本分なるが故に吾輩、神より承くる權威を以て國家の安寧を保つに適當と思惟する方法を定むるは固より吾輩の權理なり、故に吾輩は吾が國民にして吾輩の必要と爲せる處置に對し、敢て非議を挾む者あれば吾輩は之を以て忠實の臣民と做さゞるべし、是を以て吾輩は左に明言する所を以て各臣民の遵奉すべき道と爲す曰く、吾輩は獨り吾輩の處置に對して立ろに服從を表し以て未だ之に服從せざる他州の摸範と爲る者を以て吾が忠實の臣民と承認すべし」

是よ由て觀るときは人民をして充分に服從せしめんが爲よ其施政處置に不平非難なきを要し、即ち專制無責任なる一人の意を以て天下億兆の法とおし唯命是從ふを以て忠實なる臣民の分と爲すと其主要の精神なるを知るべし

然れども一千八百三十八年よ至りてヤーレス、フェリックス死せしかば標よ憲法を裁可したるカリグナノの君其位を襲ぎ、サルデニヤ王チャーレス、アルベルト一世と稱す、因りて爾來ピードモントの王國とそ實に獨立回復の眼ある地なりとて衆の屬目する所と爲れり、然れども其效果を探期し得べき前表に至ては未だ判然として斃ふべき者あらず、且チーブレスよ於ては老王フェルヂナンド一世、曾て金破崩の時追放せられて國外に在るの間を除き、チーブレス王の位に在ること數と六十年の後、齢七十五にして殂し、柔弱の君フランシス一世位を襲きしが、千八百三十年王亦殂す因りて其子をして位を襲がしめしが、暴虐不道を以て人民に臨みしかば暴主たるの名當代よ著はれ死後に至る迄永く汚名を貽し人民之を罵て「極惡の暴主フェルヂナンド二世」と呼べり

秘密會社、並に「ヤング、イタリー」黨の首領マージニー

當時以太利に種々の秘密會社あり、即ち「カルボナリ」會社を初として、コンシストヤル、ソ

サイエナー(寺院裁判所の秘密會社と云ふ義)、カトリック、アポストリック、エンド、ローマン、コングレゲーション(是亦僧侶を以て成るの秘密會社)等是なり、然れども此れ等の諸會社皆其の自ら任する所の事と誤り起て功を遂るものなし、蓋し然る所以は縱令ひ專制の暴威猛烈なる時よ於て諸會社相助けて銳氣を發ひ愛國心を維持したると雖ひなしと雖も其隱密に事を謀り現行の法律を蔑れするに至ては、互に相忌て協合するを欲せざるに由るなり、ガリバルヂは曾て此れ等の會社よ與せず、是れ氏が名聲を全ふする所以なり、而して諸會社は氏が以太利の大活劇よ現出すべき年齢に達するの前、既よ其活動力を失へり何となれば、氏は人と爲り勇猛剛直にして艱難の極に達するに非ざれば斯る會社と結合せざるを以てなり而して此憫むべき會社よ結合せるの徒は實に心身を挙て之に委し、最も恐るべきの誓約に由て其首長の命令を遵守すべき責あり即ち其命令に戻り或は其社より離反する者は死を以て之を處するを法とせしなり、然るに是時に力り勢力遠く之に勝れる一大黨派ありて既に其運動を逞ふし前の諸會社中錚々の名ある「カルボナリ」の地位に代れり、即ち是れ當時「ヤング、イタリー」の名を以て知られたる一黨派にして出版、言論を制するの法嚴よして且警察探偵の密なるにも拘はら

ず、能く演說と出版を以て民權を說き自主自由の理を主張せり、(「ヤング、イタリー」は千八百三十年七月佛蘭西革命の後幾もなく設けたる秘密政黨の名にして初め「ガルボナリ」社の黨勢力を中興するの弊あるを以てマージニー衆員を率ゐて之と分離し且國事の故を以て佛國に逃れ、漸く政事上の落胆者を聚めてマルセイルに共黨と組織し、其地を以て同黨の本陣と爲し巴里府を以て凡て政事上の運動の中心と爲して遂に以太利半島よ共和政治を建設するを目的となせり、「ヤング、イタリー」黨の旗標に用る冠符は今より幾久しく」の文字にして其表號には扁柏の枝を用ゐり)

其運動を將る首領は即ちジョーセフマージニーよして氏はヴェノアよて俠秀の名ある醫師某の子あり、博識剛毅にして專ら以太利救濟の事に其身を委す、其鄕地ジェノアは嘗昔獨立富强の一共和國たりしかば自主自由の遺風自ら存し、之に反してピードモントの人民は久しく專制の束縛に馴致せられてチャーレス、フェリクスが僞詐の神權說に對して敢て之に反抗するの氣力なし、然るにジェノアは近時サルヂニヤの版圖に加へられたるものよして且其當代の子孫たる人民はドリア(義昔ヴェノア共和國の政事家にして且海軍提督たりし人)の舊日よ於て强盛なる共和政治の名譽を輝したるを記

憶せるが故よ以太利をして再び民主政治の國たらしむべき努力を振起するに至るは實に此の人民に在りとす、左れば、ジョーセフ、マージニーは自ら新聞紙刊行の局に當りて日よ自由民權の思想を吐露し且ヤング、イタリー黨の首領と爲りて忽ち政事社會に頭角を著はせり、故よ以太利の專制政府は大に之を憎み常に間諜を放て其動靜を察せしめ動もすれば之を捕へて獄よ下さんと欲そと雖も判然明すべきの犯迹なきを以て乃ち之を國外に追放せんとせり、然れども氏を國外よ追放するは其以太利の地に居るを監察するよりも更に專制者の爲に危險あると數倍なりとす、抑も氏が心中に期する所の目的は當時專制諸强國の分轄せる羅馬、チープレス、ルスケニー、ロムバルヂー、ヴェネシヤ、ピードモント等の諸國を統合し以て以太利の自主自由を回復するに在るを以て氏は遂に以太利の境外に追放せられしより、爾來境外の地に於て以太利の各地より續々逃れ來れる志士に會し、其意見よ與して黨員と爲るもの多く、其數漸く增加して次第よ地位の重きを加へ、即ち剛强不屈の一俊傑マージニーの嚮導よ由りてヤング、イタリー黨の旺盛を致せり蓋しジョーセフ、ガリバルヂも亦其鋒々たる黨員よ列すればなり

ガリバルヂ始てマージニーに結ぶ事。チャーレス、アルベルトの怯懦ある所爲並に危險ある陰謀

千八百三十年、一の運輸船長ガリバルヂ航して佛國マルセール港に至る會まマージニー其地に在りて其年新設せられたるルイ、フヰリップの類似立憲政府に保護せらるゝあり但しマージニーの當年其保護を受るを得たるはフルレアン朝創始の時にしてルイ、フヰリップの未だ自大政略を取らず、即ち當世に所謂るロバート、マケイルたるの前に在ればなり(ロバート、マケールは當世の人ルイ、フヰリップを愚弄せんが爲に戲謔に用ゐたる假稱あり)ガリバルヂはマージニーに接し其意見を聽て深く感動し直ちに之と結で共朋黨と爲る、其意に以爲らくマージニーは毅然たる思想家として外務の爲と其志を移さず剛毅の爲に其企謀を折かざる者なり」と此二傑マルセールと會合せし時以太利のピードモントに於てはチャーレスアルベルト位に在る正に一年に過ぎヤングイタリー黨は是時將に以太利獨立の爲に事を發せんとするの時あれば其領袖の士人以爲らく此事唯一人の將帥ありて吾黨の兵を都督せば必ず能く其功を成すべしと因りて黨員中一人の材幹あるものを選び新王チャーレスに上書し出でゝ親ら運動を

惜し以て國家に不祥目由と安寧幸福を與へん事を請へり、其文に曰く「陛下躬ら以太利國民の元帥となり、旗に連合自由、獨立と大書し、自ら布告して專制の征討者、民權の代表者と唱へ以太利の更新者と爲りて、斯國を塗炭不道の苦界に濟ひ、斯國の爲に將來幸福の基礎を定め、陛下の名を以て今代より賜ひ、陛下の治世より起算すべき紀元を設けよ嗚呼樂哉」と

然れども、チャーレス、アルベルトは決斷に富ひの人に非ず、又剛强の精神全國より隱伏して重大なる事情の衝動する所となるを知るの明なく、唯墺地利の兵力强盛なるを恐れ、遲疑躊躇して敢て事を決せず、遂に以太利救濟の事業を以て他人の成就するに委す、嗚呼チャーレス早く事を決せば已れ至大の名譽を獲らるべきより機會去て復た至らず縱令ひ共後に至りて自ら奮ひ自由の爲より戰へりと雖も一ひノヴァラの役に敗績して悲痛擢く能はず共名全く地に墜ちて已む惜哉

偖てチャーレスの遲疑事を決せざるに當り廷臣等亦王の民權黨と與して共運命を賭せんとするを要へしが、遂に王の疑惑に乘じて讒間を試み彼の黨、已に謀を設け王を弑し位權を亡さんとすと說きしに果して王の信する所と爲りしかば、乃ちピードモント

國の首府チユリンに於て臨時裁判所を設け許多の法律家、軍法の審問を受け慘烈なる酷刑を以て死に處せらる、其他一兵卒のマーツニーが新聞紙ヲ、ヴオヴツチ、イタリヤより拔萃せる文を隊中の伍卒に讀聞しめたる科を以て銃殺を命せらるゝあり、又民權自由の書を所有せる罪に由て一副官の銃殺せらるゝ等凡そ下等陋劣なる隱密探偵の報する所皆其被告者の生死を決する者たらざるは莫くナヤムベリー、アレキサンドリヤ並びにシユノアに於て斯る慘刑を蒙るもの無數なるを以て普く人の戰慄する所と爲りマーツニーも亦竟に佛蘭西政府よりマルセールを退去すべく命ぜらるゝに至れり、是に於てシユノアの人民竊かに事を擧けんと謀りガリバルヂは其國の海軍を奪て之が用に充んと欲し、自ら一等水兵と爲りてサルヂニヤの軍艦ユーリヂス号に乘組めり、且密かに相約して曰くシユノアの人民一齊に反起して共和政治を唱へ直ちに其勢を擴めて以太利全土に及ぼすべしと

ガリバルヂ並にマーツニー、事敗れて逃走す

然るに其民權黨の中、竊かに反を謀る者ありて時々黨中の擧動をピードモント政府に密告せしかば計圖全く敗れて豫期と齟齬し、戰鬪少時にして愛國の兵皆潰へて或は捕

はれ或は亡ぐ、是時マーツニも既にシユノアに歸れりと雖も其敵地と爲れるを以て已むを得ず遽かにスキツアランドに逃る、ガリバルヂも亦其身既に危く若し一時以太利を去るに非ざれば必ず禁獄銃殺の厄難を免かれざるを知り乃ち自ら憂苦ある追放の飯を食ふを揮へり其の密行かんと欲するの地は南亞米利加と定め辛ふしてマルセールに達し暫く其地に身を匿せり、何となれば其港に達するに至る迄はピードモント政府の兵氏を追躡し若し其及ふ所と爲らば必ず當時國事犯人を刑するの汚辱なる方法を以て背後より之を銃殺すべければなり、而して其のマルセールに在るの間と雖も亦其姓名を秘して知らしめざるを宜しとせり蓋し佛王ルイ、フヰリツプは其在位の初より所謂る類似憲法政治を執るの懦者なれば竟も政事上の逃走者を憐れまざればなり、因りてガリバルヂはウローセフ、ベーンと僞稱してマルセールに滯留の日を送り其の歐羅巴を去り南米に渡航するの前、既にマーツニーの身スキツアランドに在りて無事なるを聞けり、マーツニーはスキツアランドに留るの後、巴里と倫敦に住居して十四年の星霜を送れり、世上多くの人は妄臆するあらん、マーツニーの倫敦に在るの日、英政府の首相サーツニームス、グラハムはマーツニーとヤングイタリー黨の間に往復する信

書を其逮捕の間に於て開封せしめたるが爲め大に當世の人國を失ひしとを、此事實を以て世人は皆以爲く英の首相グラハム氏は人民の權理自由を攻撃せる專制政府を神けんが爲め慢に警察探偵の事を行て自ら恥辱を招くものなり」と然れ共グラハムの眞意は實にマージニーの一身と及び其通信上の事を自由に放任せんとを賞ふに在りし事疑ふべからず、其所爲差し止むを得ざるに出るなり、其故は一部の新聞紙ありマージニーは英國の保護に據りて叛逆を主張し(叛逆を主張すとは想ふにピードモント王チヤレス、アルベルドを叛するを謂ふあらん)所有權を害せんと欲するものなりとの一項を載せ無根の罪名を以てマージニーを誘りしかばグラハム乃ち捨て置き難しとて此處に出でしなり然れ共是れ遠く以太利の地に於て國者の旌旗に出るの說にして且其事實の探訪甚だ疎あるに由るあり、夫れマージニーは事を錯認する甚しとせず又其心圖の目的を以て吾が現在の實力を較せざるが爲に往々輕卒ある所業に陷り失敗に因むと有りと雖も然れども共叛逆の事を謀るに至ては未だ必ず氏の爲さゞる所なり唯常に剛直に人民の權理を主張し若し之が回復を拒絶せらるゝに於ては乃ち兵力を用て時の主治者より之を奪んと謀ると雖は英國人民が其累代の史に於て曾て歷々行へる所の如きなり

南米の共和政治並にガリバルヂ海陸の將軍と爲る事

ガリバルヂは是より後少なくも數年間は以太利の地に向て不羈自由を謀るべき見込なく、又其半島の人民も復び專制の害毒に堪へざるに至る迄は叛を起すの意あかるべしと思惟せるが故に、カピテーンボーレガルドの船ノートニール」號に乘りて佛國ナントを發しリオ、ジヤネーロ(南亞米利加ブラヴル帝國の首府)に向て大西洋を渡り、更に同志の士人に會し異逆の交を結んとす、其至るの後果して以太利人にして氏と相會し心志相孚とするもの多く、中に就てロセッチは其鄙々たる者にして爾來遂にガリバルヂと終生事を共にするの信友と爲れり、ガリバルヂは其地に於て政治上の事變漸發生するを見しが、幾もなくして其勇往大膽の精神を用るに足るの業を得たり、即ちリオ、グランヂの一州種々の不平ある事情に迫られてブラヂル帝國の管轄に叛き自ら不羈獨立の共和政治を公告す、其大統領ザムベカリは曾て前に捕虜と爲りてサンタ、クリユズ(サンタ、クリユズ島は西印度群島の一なり)の堡塞に在りしが、此事變の起るに當り逃れ來りて大統領に推選せられガリバルヂ並にロセッチが共に新共和政治を援け、其不羈自

由の爲にブラヂルと戰んと欲するを見て大に喜び敵船取押への免許狀を之に與へしかばガリバルヂは一の小形なる漁船を獲て之をマージニーと號けロセッチを以て副將となし、水兵十六人を率ゐて之に乘り再び自由の戰場に出で兩國の間に戰へり、其間氏の身は種々の境遇に接し或は數隻の軍艦を督して强盛なるブラヂルの軍と戰ひ勝を制してリオグランヂの名譽を加へ、或は敵兵の捕虜と爲りて殘忍なる敵將の虐待を蒙り又或は殺戮の禍害ロサス(ロサスは南米アルジエンタインの總督官たりし者)の無狀に接し又或は其勇猛剛毅なる功勞の爲にリオグランヂ政府の褒謝を受く、而して又某の時、一隊の伊太利人を將ゐてリオグランヂ共和政府の爲に激烈なる戰爭を爲すの後、政府將軍リヴエラを以てガリバルヂ及其部下の人に土地を與へんことを言ひ遣はせしにガリバルヂは高尚清廉なる詞を以て書を復し其好意を謝絶したり、其言に曰く「我輩は誓て當共和政府の建設を援けたりと雖も之が爲め褒賞を領するを望まず、唯我輩を厚遇したる當國人民と今回の危難を分つの榮を受るを以て足れりとす、且つ敵兵若し我を圍み線つの急あらば我輩は尙ほ强壯なるモンテヴヰデオ人(モンテヴヰデオは其國の首府なり)と勞力危難を分つべし然れども我輩は其勞力の報酬を望むものゝ非

ず故に予は謹で貴政府の賜を辭退す」と然るに或る人ガリバルヂを以てリオグランヂ政府に傭はれて其黨の將帥となり、己れ要なきの掠奪を爲し私利を收めたりと爲す、然れ共右に揭くる氏の書に由て見れば誠に此說の謬誤たるを證するに足れり

氏が斯く危險を冒して戰爭に從事すること數年なりしが其間、數ば破船負傷の難に遭ふ等凡そ人事に所在る艱難辛苦は幾ど經歷せざるなし、是れ氏が後來機に應じて善く不定無規律の義兵を用る能力を開發し益其伎倆を上達せしむるの大裨益あると疑ふべからず、即ち其將來の偉業上觀るが如く、機に應じ術を用るの迅速よして善く寡を以て衆を制し或は目を搖し片言を發して以て能く幾多の軍隊を動かすの勢力あるは實に其の南亞米利加に經驗せる所に得るもの多しとす、其南亞米利加に在るの間恒に樸直清廉なるに由りて彼我黨人の尊敬する所と爲り、其の一已の貨殖富貴を賤しむの必極めて堅固なりと雖も又其營生の勞は曾て吝まず時として財貨共手中に在ると有れば必ず其朋友の爲に費し付て之を自己の儲蓄に供せず、リオグランヂ政府の爲に力を盡すの時ブラシル國の淑女アニタと結婚し始めて伉儷相愛の情を結び二男一女を擧げ長男をメノッチと名け二男をリショッチと云ふ、長するの後俱に父が以太利救濟の鴻

業に興れり其女の名をテレサと云へり

ガリバルヂが毅然たる不羈清廉の丈夫たるは已に斯く南亞米利加に於ける行爲に於て著明なり、されば其後伊太利に於て共和國建設の爲に重要なる業を執るに當りても家貧極めて貧にして往々衣食の物を欠き之を獲るに困めるとありと云

ガリバルヂ寛大の法皇パイアス九世に書を献ず

ガリバルヂが遠く西大陸に在てモンテ、ヴヰデオ(前出)獨立の爲に戰ひ、其後清貧に安じて猶ほ其府に滯在せり是時に當り歐羅巴に在りては重大の事情正に起りて伊太利の救濟漸く熟わらんとす、即ち伊太利の諸政府が墺地利の軍兵、並にジエシユート教徒と力を戰せて殄滅せんと欲するにも拘はらずヤング、イタリー黨は益々全土に蔓延して其勢力を增加し、且千八百四十六年法皇グレゴリー十六世殂し、マスタイ、フエレッチと云ふ者擧げられて法皇と爲りバイアス九世と稱す、大に其累代先皇の所爲に反し法皇權を行ふの奮意を破りて百事寛大の意嚮を示したるに由り、凡そ以太利の自主獨立を以て自ら任するものは其意表に出るを驚き歡喜大方ならず、法皇稍や出板の自由を許し政務上、弊を省き冗を汰して諸般の改革を施し且國家に名望あるの士を擧げて其臣

僚と爲す等、其狀恰かも抑壓せられたる以太利の爲に自由の新紀元を迎んとするものゝ如し、故にピーヲ、ノノが朝に擧られたるの時、テユリンよりバレルモに至る迄人民歡呼して相賀し、萬歲の語を以て之を慶せしかばナープレス王フエルデナンドより常に奧地利の扶助を恃める怯弱の公爵君主に至る迄、凡そ以太利自主自由を忌ひの專制君主は法皇の抑壓策を棄て自由寛大の政策に與するを見て大に寒心せり、而して此事の消息忽ち大西洋の潮に乘じて南米モンテ、ヴヰデオに達せしかばガリバルヂは急に手書を裁して法皇に獻じ以て自己及ひ其督せる以太利隊の殘兵を以て之に奉事し以太利獨立の爲に職分を盡さんことを請へり、其辭に曰く、最も彰明にして且尊位なる聖教主尊下臣等懷に以太利の自主獨立を謀るに由り罪を獲て海外に在りと雖も其志氣は爾來常に臣等の胸中に塞りて抑ふべからず、是に因りて臣等既にモンテ、ヴヰデオに兵を挑り公義の爲に戰へり、其四圍敵を受くる五年の間、臣等各々剛勇堅忍なる行爲を表せり、故に尊下、今よ臣等が戰餘益々强健なる兵力を用んと欲せば則ち臣等は國家と法教に大恩德ある尊下の爲に更に奮て力を盡すべきは固より言を俟たざるなり」と然るに羅馬の朝廷此書に報せず、蓋しパイアス九世は温和善意の人なりと雖も剛强の精神に

正しくして其の政の寛容なるが爲に志士の熱心を惹起したるに驚き、機あらずして其朝に反對黨を入れ自ら其の左右する所に任せり、其黨は彼の剛愎なるカルヂナル、アントニリ之が首領と爲り法皇に强迫して百事、寛を變じて猛に就き以て其の既に誘起せる自由の運動に逆抗するの勢敵たらしめたり、斯る次第なるにも拘らずガリバルヂは(其法皇に呈するの書は稍や冒瀆に失するが如しと雖も)法皇の返書に接せざるを、もどかしく思ひ豫期せる自由の戰爭に加らんが爲、朋友アンヂューと共に以太利隊の殘兵を率ゐて本國に歸らんと決せしが其時氏は例の淡泊なる口調にて獨語して曰く「然れども我輩一同の本國に歸るに付て一の障碍あり即ち我輩一行の中一人として渡航の費に充つべき賃金を有せざると是なり」と是時以太利人中本國に歸るを以て必死の地に入るものとなし同行を避離する者多かりしと雖も遂に相結ぶもの六七十人、俱に歐洲行の船に乘りて遠く以太利の天を望み自主自由の星を追ひ行けり

千八百四十八年の以太利

是時に當り以太利に於ては民權黨奮起して自主自由を回復せんと欲し、紐々里の人民先づ亂を起せしかば其王フェルヂナンド砲隊を將ゐて亂黨に會し、其府メッシナの堡

砦に據り爆彈を以て府内を砲擊す(王は其領内の諸處に於て此の法方を以て亂民を攻擊せしに由り遂に人稱して爆彈王フェルヂナンドと云ふに至れり)然れども騷亂勢を持し遂に堅延して「ナープルス」に至りしかば王は止むを得ず其勢を鎖めんが爲に憲法を定設せんことを約せり而してモデナ公は亂を避けんが爲に已に其領地より逃れ、ピードモント王「チャーレス、アルベルト」は再び自由寛大の主義に復し(曩に「サルヂニヤ」國の爲に憲法を設可したるを以て「再び」と云ふ)て既に墜ちたるの名聲を回復し復た以太利統一の君主と仰がれんとするの觀あり、是時「ロムバルヂー」と「ヴェニチシヤ」に於ては其居留せる日耳曼人を惡むと甚しければ其地を守護するの兵幾んど敵地に住するが如く、終に「ロムバルヂー」は叛黨の圍む所と爲れり、時に千八百四十八年二月二十二日なり

是に於て「チャーレス、アルベルト」は以太利獨立の三色旗を擁へし、「ロムバルヂー」にては人民已に兵を統て叛起し、激戰五日の後、老將「フヰールドマルシャル、ラデツキー」共將る所の悍惡なる「クローツ」兵(「クローツ」とは當時墺地利の軍中に應募せる「クローシヤ」の兵を謂ふ)と共に市府外に驅出せらる、此時「クローツ」兵が男女老幼を擇ばず暴威を以て人民を虐待したるは實に十七世紀に於ける三十年の戰爭、並に十八世紀に於る墺普の戰

爭をして更に慘酷ならしめたる兇徒の子孫たるに背かざるの證を示せり、是時ガリバルヂ黨氏の南亞米利加より率ゐ至れる以太利隊を稱して云ふ)は正に以太利に上陸して此大勝利の報に接し大に喜べり、其後幾もなくしてヴェニスの叛黨亦墺地利の將カウント、ワキーに逼りて降らしめ、以大利全土の兵と聯合して運動を共にし、其年四月チヤーレス、アルベルトは劍を拔て出でゴイートに戰て勝を得、ベスチーラの堡砦を取て之に據る、是に至て全國人民の熱心其極度に達し、以太利少壯の士悉く振ひ出でゝ其勢ひ潮の如く十字黨の名を以て結合し外國の虐制を攘て自國を救ふの十字軍を起し假にミランに政府を設けてガリバルヂに將軍の官を授けロムバルド義勇兵の一隊を募集するの命を任せり、然るに此際に至り最も不幸の事變と云ふべきは自黨中に分裂を生じたる事是なり、ガリバルヂのマーシニーと相結托せる事は已に顯著の知る所なり、然るにピードモントの諸有司はマーシニーを以て過激極端の政事家と爲し之を憎惡するの心を推してガリバルヂニ及ぼし百方策を設けて氏を妨害し剩さへ其從兵に軍服武器を渡すを拒みたれば乃ち氏を惡み事を放棄して去るもの多くチヤーレス、アルベルトは既に鄭重なる禮を以て氏を優待し以て斯く彰明にして且剛勇なる士の自ら

進で己れを輔けんと欲するを悅へるの意を表せり、然るに今氏が敵兵を攻擊するの軍書を要求するに至り之をテユリンの參議院に請ふべしと答へて其責を避け而して參議院も亦遂に氏の要求に應せざりき、斯く連合一致の精神を缺き有司、惡意を挾み且以太利人民迄氏を嫌忌するに至りしかば當初連勝の功い失て償ふ所なく、爲に乘すべきの機を敵人に與へ、ラデツキー其の失へる所の地を回復し、千八百四十八年の末に當りてチヤーレス、アルベルト敵兵の逼る所と爲りて已むを得ずミランを捨て遁れ、墺兵再び之を占取しヴエロナ府前に設くるの陣營は將軍ヘイノーの管理す、ヘイノーは其後久しからずして匈牙利に於て來くの婦人に笞刑を命するを以て殘忍の名世に知られ、其後倫敦に遊ふの時パークレー並にバーキンスの車夫等之を鞭撻して前の軍法處刑に報ひんとせしが辛かに免るゝを得たりと云

千八百四十九年の以太利

千八百四十九年に至り以太利の事、愈々否運に陷れり、チヤーレス、アルベルトは善く兵を用るの伎倆あく其事に臨で躊躇するが爲め其兵の勇氣を挫き自ら好で人後に立ち敢て勇進、敵の衝に當るを爲さざれば爲めに墺兵をして其の必失の地を復するを得し

めり、而して老將フグッキーの智略に富めるが故よ能く此の虚に乘じて勝を制せんと
アルベルトの兵とノヴァラに激戰を交へしが其間アルベルトの軍配最宜しからず軍
器足らずして加るに援道を絶たれたれば遂く交戰の便を失ひ即ち孤城落日の勢となり、日暮るゝに及で、惜むべし王其不幸を歎じ暴かに其子をして位を襲がしめ、自ら國の爲に其身を犧牲とおさんと決し、死せんとすると二回にして果さず、終に馬に乘り墺軍の外營よ至りて自ら投じたるよ其身赦されてニースに退き、悲痛の日を送る數月の後終よ葡萄牙國ポルトーに於て歿せり

是時伊太利の北部にては一ぴノヴァラの敗績を聞てより人心顧に挫折しプレシヤ府の人民力戰して墺軍を拒ぎしが墺將ヘイノー遂よ之を攻取し、其府に入るに及で刼掠破壞を極め、其慘酷なると未だ拿破崙の戰爭以來見さる所なり、時にヴェニス猶は其兵力を持して自ら守りしが墺兵府壁に接して之を圍み其糧道を絶て困しめしかば終よ八月の末よ至りて止ひを得ず敵軍よ降り第三十日フデッキー凱陣して其府よ入る是れ實に惜むべきの敗績なり、然れども之を傍觀せる歐洲の諸國は深く伊太利人の行爲に感動し竊かに以爲く伊太利人は其の一旦同一の感情を以て相投じ勝敗を共にせ

んと欲する事業の爲には必ず能く死を以て戰ふべく而して其寄虚の政を棄る既に幾百年なりと雖も共獨立の元氣之が爲に潰敗せざると亦明かなりと

羅馬府に共和政治を布告す並にガリバルヂの到着

伊太利革命の亂わりし年、即千八百四十八年は羅馬に於て人心の激動日に益々甚しく、終歲寧日なし、蓋し法皇パイアス九世初め寛大の政策を執りしに由り(縱ひ後に至り大に之を悔ゆと雖も)四方の志士羅馬に集來り最も制すべからざる過激の共和黨共敵の一部を占め常に激烈なる擧動を爲して止まざれば法皇前に佛蘭西に使節たりし慧敏温和の士ロッシを擧て其相となし其勢力を以て斯黨を御せしめ以て激水に油を注ぐの實効あらんとを希望したり、然るに狂妄過激の徒は忠正なるロッシを以て自主自由の敵とおし内閣廳の開日、即ち十一月十五日に於て亂黨之を襲ひ、コンスタンタヂニと云へる者匕首を以て之を刺殺せり、然るに此兇漢は爾後六年を經るに至る迄捕て其罪を問はざりしと云

是に至りて最も暴烈なる民政黨は羅馬に於て共和政治を公告し、法皇に逼りて二人の自由政事家を以て首領と爲せる大臣の名簿を製し之に璽を鈐せしむ、然れども其後幾

もなくして法皇微行して羅馬を逃れ、ガエタに行在して一の意見書を公布し、以て其の羅馬に於て行へる政策を廢棄せり、其後幾もなくしてマージニー羅馬に至りサッフ井並にアルメリニと共に政府設立の事を計畫し使を遣してガリバルヂを招きしかば、氏も亦日ならずして至る、是れ千八百四十九年四月二十八日にして嚮に南米モンテヴヂデオに於て己れに屬せる獨以太利隊の殘兵及び義勇兵一隊を率ゐて羅馬に入れり、其兵は東洋風の輕潤なる赤衣を着せるものと歐風の赤衣を着せるものとありて總て二千五百人なり

是時親しくガリバルヂの形容を目擊したる人左の如く述べたり曰く、氏は中人の身長を有し顏色日光に燒けたれども自ら清廉樸實の相貌を具ふ其の馬に跨がれるの狀は軀体確と馬背に落付きて恰かも馬と同体なるが如し、濶く帶、狹く且つ黑き駝鳥の羽根を以て粧ひたる帽を戴き帽の下に硬髮逆穗として蓬亂し、赤銅惡く顏面の下部を蔽ふ、紅色の襯衣に襲ぬるに製、獵服に似たる紅襟にして白き亞米利加衣を以てし、其麾下の屬員は紅色の寬衣を着す、是に因りて其後以太利の軍兵皆之に倣ふて紅色を用ふと云ふ、直ちに氏に次て氏の家丁なる勇敢の黑人アグーヤー、黑裝して俠長旗を附したる

槍を持して隨聽す、氏に隨て亞米利加より至る所の士卒は皆其革帶に精巧の短銃と鋭利の短刀を佩び且手に水牛の皮を以て製せる鞭を携へりと

佛兵、羅馬を圍みガリバルヂ奮戰功なく遂に再ひ敗績して羅馬を退く

墺地利並にナープルスは法皇に左袒して之を援けんが爲に各々軍を遣し道を分て四方より羅馬の領地に進擊したれば羅馬の防守を擔任せるガリバルヂは力を極めて之と拒戰し其境を全ふせり、然れども佛蘭西より最も辛き攻擊を受るに至る、蓋し是時に方り始て佛蘭西共和政府の大統領と爲れるルイ、ナポレヲン、ボナパルトは曩に曾て以太利カルボナリ黨の一人ありしが是時に至り自ら皇帝と爲るに關聚ある佛蘭西僧侶社會の選擧を得るの肝要なるを悟り此目的を達せんには羅馬の地に法皇の管轄權を回復するに若くの方策なしとし、乃ち將軍ヲーヂノーをして大軍を率ゐてチヴヱタ、ヴヱッケアに至り共より進で羅馬に至り共府を圍ましむ、是時ガリバルヂの力を防禦に致せると雖ど人應の及ぶ所に非ず、而して其の四面に敵軍を逆へ鋒を轉じて之を更擊するの術は實に老將肅練の正兵を用るの伎倆に讓らず左れはヲーヂノーはガリバル

チの破る所と爲り、止むを得ず軍を退けてチヴェタ、ヴェッケアに至り援兵の至るを待てり、是に於て兩軍相議して暫く戰爭を停止せしが偶ま敵軍、約を背てガ氏の軍を襲擊せしかば羅馬府遂に支へ得ずして陷れり、斯る危急の時に際してガリバルヂは猶ほ其信任を守ると堅く自ら更に拒戰するの益なきを知ると雖も敢て獨り之を斷せず、懇にマージューに諮て其意見を請ひしにマージューは素と兵事に暗くして不幸にもガリバルヂの說を不當と爲し反對の意見を執て可かざれば、强て必亡の地位を守り我軍の命脈を維持せんとしたるが爲に多く有用の士卒を殺して竟に益する所なく、悲むべし終に兩政事家の名を以て令を發して曰く「羅馬國の防禦遂ふ爲すべからず今回の役事宜く茲ふ止むべし」と攻圍三閱月ふして羅馬ついに敵の大軍に落つ、而してガリバルヂは羅馬を去るの後猶ほ力盡るに至る迄、壞地利及ひチープルスの兵と戰はんと欲するの決心を述て曰く「士卒等ふ予は汝等の勞苦に報るに饑渴を以てするの外なし、汝等若し疲倦せば宜敵地に臥し日光に煖を取るべし、予は汝等に拂ふべき金錢なく汝等に給すべき糧なく又汝等を含すべき宿營なく、唯常に戒嚴し衝を破て進み、銃槍を揮て敵に接するの外、他あるとなし、隨勝利を愛し盟を以太利に絕たざるものは予ふ隨ふべし」と

應して氏に隨ふもの幾ど五千人に及ぶ、亦以て氏が勢力の盛なるを見るべし

ガリバルヂ再び船乘と爲り强國の專制以太利に再興す、並に子ープルスの形勢

ガリバルヂは敗後、集むる所の兵を將ゐ、進でヴェネシヤに至らんと欲せしが墺の大軍北部諸洲に充塞して路を遮り遂に果すを得ず、氏は此の不幸に加ふるふ其最愛の妻アニタ、退陣の途上、氣脫して死するに遭へり、是に於て氏自らサルヂニヤの北東岸に位する小島カプレラに退き、爾來其島地は氏の住居せるに由りて世ふ著名となる、其後氏は再び西方ふ碧眼し更に好時機の以太利に發するに至る迄、或る職業を新世界ふ得て自ら生を營まんと決し其三子の養育を以て曾て故鄉ニースにて氏が竹馬の友たりしヂイヂリ氏夫婦に托す、但し其女テレサは千八百六十一年ジェノアの市尹ガンショに嫁せり

千八百五十年に當りガリバルヂはニューヨルク府に在りて其前年曾て以太利に於て同謀の將たりし畜友ジョーセフ、アヴェッサナの管掌せる烟草舖の隣戶に一小店を開き蠟燭を製造販賣し、以て生計を營みしが、其後南米ビーリニー國に行き、支那と貿易の

用に供せる商船の長となりて再び海上に生業を執り、千八百五十四年復た合衆國に行き米利堅運輸船コムモン、ウエルス號の船長となる、其後歐羅巴に歸りコースとマルセールスの間に商貨を運送する燕瀧船の號令を執る、而して其職を保つと殊に久ふして數年に及べり

是時に當り顧みて以太利の形勢如何を察するに、其自主自由を歴する專制の猛威は縱ひ千八百四十八年と四十九年の事件に由て、太く震盪せられたりと雖も、爾後再び其地に於て自ら遂ふするの時を得たり、今之をネープルス一國の形勢に觀るも以て其君主が切に彼の兩年の革命の亂よ由て獲たる教戒を棄んと欲するの意向を知るに足るべし、即ち暴虐無道の君フエルヂナンド二世は他の歐洲諸國が已れの所爲を見て嫌惡憤怒せるにも拘はらず、敢て刻薄殘忍の政を施し以て其の權威を煽ならしめんと欲し、酷刑を以て政事上の犯罪人を待つと、彼の宗教紀察の暴威猖獗ある時と異ならず、例へば既よ廢せられたる國會に於て鏘々の議員たりしカーロ、ポーエリロを鐵鎖に縛して獄に繫ぎ、之をして街衢に塵を掃はしめ、僧侶、窮民及び無數の兵を駈りて兵を御するの利器と爲し、就中其の近衛の瑞士兵を以て已れの威權を執行するに有益のものと恃み、英、

佛の內閣は王の政策に對して甚不可なるを論じ又英の政事家パルメルストン並にラッセルの兩公より書を送りて王の執れる政策は結局王をして位を失ふに至しむべしと忠諫せしも王は之を冷笑に附して顧みず、獨チープルス府に傍る高阜のセントエルモに備へたる城巨砲に依頼し此處より俯してチープルス府に爆彈を注がば數時間にして全市府を破壞するに足るべしと爲せり、因て西歐諸強國はチープルスと外交を停止せしかば憫むべし王は孤立して其虐政を守れり、是時伊國クリミヤの戰爭已に起りナユルナヤの交戰に於てサルヂニヤの軍兵見るべきの戰功あしと雖も、千八百五十六年巴里の條約に於て其議に與れり(千八百五十三年カウントカヴオル、サルヂニヤの賢王ヴヰクトル、エマニエルの首相と爲る、氏は十九世紀の政事家中最も才能の聞へあり、切に以太利の統一不羈を望み、此目的を達するに肝要の方便として氏い千八百五十五年に於て王に勸めて英、佛と同盟し、クリミヤの戰爭に加らしむ、蓋し氏の意に以爲く以太利若し英佛の爲に有益なる同盟國と思はるゝに至らば則ち同國をして以太利を援くるの念を起さしめ、其獨立の功を速にするを得べし)と而して其戰爭はセバストポールの陷落を以て局を結び千八百五十六年同盟の諸國は墨國と佛都巴里に會し

て和を講するに當り、カヴオル此機會に乘じて他の以太利諸邦國人民の慘狀を歐洲諸強國政府の代表者に具陳したれば乃ち英、佛の政府は以太利暴君の一人、フエルヂナンドを論責し、王の其言を容れざるより終に外交の和親を傷け両國の公使チープルスを退去するに至りしなり千八百五十九年サルヂニヤ、墺地利と戰を開き拿破崙三世チヤーレス、アルベルトの嗣子ヴヰクトル、エマニエルに連合して倶に墺國と戰ひマシエンタとソルフエリノの戰に於て墺軍敗を取りロムバルヂーの地を佛蘭西に讓與せしよ拿破崙は密かにサルヂニヤと謀りてニースとサヴオイを佛國に併せ其報としてロムバルヂーをヴヰクトル、エマニエルに讓與せり、是に於てガリバルヂ(ニースの人)は其身、土地と共に變じて佛蘭西貫屬の人民と爲れるを見て事甚だ意外に出で素其の好まざる所なるを以て大よそ之を憤怒したりと云

千八百五十九年ロムバルヂー以太利の有に復す

是時ガリバルヂはカプレラ島に住居せり、氏は數年前其母の死去に由りて千六百磅の遺財を受けたるに由り其の五百二十磅を以て此嶋地を購ひ乃ち之に住居したるあり、サルヂニヤの首相カウントカヴオルは賢能の士にして千八百五十九年能くヴヰクトル、エマニエルの朝議を動かしサルヂニヤの墺地利と戰ふに於てガリバルヂを用れば大に以太利の爲に益する所あるべしと爲し朝旨を以て之を召す、ガリバルヂは直ちに之に應じてカプレラなる住所を發し數ば朝に入りてヴヰクトル、エマニエルに謁見し互に愛慕の情を結びガリバルヂ分隊將の官に任じ義勇隊を將るの命を受けり

此戰に由りて以太利統一の事遂に定まるを得唯其全成は猶は是より後年に在りとす、其の墺地利と戰ふや舊のカリバルヂ黨は再ひ氏の周圍に集りて隊伍に入り縱ひ軍務卿デラマルモラは法式に拘泥して之を練習なき烏合の兵となし更に規律あり進退度あらんことを望み且ガリバルヂを輕蔑して正戰に適せざる獨立奇戰隊の將と爲せりと雖、氏の力能く戰の勝を制して敵軍之が爲に敗れ墺地利の以太利に關する威權此に全く斷たる、是に於てタスケニー、モデナ、パルマ及びリユツカより成る所の以太利中部の人民は皆てヴヰクトル、エマニエルの管理を望みピードモント王國の版圖に加らんとを唱へて其聲大に騰しく、其君主等は既に墺地利の援を得るに由なければ各々遽かに其國を逃れ統一の勝利累りに其歩を進めしが偶まヴヰルフランカの條約(拿破崙三世サルヂニヤと連合して墺地利と戰ふ中、普魯士の遂に墺と連合して其軍を援けんとを

恐れて此條約を結び墺と和す成るが爲め事、中道よして止みぬ、其條約の一款に逃走せる以太利中部の諸君主を復位せしむへしと定めたりと雖も以太利の人民は寧て此條を否み斷乎として墺地利の被保護者たらん事を拒めり

チープルス王フランシス二世、並にガリバルヂ細々里に遠征して奇功を立つる

ガリバルヂは既に以太利全土の人民をして寧て其獨立の爲に戰はしめんと欲したるに、斯く意外の休戰に會ふて長く以太利統一の成功を奪んとするを慨みしが、恰かも好し、一切の力を外國に假らず又之に詢るを要せず自己並に其黨の兵力を以て志業を果し得べきの機會に際するに至れり、即ち惡逆のフェルヂナンド既に死して其子、懦弱輕佻のフランシス二世位を嗣ぎ、害毒恐るべき大爆彈王に代るに一の庸愚賤しむべき小爆彈王を以てせり、是れ其の僧侶黨の常に掌中に弄する玩物に過ぎざるものなり、王の時に至りてチープルス王國は其首府を初めとして諸處に騷亂起り、王の備ふる大兵を以て之を鎮制すと雖も衆寡しくサルヂニア王ヴヰクトル、エマニエルの統治を望むの意を示しければ所謂る獨立奇戰隊長ガリバルヂは即ち此機に乘じて勇猛なる快圖を

行へり然れども其事の極めて危險あるが故に其未曾有なる奇功を獲るに至る迄は人之を論て粗暴思慮なきの擧となせり

千八百六十年五月の初ガリバルヂは舊と將る所のロムバルヂ兵と併せて士卒一千人を集め、ガニノア港を發して細々里嶋に渡りチープルス艦隊を誘て嶋の西端に近き、マルサラに上陸せしに、更に島民の連合するありて其勢力を加へ、進んでパレルモ府の內外に陣せるチープルスの軍と當る、其軍二万五千にして且海軍之を援くと雖も、モンリールとカタフヲミに於てガリバルヂの破る所と爲りパレルモに退けり、是よりガリバルヂの援兵續々至て上陸しければ其軍增加して二万に及び親ら之を將ゐ且數個の野戰砲を具へてパレルモを圍めりチープルス軍の士卒周章措く所を知らず、拒戰暫時にして悉く守兵を撤して去る、是に於て此の擧の初め成功の望なきと凡そ以太利救濟の擧始りてより其の尤も甚しきものなりしも遂に漸く著大の功績を奏せんとするの境遇に及べり

チープルス王フランシスは斯く事の成行けるを見て是れ即ち其の國の存亡に關する所とし驚愕狼狽出る所を知らず、唯斯る場合に於て其父の曾て擇へる計略を心に記せ

るを以て乃ち命じて爆彈を用ゐバレルモを砲擊せしむ、然れども王は徒に其兵の衆を恃み絶て强盛なる政黨の望を得べき計を爲さず、其兵メラッヂに於て敗績するの後メッシナの城塞より退きたればガリバルヂは全島を占領して自ら總督と稱せり、是に於てサーブルス王は憲法の定設を約し英、佛の兩國に向て革命黨を鎮制するの援兵を請へりと雖も兩國は其情願を却けて顧みず、是れ固より其の所なるべし

以太利王國の建設、並にガリバルヂとヴ井クトル、エマニエル

北部以太利に於てはガリバルヂの細々里に於て奇功を獲たるを聞き人心の昂起大方あらず、到る處の人民自進で役に赴き軍食壺漿して以太利統一の十字軍を迎んとせり、是時サルヂニヤ政府の大目的は已に大河の決して流るゝが如き以太利全土の革命に關して佛帝の認可を得るに在り、故より拿破崙三世は以太利の境界ある其の新領地を經てサルヂニヤに臨み首相カヴオル並にファリナと會合して輙すく其贈を了す、八月ガリバルヂの兵細々里より海峽を越て以太利本土に入る、サルヂニヤ政府は佛帝との會議に基き騎馬法皇より公書を送りて其の外國兵を解かんことを勸む、法皇之を否で用ゐざ

りしかば乃ちサルヂニヤ、ピードモントの大軍を派して法皇管轄の諸州より進擊す、以太利の南部既にガリバルヂの大舉あり今又其北部に此擧ありて一時に大業の駸々として步を進むる此の如し、而して法皇の兵破られて潰散し、其將フモリシュル(曾て佛蘭西より追放せられたる兵將)遂に止むを得ずアンコナの城塞に於てサルヂニヤの軍に降る、是時より方りガリバルヂ咄嗟の間よりチーブルスに入りしかば王は五萬の正兵を以て退てカプーアとガエタを守りしが大にヴオルチユルノに戰てガリバルヂ又勝利を獲フランシス其敗兵を收めて自らガエタの堅城に入り固く鎖して籠居せり

是より先きガリバルヂは其意をサルヂニヤ政府に告て曰く「宜しく羅馬首府に於て以太利の不羈獨立を天下に公告すべし」と然るに是時に至りて氏が全く外國の關涉を攘はんと欲する熱心を阻遏するの事情起れり、但し是れ外國との商議より成りて以太利の爲に既得の利益を鞏固ならしむるに緊要の策なり、蓋しガリバルヂは外交の術より遠せず必覺其決心の如く驟く盤根錯節を破て遣す所なきは事の實際より於て能はざる所なり、氏が特に望む所は佛兵を羅馬より墺兵をヴエネシヤより驅出して全く以太利の地に外國の關涉を絶たんと欲するに在りて常に以太利國民の兵力を負み此目的を遠す

へしと爲し、敢て自ら疑はず然れども内外の實務を看破するに至りてはガリバルヂの智は未だカヴオル及びチユリンの内閣に及ばず其政府以爲く「若しガリバルヂの欲する所に從て二强國と戰を開く事あらば却て以太利復興の爲に獲たる好結果を亡ふの恐あり、其寄や厳直自ら疑はざるガリバルヂをして極端詭激なる黨派の器具たらしめ、覺に半島内の諸政府連合して逆に之と衝爭するに至らんと必然なり」と幸にしてガリバルヂが潔白なる忠節に由りて此の危難を避るを得たり、其の愛國の名譽赫々として燁なると此の大奇功の年を以て最とし終に其總督の權を以てヴヰクトル、エマニユエルに讓り以太利王として之を拜し然後共にチープルスに至て凱陣式に列し其功勞に對して君主の與へんと欲する官爵富貴を辭すると古昔羅馬の總督シンシンナチユスに倣ひて其所有の小島カプレラに退けり

ガリバルヂ勇退の理由並にチープルスの凱陣

ガリバルヂが其大業を成就するや直ちにシンシンナチユスに倣ひ勇退以て其名譽を全ふしたるは必ず王との商議に出てたると疑ふべからず氏が悉く外兵を驅出し羅馬

府より以太利の獨立を公告すべき希圖の成功を疑はざるは稍や妄想に失するものにして王は巧に氏を制止して軍を羅馬より進めしめず且首相カヴオル並よつツリニは各々ガリバルヂの希圖を以て危害の業と爲せり蓋し賢能にして王の最も親信せる輔相カヴオルの將來を先見して事を慎むは廉直にして且熱心なるガリバルヂより之を視れば恰かも怯懦にして妄に事を畏懼せるものゝ如し、故にガリバルヂは其事を以て屢々カヴオルと論爭しつツリニを以て漫に猜疑するの人と爲せり

ガリバルヂの兵、凱陣してネープルスに入るの時、英都倫敦より二隻の滊船よて運送したるガリバルヂ軍の新募英人隊も亦之に加はり、以て英國の此式に列れるを代表せり、其兵後れ至りて最も劇烈なる戰爭に從事すると能はざりしと雖も大に以太利の爲に有益の運動を作さんとするの心ありき、英人の軍隊ネープルスの地よ上陸するの後サルヂニヤ王ヴヰクトル、エマニエル並に以太利の濟世家ガリバルヂ馬を駢べてナープルス府の街路を通過せり、其の景況は頗り之を目擊したる人の記あり能く其精を寫すものと謂ふべし（譯者曰其記は本書紙數餘地あきを以て略す）

後數日を經てガリバルヂは甘じて以太利の本土を去り小島カプレラよ退隱す、蓋し已

れ潮は政治世界に在るゝ由て徒らに外國と爭端を開き、大業の成就を害せんとを恐れ寧ろ其身退て國の爲に功勞結果を全ふせんと欲すればなり、其の退くに當り英船ハーパル號に往て提督マンヂーに別を告げマンヂーを待つに將官相當の禮を以てす、須臾にして艦隊總督ガリバルヂは其身に佩る所の大權を奉還し漁船華盛頓號に乘りてカプレラの家に歸れり、嗚呼華盛頓と名くる船にして斯俊大の以太利人を載せ之を家に運するとは、其船名の好く斯人に符合する淘に奇なりと謂ふべし、何とあれば其乘客たるガリバルヂの心意、恰かも彼の俊大なる亞米利加の愛國家、讓治、華盛頓と相合し、其希國の業を成就し其國の自主自由を達するの後自ら富貴官爵を辭し大權を讓て野に退けるの迹は彼此相異なる所なければなり

是時に至る迄ガリバルヂに從ふ者は皆涙を注て氏と訣別し久しくヂープルス港の海濱に躊躇して華盛頓號を凝望し又去るに忍びず、遂に船は一聲の漁笛と共に氏を載せ去て影を留めず、顧ふに斯く氏が本土を去るの前、數月の間に行へる所實に全歐洲諸國の歎稱する所と爲りしが今や其大業の時期を終るに至れり

ガリバルヂ、カプレラの住所に在る事並に其家の質素なる事

ガリバルヂが自ら退隱を告示する所の文は清楚に書し且能く其主意を盡せり、其文ゝ曰く、以太利人民の鮮血を以て其國土を贖得し、且予をヂクテートル官たらしめたるヂープルス人民は今や立憲の君主ヴヰクトル、エマニエル及び其子孫の管下に在て分離すべからざる以太利國の一部を爲せり、故に予は王の至るを待てヂープルス人民が予に與へたるヂクテートルの職權を奉還すべし　ヴヰーガリバルヂ

其の國事を聯てヴヰクトル、エマニエルに委し自らカプレラに退きしとき、家人其有の實金減して僅かに三十磅を殘すに至れるを告げしに氏之に答て曰く「憂るゝ勿れ吾がカプレラ島には多量の玉蜀黍と羊毛あり、宜しく之をマッダレナに輸して賣り金に代ふべし」と

カプレラに於てガリバルヂが住居せる家宅は其質素なること之に及ぶものなし、千八百六十一年即ち氏が之を修築するの前にありては、國屋上なる方形の一小白屋なり、其年、氏を訪へるコロネル、ヴエッキーは曰く、其白屋は平坦なる處に在りて一方は大岩石ありて之を繞り一方は墻壁を建て之を圍み、門は移動すべき欄干作にして恰も牧場に用

る如き竿を横へて之を遮れり、屋の周圍より一條の通路あり通路の一方、即ち屋の前面の方には數本の竿を地に樹ゆ、是れ夏日葡萄樹の支柱に供せるものなり、家に入れば一の前房あり、左はマダム、ディグリーの寢室に通じ右は將軍の居室に至る、屋後より當りて階梯あり、登て屋上に至るの用に供ム、總なり暗き處を過れば小寢室と廚房あり、廚房の右側には酒蔵を設け、左側には食料閣あり其より通じて書記室あり、寢所と武庫の用を兼ね、其年八月予の始て其家に至りし時は屋内唯一脚の椅子ありて而かも背緒の缺なきものあり、然るに今日に於ては柩材の椅子數脚あり、是れ瀛船蓬嶋號の役員と水夫の贈る所にして、皆其背面より進贈者の名を刻す、又胡桃製の椅子數脚あり、是はディグリーの有に屬す、將軍の居室も亦前に見る所に比すれば較や多くの器具を供へ、鏡製にして質素なる小寢盛あり、綿紗の輕帳を以て蓋ふ、胡桃製の机あり、抽斗を多く具へたる箱あり、其上に整裝鏡を載せ、北方を望むべき窓に塞がれり、寢床に接して濶き櫃あり、書冊と書簡之に堆積す、一條の索を壁より壁に渡して之に將軍の赤襯と共他の衣服を懸けたり、是し氏は其業を更る毎に服裝を變するが故あり、火竈は室の終る處の壁の中央に設け、溫氣を戟すが爲に薪材常に其内に燃ゆ、是し石牀の下に水溜あり、降雨には溜筒より

注下する雨水を承るに由り、牀下之が爲に泥水を以て汚濁するが故なり火竈の両側より脊柳を設け、内に兵法書、歴史、及び船乗より關するの書を纏す、然れども書冊の在る所は獨り架内に止まらず、凡そ室内に備る器具の置平なる處には必らず書冊の上らざるなし、火竈の上に水色ある畫像の懸るあり、是れ氏の嬰女ロシタの肖像にして曩にモンテヴデオに死せるものなり、烏木を以て製せる寢床の枕頭には剛勇の女丈夫なる氏の妻アニタの遺髮を懸く、要するに往古スパルタの勇將が退隱所の質素なるも未だ之に過るものの有らざるなり

カウント、カヴオルの事、並に千八百六十二年ガリバルヂ再び征討の師を起してアスプロモントに捕虜と爲る

千八百六十一年以太利王國始て國會をチユリン府に開く、ガリバルヂはナープルスの代議士に擧げられたれども會ま病に罹りて開會の初其席に列ること能はず、然れども幾ならずして病癒へ議場に出るを得たり、是より先きカヴオル、ニース、サヴオイの地を割て佛國に讓りし故を以てガリバルヂは太くカヴオルを惡みしが、是時に於て始めて両雄相和するに至れり

其後幾もなくしてカウント、カヴオル卒したれば即ち以太利は慧敏温和の相を失ひ、其統一事業に取りて大に哀しむべき境遇に陥れり、是に於てリカンリ並ヨラッターリ纏て相たりしが、二人孰れも大に國民の信依する所と爲らず、ラッタシーは墺佛と衡爭し常に羅馬、ヴエネシヤを併すを以て行はるべき事業と爲せる愛國黨の望を獲んと欲し遂にガリバルヂをして之に乘せしむるに至りしが、ガリバルヂは諸り其擧に於てラッタシの意を誤解せるものと爲れり、如何となればガリバルヂは自らヴエニス又は羅馬を征討するの事を擧くれば政府直接に之を助けずと雖も寛大ヨ之を看過し敢て問はざるべしと思ひ、其ヴエネシヤを進擊せんが爲に義勇兵を徵募するに當りて遂に政府の禁遏する所と爲りたればなり、是ヨ於てガリバルヂは大に不平を懷きて南下し、到る處に於て激烈に其衷情を吐露したり、蓋し氏はラッタシーの已れを用ひんと欲する所、實にヴエネシヤと羅馬の救濟に在るに非ざるを解すると能はざるに由るなり、其ヨり氏は細々里に至り曾て事を共ヨしたる舊友パラヴヤシニが其地の將帥たるヨ會ひ、其都府パレルモヨ於て王の長子プリンス、ハムベルトの臨席せる施條統會議に臨で更に征討の師を組織せんと欲するの意を公然と演述せり、是時に當り王の名を以て斷然

令を下しガリバルヂが起さんと欲する義擧の不法にして且一個臣民の身を以て私に軍事を企るの不都合なるを諭示したらんには、乃ちガリバルヂは其國を思ふの義に於て其命に服するを懈らざるべきにラッタシーは猶ほ事を時情に任せて斷行する所あかりしかば、遂にガリバルヂは細々里より本土に渡り、羅馬ヨ進擊して更ヨ以太利統一の進歩を補はんとせり、吁嗟是時ヨして氏、若し佛兵と會戰し佛蘭西帝國をして新立の以太利王國を敵とするに至らしめば、其事曾ふべからざるに至り、恐くは回復の期なからん、然れども氏の擧、幸に此に至らずして早く政府の制遏する所と爲る、即ちシヤルヂニ、並にデラ、マルモラの二相、之を以て極めて有害ヨして必ず以太利を危急の地に陥らしむべきものなりと爲し、直ちに兵を發して公敵ガリバルヂを邀へ戰はしむ、故にガリバルヂは進でカプリヤ州アスプロモントに至りし時、王の輕兵ベルサグリーリの一隊、路を塞ぎて通ずるを得ず、因て暫く此に小戰せしがガリバルヂは輙ち敵の彈丸に中りて骸部を傷し脚目に重傷を負へり、是に於て令して砲擊を止め、両軍其愛國救濟家が以太利の彈丸に傷けられたるを見て齊しく之を惆悼し捕へて之をスペジヤヨ幽し更に之をヴヲリグナノヨ移せり、然れども政府、氏を待つの厚くして其幽囚は唯其名ある

に過きず、且全歐洲の人、擧て之を憐み倫敦、巴里より國手の外科醫を遣して其傷痍を診査し、治療を助けしめたれば久しからずして再びカプレラ島の住所に退くを得たり

ガリバルヂ晚年に及びヴエニス、羅馬を併すを得て遂に其希望を實にす

ガリバルヂは豪俠なる國民の愛憐と曰れを欽慕せる知友等の看護に由りて漸く其健康を回復し、全身强壯となりたれば再ひ以太利の自主權を全ふせんと欲するの希圖を起せしが、其志を妨ぐる事情の爲に猶ほ遲延して未だ果さずと雖も、亦其事を擧るの望あしとせず、千八百六十四年ガリバルヂ英國に遊びしよ英の官民、熱心よ之を慰待し人民驩呼狂するが如くありしかば、拿破崙三世は公書を送りて英政府に忠告し、其不可なるを論ずるに至れり、其後二年を經て千八百六十六年に當り普、墺の戰爭起りしかば、以太利の爲には亂て以て夙望を遂るの好機會とあり、即ち普魯士の同盟となりて其戰爭よ加りたるよ由り敢て戰爭上の勝利を獲ずと雖も是に由て墺地利遂にヴエネチヤの地を佛蘭西に割與し、佛蘭西更に之を以太利よ讓りたれば、是に於て始て一の夙望を達するを得たり、而して此結果たるや一方よ於ては以太利統一の基礎を補ふの外、墺地利

も亦之が爲に常に危險にして且勞費多き屬地を棄るを得るに至りしものなり、斯る戰爭にはガリバルヂの必ず出現すべき所よして氏は已よナポル義勇兵の將に任ぜられしがサドワの一戰にて墺地利の威、全く折け復た戰ふを要せざるに至りければ氏は大よ戰爭上の功勞を顯いすに暇あらずして止めり

爾て次年即ち千八百六十七年ガリバルヂ及び非黨輿は又も羅馬よ進擊せんとするの準備を爲し、其敗隊既に羅馬領の境界よ入りしが終に政府の禁遏する所と爲り、其後千八百七十年普、佛の戰爭起り佛國已むを得ずして羅馬より其守備の兵を召還せしかば法皇の政府は戰を須たずして自から挫けたり、因りて以太利の兵直ちよ羅馬に入る、是時ガリバルヂは齡已よ耳順を過ぐと雖ども猶矍鑠として陣營の間に周旋し、初志の如く覺に羅馬を以て以太利王國の首府と定むる旨を公告せり、故に茲よ氏が以太利半島の中原に馳騁盡力せる政事上の傳記を結ぶは誠に適當と謂ふべきなり

評論 世界人傑詳傳 終

明治廿五年五月一日印刷
仝　年仝月三日出版

正價金四拾錢

譯者　東京本所區林町二丁目五十八番地　元木貞雄
發行者　同　日本橋區若松町廿一番地　榊原友吉
印刷者　同　神田區柳原河岸第十四號地　田中正造

版權所有

大賣捌所

大坂市　梅原龜七　東京市　大倉孫兵衛
仝　柳原喜兵衛　仝　小林喜右衛門
仝　松村九兵衛　仝　目黒支店
仝　田中太右衛門　仝　長嶋恭三郎
仝　吉岡平助　仝　内田芳兵衛
仝　三木佐助　仝　水野慶次郎
京都市　梅原支店　仝　小林新兵衛

各地賣捌所

尾州名古屋市　川瀬代助
仝　三輪文次郎
信州長野　西澤喜太郎
仝　松本　水琴堂爲吉
仝　松栄堂栄吉
仝　高美甚左衛門
仝　飯田　増川半四郎
仝　阪下　丽澤定次郎
陸前仙臺　伊勢安右衛門
仝　高橋書店
仝　石ノ巻　山口德之助
野州宇都宮　田中正太郎
仝　高木正々堂
下總古河町　高木豊吉
仝　境町　高木直次郎

仝　初見政吉
仝　水海道　飯塚孝助
岩代福島　萱間左右太
仝　上野屋彦太郎
鹿兒島市　吉田幸平
熊本市　長崎次郎
越後三條　樋口屋小左衛門
仝　野島半七
武州川越　明文堂定次郎
仝　岸田屋關太郎
仝　水村岩三郎
仝　西田勝次郎
仝　八王子
仝　栗橋　塚本元治郎
上州館林　糸屋太吉
武州幸手　大里忠平
仝　越ヶ谷　鶴屋利助

27
142

27
142

004011-000-9

27-142

評論世界人傑詳伝

H. W. ダルケン/著

M25

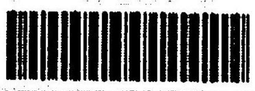
ACE-0317

004011-000-9

27-142

評論世界人傑詳伝

H. W. ダルケン／著

M25

ACE-0317